応用心理学のクロスロード

特集 日本応用心理学会第89回大会報告

特別企画 異分野学際研究のススメ

16

2024 March

JAAP 日本応用心理学会

応用心理学会の若手への期待

蓮花　一己　（帝塚山大学）

応用心理学は社会での問題解決を目的とすることが多いが、そのためには、当該社会の理解が不可欠である。筆者の専門分野の交通心理学を例にとると、交通社会でのドライバーや歩行者など交通参加者の行動を正しく理解しておかないと効果的な問題解決の方策は出てこない。つまり、「社会での人間行動メカニズムの探求」という基礎分野と「社会での問題解決」という応用分野の両方を含んでいる。若手研究者の皆さんも、基礎と応用のどちらにも目を配って努力して欲しいし、学会でもその両面を踏まえて研究水準の向上に努めて貰いたい。

応用場面での課題を解決するためには、学際的協働や産学官連携などが求められる。筆者が学生や大学院生であった頃には、大学研究室に多くの方々がひっきりなしに訪問してきた。交通・産業分野で言うと、交通安全協会や日本自動車連盟、国際交通安全学会、警察や行政関係者、自動車メーカーや電力会社、出版社などの方々である。あまりに頻繁に来られるので、筆者も知り合いになり、いろいろと教えて頂いた。挨拶の仕方やネクタイの絞め方から始まり、車の運転の仕方、警察の取り締まりの仕方、事故の起こり方までいろいろと教わった。そういうネットワークに入ったことで、大学に教員として勤めるようになってからも、そのネットワークを活用して仕事が大いに進んだ。

一つ言えることは、ネットワークは大切であるが、一朝一夕にはできず、長期間の継続が大事だと言うことである。年長の先生方はそうしたネットワークを創って、そのネットワークに若手を加入させる義務がある。国際的あるいは学際的ネットワーク、さらには地域や産官学連携のネットワークも基本は同じである。筆者自身、恩師や先輩達のネットワークを活用してきて今日があると考えている。実は、活用している時には、先輩達のお蔭と考えたことはあまりなかったが、今日、自分で研究や活動のネットワークを運営していると、昔の恩師や先輩達に対する深い感謝の念が湧いてくる。

筆者が応用心理学会に参加したのは、大学院生の頃であり、現在を40数年前に遡る。論文でしか知らない著名な先生方と大会でお目にかかり、親しくお話しすることができた事は、本当に嬉しく、今でも感謝している。

懇親会で日本酒が並んでいるところに行くと、何名かの先生方がたむろしていて、「君は誰だ？お酒を知っているのか？」などと絡んでくる事が多かった。そのうちに、何度か行くと、「おお！またお前か？こっちもうまいぞ。」などとうんちくを教えて頂いた。「何を研究しているのか？」「交通心理学です。」などと研究の話がそのうちに始まって、なかなかお酒を飲ませてもらえない事も多かった。

今から思えば、別に大会の準備委員でもなく、

蓮花　一己（れんげ・かずみ）／ 帝塚山大学客員教授・名誉教授。京都府出身。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程。帝塚山大学教養学部講師、心理学部教授、心理学部長等を経て、2017年4月より帝塚山大学学長。2023年3月退職。交通心理学を専門として、ドライバー行動や事故多発地点の分析、交通参加者への教育手法の開発等の研究を実施。近年は、高齢ドライバーの運転行動や対策の研究を実施中。ドイツ、フィンランドに留学及び在外研修。内閣府第7～11次交通安全基本計画専門委員/日本交通心理学会会長/日本応用心理学会理事/（一社）日本自動車連盟副会長/（公財）国際交通安全学会理事/科学警察研究所顧問等。

自分が用意したお酒でもないのに、どうしてあのように若手に振る舞えたのか、若干不思議でもあるが、分野や年齢を超えて、先輩の先生方と触れ合えたのは若手にとって貴重な経験であった事も事実である。そういう訳で、私が2007年に奈良で開催した応用心理学会第74回大会においても、奈良を中心に地酒を懇親会場に並べて大盛況だった(勝手に銘酒の一升瓶を追加された先生もおられて驚いたこともあったが)。

応用心理学会の理事や常任理事時代には、国際交流委員会での活動が多かった。1990年に京都で開催された国際応用心理学会第22回大会では事務局の一端を担当し、それを皮切りに、マドリード(スペイン)やサンフランシスコ(USA)など個人で参加を続けた。さらに、2002年のシンガポール、2006年のアテネ(ギリシャ)、2010年のメルボルン(オーストラリア)では、日本応用心理学会の招待シンポジウムを企画し、実施した。

私自身、1982年から1984年にかけて、ドイツへ留学したこともあり、当時の西ドイツでドイツ応用心理学会に参加したのをはじめとして、国際会議には参加する機会が多かった。最近は、国際応用心理学会の第13部門(交通運輸心理学)の部会長として、企画運営の仕事をしてきた。コロナ禍でも、オンラインでの会合を通じて、大会の企画を担当者と打ち合わせる事も多かった。オンラインで拙い英語でやり取りをしてきたが、アメリカやヨーロッパの先生方には、多くのサポートを頂いた。こうしたパーソナルな関係性がないと、国際交流は長続きしない。さらに、国際専門雑誌の編集委員を務めていたこともあった。英文査読をすることは労が大きいものの、他の査読者のレビューに接する機会が得られることで、査読の観点やコメントの表現など勉強になることが多いというメリットがあった。

国際交流委員会では、国際応用心理学会の大会に参加する若手研究者への支援を行うと共に、大会発表に関する研究論文を学会誌『応用心理学研究』の特集号に掲載した。多くの投稿論文が集まり、査読者の確保やその査読の進行チェックなどに苦労した。世界で活躍するためには英文論文が必要であり、採択された方々から、感謝された思い出がある。

新型コロナの流行に伴い、2022年に予定されていた北京大会が中止となり、2026年に第31回大会がフィレンツェ(イタリア)で開催されることになった。ぜひ、多くの会員の積極的な参加と国際交流を期待している。

国際会議に参加するのは、自分の研究を世界に紹介する事が目的だが、世界の研究者と知り合い交流することもそれ以上に大切な目的である。若い頃に知り合った研究者達とは、国際会議のたびに交流できるので、学会前後に気になる研究者の大学や研究所を訪問して交流を深めて欲しい。そうしてできた人的ネットワークが、自分にとっての生涯の財産となる。世界中に友人ができる事が、視野を広げるだけでなく、研究者としての生きる力に繋がっていたのだと、今振り返って思うのである。

CONTENTS

[巻頭言] 応用心理学会の若手への期待 …… 蓮花　一己（帝塚山大学）…… 1
[CONTENTS] …… 3
[特別企画１] 異分野学際研究のススメ …… 吉澤　寛之（岐阜大学・広報委員会委員）…… 4
[特集] 日本応用心理学会第89回大会報告 …… 13
大会委員長からの報告 …… 髙石　光一（亜細亜大学）…… 14
大会スタッフからの報告① …… 小川　悦史（亜細亜大学）…… 16
大会スタッフからの報告② …… 鹿内　菜穂（亜細亜大学）…… 17
大会企画シンポジウム報告 …… 木村　友昭（一般財団法人MOA健康科学センター）…… 19
自主企画ワークショップ報告① …… 松田　浩平（東北文教大学）…… 20
自主企画ワークショップ報告② …… 寅嶋　静香（奈良教育大学）…… 21
自主企画ワークショップ報告③ …… 大谷　亮（（一財）日本自動車研究所）…… 22
自主企画ワークショップ報告④ …… 近野　恵（富士通株式会社）…… 23
自主企画ワークショップ報告⑤ …… 塚田　直也（筑波大学附属視覚特別支援学校）…… 24
自主企画ワークショップ報告⑥ …… 田中　真介（京都大学）…… 25
自主企画ワークショップ報告⑦ …… 伊藤　令枝（日本大学）…… 27
研究発表報告① …… 村山　陽（東京都健康長寿医療センター研究所）…… 28
研究発表報告② …… 本多　麻子（東京成徳大学）…… 28
研究発表報告③ …… 井梅　由美子（東京未来大学）…… 29
研究発表報告④ …… 井川　純一（東北学院大学）…… 30
研究発表報告⑤ …… 高橋　明子（労働安全衛生総合研究所）…… 30
研究発表報告⑥ …… 中野　友香子（科学警察研究所）…… 31
研究発表報告⑦ …… 山内　春佳（帝塚山大学大学院）…… 32
教育発表報告① …… 山本　真菜（日本大学）…… 32
教育発表報告② …… 猪鼻　ももこ・佐藤　洋亮・露木　麻衣（日本大学）…… 33
教育発表報告③ …… 深見　将志（日本大学）…… 33
教育発表報告④ …… 藤澤　虎太郎（日本大学）…… 34
次回大会委員長の挨拶 …… 谷口　淳一（帝塚山大学）…… 36
[アワード] …… 37
齊藤勇記念出版賞受賞『高齢ドライバーの意識革命―安全ゆとり運転で事故防止―』
松浦　常夫 …… 37
若手会員研究奨励賞 …… 金山　英莉花（同志社大学）…… 38
学会賞（奨励賞）…… 田中　共子（岡山大学）
沼　柊門（メディカル・ケア・サービス関西株式会社）…… 38
優秀大会発表賞① …… 藤田　主一（日本体育大学）…… 39
優秀大会発表賞② …… 塚田　直也（筑波大学附属視覚特別支援学校）…… 40
優秀大会発表賞③ …… 有木　永子（日本大学）…… 41
優秀大会発表賞④ …… 異儀田　はづき（立正大学大学院/東京女子医科大学）…… 41
優秀大会発表賞⑤ …… 紺野　剛史（富士通株式会社）…… 42
優秀大会発表賞⑥ …… 森泉　慎吾（帝塚山大学）…… 43
優秀大会発表賞⑦ …… 種ケ嶋　尚志（日本大学）…… 43
[会員だより] 公開シンポジウム …… 45
「ネガティブな感情・心理の活用と応用」参加記 …… 谷田　林士（大正大学・広報委員会委員）…… 45
[特別企画２] 心理学部・学科以外で心理学を教える：異なる領域での挑戦
古谷　嘉一郎（関西大学・広報委員会委員）…… 46
[特別企画３] 理論と応用を両立する研究者へのインタビュー
谷田　林士（大正大学・広報委員会委員）…… 50
[書評　おすすめの１冊] …… 52
『隣の先生に学ぶ　心理学ベースの授業づくり』 …… 柿本　敏克（群馬大学）…… 52
[コラム＆トピックス] …… 54
雑学心理学 …… 森下　雄輔（大阪国際大学）…… 54
[特別企画] 応用心理士を対象とする調査報告 …… 55
田中　堅一郎（日本大学）
稲葉　隆（株式会社日本カラーデザイン研究所）
小林　敦子（川越市男女共同参画審議会）…… 55
常任理事会通信 …… 57
国際交流委員会 …… 川本　利恵子 …… 57
齊藤勇記念出版賞選考委員会 …… 川本　利恵子 …… 57
機関誌編集委員会 …… 上瀬　由美子 …… 58
学会活性・研究支援委員会 …… 田中　堅一郎 …… 58
広報委員会 …… 谷口　淳一 …… 59
企画委員会 …… 桐生　正幸 …… 60
倫理委員会 …… 田中　真介 …… 61
事務局だより …… 軽部　幸浩 …… 61
学会賞選考委員会～学会賞規程の改正について～ …… 木村　友昭 …… 62
学会史編纂委員会 …… 古屋　健・軽部　幸浩・藤田　主一 …… 63
心理学検定 …… 小林　剛史 …… 63
学会だより …… 65
2023年度日本応用心理学会学会賞 …… 65
入会申込書 …… 66
「応用心理士」のご案内 …… 小林　剛史 …… 67
「応用心理士」資格認定申請のご案内 …… 68
編集後記 …… 69

特別企画 1

異分野学際研究のススメ

工学研究者として異分野学際研究の先端を行く松下光次郎氏と、松下研究室の博士学生として異分野との開発実績のある大学発ベンチャー企業を起業する笹竹佑太氏が、心理学者が異分野との共同研究を進めるうえでのノウハウを、その魅力と裏側を含めて熱く語る。

インタビュアー：吉澤 寛之（岐阜大学・広報委員会委員）

異分野学際研究の魅力

――まず異分野学際研究の魅力について、松下先生からお話をお伺いしてよろしいでしょうか。

【松下】 自分自身がロボット工学者という専門を持っていることが重要でして、なぜかというと、ロボット工学というのはいろんな分野に役立つ技術という感じがあるんですよね。だから、コラボして新しい世界を開きたい、自らの分野と他分野の中間地点で新しい分野を開きたいということです。最近、教育・心理の人たちもAIとかIoTとかロボットとか3DVRとか、使いたい技術がありますよね。そこのところを一緒の意識を持ってやっていけたらいいのかなと思って、新しい教育を目指してそういう技術を実現するという目標に向かって、タッグを組んで実現するのがすごく楽しいところかなと思っています。

というのは、やはり心理の人は技術に手を出しにくい。だけど逆に、工学者は心理を知らないと。そこをどう補完して一緒にやっていくかが一番大事なところだと思いますし、異分野融合研究の姿勢、心持ち、どう研究をやっていくかというのもちゃんとやり方があるとは思うので、そういう教育も構築できたらいいなとは思っております。

――今、先生がおっしゃった心理の人は技術に手を出しにくいという点で、心理学者にとって、異分野の人と共同研究することで技術を補完できるというお話でしたが、分かりやすいところで言うと、心理の人にとっては工学のこんなところが魅力的だという具体的な話は？ AIの話もありましたが。

【松下】 最近の技術だとやはり3DVR。没入感があってリアルな感じを伝えることができます。3DVRを使って、現実ではやりにくいことを簡単にやれてしまう環境を提供できますよね。そういうものが教育の世界に少しずつ普及している段階ですので、もっと普及したら、何かしら新しい効率のいい教育ができるかもしれませんよね。

あとAIに関しても、まだまだChatGPTに対して排他的になったほうがいいのか、逆に教育の世界でどのように使えるかを考えるなど迷っている最中じゃないですか。私は実際にChatGPTでアプリなど作って体験しているからこそ、実はうまく使うといろんな教育の効果をレベルアップさせることができると思っているんですよね。だから、そのような技術の体験を一緒に行って、技術の感性をお互い育てていくのは大事なことだと思っています。特にAIとか3DVRとかを一緒に覚えてもらうことを大事にしたいです。

あと、ロボットはちょっと入り込みにくいかもしれませんが、IoTに関しては小・中学校の先生とも話したんですが、例えば、動物を飼育しているところもありますよね。それをIoTでやれたらいいよねとか、理科でも種の発芽をIoTで、今ま

では次の日に見て種が発芽していたというのを、１時間ごとに写真を撮っていれば、どう発芽して、どのタイミングでできたのか分かるということで、今までできなかった教育をそういう技術をもって教材レベルでもできればいいし、もしくは3DVRだと、心理的、教育的に活用できるものをどんどんつくって、少しでも新しい時代に役立つものをつくる努力をすることが大事じゃないかと思っています。

――応用心理学会ですが、教育心理学にも非常に参考になるお話かなと。興味深い御提案をいただきました。では、大学発ベンチャーも御担当されている笹竹先生、何かございましたら。

【笹竹】 研究室に所属してから５年ぐらいたって、最初から異分野の先生と、特に心理の先生や教育の先生と一緒に研究をやらせてもらっています。私達の研究は社会への実装を重視していて、世の中の問題を解決していく内容となっています。異分野との連携が研究の前提となっているかは研究によるんですが、私の分野では特に異分野との連携が重要です。私が一緒にやらせていただいている研究者の方々は世の中に新しい指標をつくることを目指している方が多く、そのためには実装に関する工学の知識が必要です。この視点が私の専門とマッチし、協力することができています。一緒に新しい成果物をつくり上げていくのはすごく楽しく、魅力的に感じているため、こうして博士課程まで続けているという背景がありますね。

特に現在の研究では、工学だけに限ったことではないと思うんですが、１つの分野では既に多岐にわたる研究がやられてきています。多分心理学もそうだと思うんですが、心理学だけの枠組みだと既にいろんな研究がやられているため、次のフェーズでは異分野で融合した研究を進めることが大事なのかなと思っています。人間の人生そんなに長いわけじゃなくて、究められるものの数は限られていると思います。そのため私は機械に焦点を当て、心理学や教育のプロフェッショナルと協力して新しいアイデアを生み出したいと思っています。この５年間で新しいものを作り出すことは１人では難しいと痛感したこともあり、自分の能力の限界を超えた挑戦を一緒にできることが、

対談者紹介（左：笹竹佑太氏、右：松下光次郎氏）

松下 光次郎（まつした・こうじろう）／ 1977年 静岡県生まれ。2007年に東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻博士課程を修了し、2008年よりマサチューセッツ工科大学CSAIL・ポスドク研究員、2009年より大阪大学大学院医学系研究科脳神経外科学講座・特任助教、2014年より岐阜大学工学部機械工学科・助教、2017年より同大・准教授。また2018年より大学発ベンチャー取締役も務める。

笹竹 佑太（ささたけ・ゆうた）／ 1996年 埼玉県生まれ。2020年に岐阜大学工学部機械工学科知能機械コースを卒業し、同年より大学発ベンチャー、株式会社ヒューロビントの取締役に就任。2022年には岐阜大学大学院自然科学技術研究科知能理工学専攻の修士課程を修了し、同年、別の大学発ベンチャーである株式会社ウェルラビィの取締役に就任。現在は岐阜大学大学院工学研究科工学専攻博士課程に在籍する。

異なる分野で活動中にすごく魅力的だと感じられました。

――先ほど教授とか准教授の先生と共同で仕事をすると、新しい指標をつくりたいという意向を持たれている方が多いというお話でしたが、具体的なエピソードはありますでしょうか？

【笹竹】　一例として、心理学者との協力では、学校や家庭の環境に関するデータをアセスメントし、それを元に新しいアンケートや指標を開発したいというケースが挙げられますね。データ収集のためには機器やタブレット、電子アンケートなどが利用され、そのデータを活用してAIモデルの構築にも取り組むことが可能です。このような異なる分野が協力することで、多岐にわたる成果が生まれることが期待されます。それが機械分野だけでは、データを集めることはできるけど、どのデータを集めればいいか分からなかったり、心理学の専門家だけだと効率的な収集方法が分からないという課題がお互いにあるため、やはり異なる専門分野が複合的に連携することが必要なのかなと思っていて。

小規模な研究組織内では異分野の連携は難しいことがありますが、企業では様々な専門家が一つの組織に集まり、新しい方向性を模索する傾向が見られるのかなと思っています。一般的に一つの研究室には、同じ専門家が集まることが多いと思うのですが、例えば大企業だと、工学者もいるし、他の専門の方もいるし、と組織内に異なる分野の専門家がいるため、新しいアイデアや方向性を積極的に生み出せるのだと思います。そういった民間企業が複数の専門分野で組織として成り立っているように、私たち研究者が異なる分野同士で協力していくことが、新しい方向性の取り組みができる組織をつくり上げることにつながると思います。そういった取り組みは、個人的に結構面白いのかなと思います。

――今、民間企業のお話が出まして、ベンチャーで関わられていますけれど、そういったところで、異分野で交流することの魅力は何でしょうか？

【笹竹】　現在私は株式会社ヒューロビントと株式会社ウェルラビィというベンチャーで活動しています。ベンチャー企業として関わるところでは、私自身は特別に研究と大きく違うところはないのかなと思っています。一般的には、研究と社会は異なるとされることが多いですが、私の視点では、どちらも基本的なアプローチは同じであると思います。どちらもやることは一緒なのかなと。違いがあるとすれば、ベンチャー企業ではその成果をどうやってマネタイズしていくかにより一層注力されるという点かもしれません。魅力という観点ですと、異分野交流での成果を製品化するところまでお手伝いできることはベンチャー企業だからこそできる魅力だと思っております。しかし、基本的な取り組みや目指す方向性においては、私自身は研究とベンチャーの活動が同質であると感じています。

研究の段階から一緒に異分野として協力をさせてもらっている分、ベンチャーにおいてもネットワークの拡大につながっていると思います。単に機械技術だけでなく、異分野の経験や専門知識を持ち込むことで、より多岐にわたる恩恵を受けていると思います。

異分野学際研究へのネットワークづくり

――実際に心理学者が異分野学際研究を進めていきたいというときに、どのようなステップでネットワークをつくっていくのかについて、特に松下先生は様々な異分野の先生方と関わられていますので、その点のノウハウを教えていただければと思います。

【松下】　異分野の学会に参加するのはどうですかという話なんですよ。

例えば心理の人が一番入り込みやすいところとしては、ロボット研究の発表会を持つ日本ロボット学会、計測自動制御学会、日本機械学会かなと思います。ロボットは機械とか情報とか電子工学が交ざっている複合技術でどのように役立つかを求めて研究していますので、心理研究の方向と一致したテーマや要素技術が多々あると思います。

だから、そういうような研究を紹介している学会に参加すると、あれって使えるかもという発見を繰り返すことで、技術を判断しやすくなっていくと思います。なので、心理の人がまずは学会に来てもらって、いろいろ見てもらって、これは役立つかなと思ったら工学者に声をかけてもらうでもいいと思うんですよ。異分野融合研究で一番できない理由になっているのが、異分野だから入り込みにくいという点ですけど、実は行けばどうにでもなると思います。特にロボット系研究はシステムをつくるということなので、心理学者抜きで心理系のためのシステムをつくっている場合もあって。逆に言うと、技術はいいものを持っているんですが、評価方法がそれでいいのかと心理の人が思うものも多いかもしれません。だから、それはいいものですね、私に評価させてくださいということで声をかけて交流をしてもらうだけでも全然変わってくると思います。僕は、その一歩を踏み出せるかどうかが異分野融合研究を成功させる鍵じゃないかなと思っているんですよね。

私自身は、心理の人がこういうことを知りたいと言っていたよと聞いたら、どこでもその人のところへ行って、一緒にやりませんかと聞くし、もしロボット工学者が出ても良い異分野学会があったら、見てこようと思ってとりあえず参加するという感じです。今度、山口ですけど、看護学研究系学会へ行く予定です。

そういうふうにチャンスがある、自分自身が理解できそうなところがあるならば、取りあえず行ってみて、何回かじっくり見ると、多分この分野の人たちってこういう考えでやっているんだ、じゃあこういうふうに声をかけようと見極められるということです。そこが私のスタート方法ですね。

ただ、文化とか言葉が違うので、表現はゆっくり気をつけつつやることが大事かなと思いますね。本当に外国留学と同じで、文化が全く違いますので、文化が違うことを理解してゆっくりと慣れ親しんでいくことがポイントです。

先ほどお伝えしましたように、ロボット研究に関わるとしたら日本ロボット学会、日本機械学会、計測自動制御学会が入口になるかなと思っています。特に、口頭発表ならば、毎年９月に日本ロボット学会学術講演会があって、そこで何か心理研究に合うのがあるとは思います。実際に、心理学者とコラボしてやっている研究発表も見たことがあります。また、もっと気軽に見たいならポスター発表が良いですので、毎年５月に開かれる日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会と毎年12月に開かれる計測自動制御学会・システムインテグレーション部門講演会（SI）が良いと思います。特にロボメカは参加者が1,000人以上になりますので、とても多くのポスター発表を短時間で見ることができると思います。この３つの学会が出やすくて工学研究者にいろいろ聞けると思います。

――ネットワークづくりという意味では、ベンチャー企業でも、新たに異分野の先生から依頼が来たりとかもあるかもしれませんが、笹竹先生のほうで何かございましたら。

【笹竹】 ベンチャーの側面での経験を通して感じたのは、アピールが非常に重要だということです。昨年からスタートした株式会社ウェルラビィでは、看護医療をロボットで支援する方針で事業展開を進めています。展示会や地元の応募に積極的に参加し、その結果として多くの声をかけていただけるようになりました。特に看護系の展示会では、関心を寄せてくれる方が多く、その場での交流からさまざまな可能性が広がりました。県の応募にも参加し、その縁でコラボレーションの機会が得られたこともあります。ベンチャー企業として、自らの強みや提供できる価値をアピールすることが重要であり、それによって新たな連携やプロジェクトが生まれることを実感しています。

また松下研究室で学んでいるノウハウを活かせる面も大きいです。機械の視点だけでなく、理学療法士や医療の方々が気になる部分を理解し、それに対応したアプリケーションやシステムを提供することで、相手方の興味を持ってもらうことができます。アピールを通じて一緒に取り組んでく

れる仲間が集まることで、新たなプロジェクトや事業が生まれる点は、ベンチャーと研究の両方で共通する面だと思います。

【松下】　１つ言い忘れたんですけど、共同研究するときに研究費をどうしようってお互い考えますよね。協力して一緒に進めたいのだけど今は研究予算がない。だから、次の科研費が通るまで待ってもらおうと思うことが。そこで言いたいことですが、ロボット研究者と教育研究者のお金の感覚って違っていて、ロボット研究者はロボットをつくるために物がたくさん必要で、しかも故障する場合もあるので予備パーツとかも沢山持っていなければいけない面があります。だから、材料とか道具とか元々研究室に手持ちの物があったりして、ロボット研究者は共同研究するために、初めから相手にお金を求めない場合もあるということです。

またロボット研究者の中には、異分野の貴重な知識とか経験を手に入れたいと思っている人たちもいると思いますので、ロボット研究者とコラボを希望する心理研究者の人は、自分はお金を持っていないから聞けないと思ってあきらめる前に、取りあえずこういうアイデアがあるんですけどどうですか、一緒に科研費出しませんかでいいと思います。そのように相談することで、ロボット研究者は自分の手持ちのモノがあるから、それを使って早速一緒にやってみましょうということから始まるかもしれません。このように、臆することなく、まずは聞いてみたらどうですかという話ですね。

私自身は、異分野融合研究が最重要と思っているので、科研費を待つ時間がもったいないので、私の方から研究費出すからとにかく迅速に進めましょうよという感じでいつもやっています。

【笹竹】　そういった意味でいうと、物の持ち出しだけじゃなくて、技術的なところでも同じようなことがあると思います。私からはこういうことができると提案できるんですけど、相手は結構気を遣ってしまうことがありますね。スマホとかも浸透してきて、ある程度皆さん知識があるので、相手自身の実現できると思う範囲でしか言わない人もいます。技術的にちょっと難しいかもしれないから、本当はこれをやりたいけどここまでしか言わないみたいな方が結構いらして、相手が本当に欲しいものの議論ができないときがあります。私も悪い癖で技術的なことから話し始めちゃって、「それって本来の趣旨とは違うよね」というのはたまにありますね。そういう時は「待てよ、本当にやりたいことってこれじゃなかったよね」という出戻りみたいなことはあったりしますね。

【松下】　研究の本質を見極めるための落とし込みね。本当にやりたいことを、研究費のしがらみもなく、もっと自由な発想で言ってということですね。

【笹竹】　それこそ、さっきの専門的な言葉のかみ砕きに近いところがあるのかなと。一般的な表現ではありますが、その単語がどのような概念や機能を含んでいるかをどう理解しているかで、認識のずれが生じることは今までもありましたね。

例えば、相手から“スマホアプリ”を作りたいと言われたときに、よくよく話を聞くとほんとに作って欲しいのは“ウェブサイト”だったということがありました。でも彼らからするとアプリと同じようにスマホで見れるウェブサイトは“スマホアプリ”という認識だったんでしょう。相手のやりたいことはウェブサイトとして作成すれば簡単に作成できるのに“スマホアプリ”だと難易度が高くなる内容だったため、そういった言葉のかみ砕きは異なる分野では重要なんだと思います。

【松下】　そうですね。そういうことだともう一つ言いたいのですが、教育の人が企業に対して何かを発注、新しいものをつくってくださいと外注したいときの話し合いが失敗していないかなと。企業の人は技術の知識があり心理の知識がない、逆に教育の人は心理の知識があり技術の知識がない、なのですれ違いを起こして、発注費が高額になったり、最悪、納品物に満足できないということが起きていないかなと。私からの提案としては、そこにロボット系の工学研究者が入れば、技術通訳者となって、もっと安く納得のいく納品物が手

に入るようになるとは思います。

企業側は、発注者の方が詳細な技術仕様を決めることを求めていますので、技術の知識を持っていない人と相性が悪いと思います。だからこそ、企業への依頼を仲介できるような工学研究者の協力が重要ということです。まあ、たまに企業側に、心理研究を経験している人材がいれば問題ないですが。とにかく、まず初めに企業が自分の分野のコミュニケーションできる人かどうかを判断したほうがいいということになります。ミスコミュニケーションにより、50万でできるものが200万になることもざらにあるとは思います。だからこその異分野融合研究で、工学研究者とのタッグを組めば、研究予算も含めて効率よく進むと思います。

異分野学際研究の効率的な進め方

――続いて、実際にチームができて、異分野学際研究が始まったときに、それをより効率的に進めていくためにはどうしたらいいか。先ほど生産性とか成果という話も出ましたが、そういった点について何かアドバイス等あれば。

【松下】 文化・言葉の違いがあることを理解して、コミュニケーションを取るという話かなあと。その上で、心理実験で技術がどのように必要かを、お互い意思疎通を取ることに尽きるかなとは思いますよね。

【笹竹】 松下研究室ではよく相手のところに訪問して話を聞いたり、実験そのものを最初に見せてもらうんですよね。

【松下】 こちらとしても技術でひな形を見せることが大事だね。

ひな形を見せて、イメージを持ってもらって、できるかどうかと。工学者が物を見せて、心理学者からフィードバックをもらって改善していくというような交互の繰り返しが一番大事ですよね。

論文は、心理系論文の表現方法はよく分からないのでお任せしますという感じです。

【笹竹】 そうですね。私達が専門の機械の構造のところだけ口出しをするという感じですね。

あとは、私が気をつけているのは、話し合った内容をなるべく記録して、お互いに齟齬がないように共有を心がけています。

【松下】 漏れもあるからね。結局、後からそんな認識になっていたのと認識違いに驚くこともあるから。そういうことがあった場合は次回に失敗しないように強調して書くという感じですね。

【笹竹】 あとは、これも技術的な話ではあるんですけど、よかれと思ってつけた機能が相手にとっては要らない機能だった場合があったりしました。例えば、開発者の立場からは、一般的にVRは現実に存在しているようなリアルな体験が求められ、できるだけ家具なども現実のクオリティに近いほうが良いというイメージがあります。しかし、理学療法士にとっては、現実のように物がある空間は逆にノイズになってしまい、白い空間が求められることがありました。最近ではこうした事態を防ぐために注意深く確認を行っていますね。

――例えば、パフォーマンスを上げるという面では成果もあって、理系の先生方のほうが成果は短いスパンで大量に出されますが、心理学者とほかの分野の人とのコラボレーションでは、そういう点はどうでしょうか。

【松下】 それは異分野融合研究ですごく難しい問題ですが、ロボット研究というのは新しい技術を使ってもらいたいからやっているので、まずは心理学者に実験を行ってもらって、心理学系学会の方の論文誌に、心理学の人が書いて投稿したほうがいいとは思います。心理学系の論文の書き方は心理学者しか知らないですので、ロボットの人が書いても不採択になりやすいかもしれませんよね。

そうすると、基本的には心理学系のほうに出しちゃって、そのものを工学系に出すこともできないじゃないですか。ただ、先ほど笹竹さんが言ったように、心理学実験ってどういうふうにやるのかが分かると、違うもので新しい実験ができたりするんですよ。だから、一番新しい大事なものは心理学系のほうで発表してもらって、みんなに見

てもらうことが私は大事だと思うんですよ。その後の実験技術、理解したものを、より工学系の心理的な実験に持っていって別の工学系論文を書くという力にすることが一番と思っております。その時に、心理学者にコメントしてもらえるのは非常に心強いです。

だから、私にとって異分野融合研究は、心理研究者を通して適切に心理研究の発展に貢献することが重要と考えています。そして、その次に、心理研究者らの考え方や研究テクニックを、ロボット系学会に広めることが二番目です。つまり、ロボット工学者は新しい技術の使い方を知りたいから、異分野融合研究で専門家が新しいものを出してくれることをまず優先的に考えて、共著者にならせてもらえればいいかなという感じで考えています。私が幾つかの異分野と関わっているのは、そういう意味でやっています。理学療法学だったり、看護学であったり、心理学で論文投稿して発展に貢献して、そこから得たものを工学、もしくは違う分野に転用していって、常に新しい可能性の価値を見いだすということが大好きです。なお工学系では、論文投稿も重要ですが、知財を取って大学発ベンチャーを立ち上げるのも一つの成果となると考えております。

――例えば松下先生の場合は、心理学者以外に理学療法士の先生方とコラボされていますが、そこで生産性というか、業績を上げるノウハウがあったりしますか。

【松下】　やはり研究モチベーションの高い人とやると、一緒にいろいろ提案してやっていくことになりますので、おのずと論文の数は増えますよね。もしくは、同じ技術をカスタマイズして多くの人に提供することですね。一部をカスタマイズするだけで全く違った趣旨の実験システムになりますので、Aさんのための実験システム、Bさんのための実験システムを提供して、全く異なる趣旨の論文となるということです。だから、異分野融合研究では、工学研究者としてできるだけ多くの心理と関わることで、技術プラットフォームを完成させることができるし、共著として論文の数が増えるといいと思っております。心理の人にとって、オリジナル研究の質を高めることがメリットになっていると思っております。

異分野学際研究で気をつけるべきこと

――異分野学際研究で気をつけるべきこと、これから参入していこうとする心理学者に対して、最初に関係をつくる段階からでもいいですし、実際にチームをつくって運営していく段階でもいいので、何か気をつけるべきことがありましたらアドバイスいただければと。

【松下】　言葉と文化が違うので勘違いが起こりやすいということなんですよ。あちらがよかれと思った行動が、こちらがえっと思うこともあるのですよね。お互い、勘違いして地雷を踏まない努力をすることが重要と思います。まあ初めの方に必ず１回は衝突は起こります。その衝突が起こったときに、いかに改善するかが大事だと思います。ある意味、夫婦と同じですよね。結婚したばかりのときは夫婦げんかが多いじゃないですか。それはお互い知らないことがあるからこそ生じていて、これが相手の地雷なんだと、お互いがそのポイントは気をつけようと思ってやっていくことで、うまく一緒に生活をやっていけるようになりますので。

だから、経験して、１回で関係を切るんじゃなくて、お互い悪気がないと思って、ちょっと不快には感じるかもしれないけど理解して、こういうふうに不快だったから、今度気をつけてくださいねという話合いをしっかりやっていくことが大事かなとは思いますね。それが本当に異分野の場合多いです。

どの分野でも、こう振る舞わなきゃいけないという振る舞いがあるじゃないですか。その経験則が分野ごとに全く逆の見方もされちゃうんで、そこのすり合わせが大事なんですよね。

初めから論文を狙っていますとか、初めから権利とか利益を求めてくる人がいると合わないことはありますね。それって相手の権利も取っちゃう

場合があるので。

だから、相手に君は何が欲しいの、私は何が欲しいというふうに話し合って、目的がうまくクロスしているよね、じゃあ一緒にやろうかという話で、私は論文を書くし、私はベンチャー化する知財が欲しいというので、お互いがそこになっとくできれば、お互いにメリットに向かってすごく頑張ってやれると思います。そういうところのメリットを明確化するのも一つの手かなとは思うんですけどね。私の場合は、そんなに論文を気にしていないので、共著でもいいですよと言っているから、論文にこだわっている人とでもうまくできるというのもありますし。

今までの経験で、単にやってという感じで仕事を押しつけて、協力してくれる人のメリットを言わない考えない人との協力が一番危険だと思っています。例えば、こういうものを作ってくださいとお願いしに来てくれた人でも、この程度の研究予算しかないのですが、可能ですか？とか、ちゃんと研究費に関して少額でも口に出してくれる人は相手のことを気を遣ってくれる人なので、うまく共同研究ができる人なんですよ。大概、やってとだけいう人は、私は警戒しています。そして、それが２～３回続くと、私は利用されているだけと感じて、共同研究はうまくいかないと判断して、それ以降は協力をしないようにしています。

――先ほどのお話、企業規模で開発費の相場観が全然違うという話もありましたが。

【松下】 相場観というか、零細になればなるほど、安くやってくれるというのが実際ですね。ただ、大手になればなるほど、逆に言うと仕様はどうすればいいですかと事細かに決める話し合いをしてくるので、研究者がその仕様を言えないと断られる場合もあります。

だから、多分何か頼もうとしたら、小回りの利くベンチャーや零細企業のほうが頼みやすいんですよ。特に、そのような企業にいる人たちは技術力を持っていて、研究者が思っていることを安くうまくまとめてくれる場合もあります。ただ逆に、やはり人数が少ないので、他の仕事が多く入ってしまった場合は、少し時間がかかる場合もありますね。そういう意味で、開発担当者がしっかりと自分のイメージを作れる人かどうか、あとスケジュールをしっかりできる人かどうかを、しっかりと見極めすることが重要だと思います。最近は、大学発ベンチャーも多くなってきておりますので、研究を知っている人の方が実験システムは作りやすいので、もしかしたら零細企業よりもよいかもしれません。

――私の経験で感じたことは、心理学研究者が技術に挑戦したいと思っても、研究費の関係で自分にできることの制約を考えてしまい、新たなアイデアを出せないという状況は多いと思います。そういった意味で安く柔軟に対応してくれるベンチャーをうまく使うというのは一つだと思いますよね。

【松下】 それだったら、学会の方で心理研究に対する貢献度の高い大学発／学生ベンチャーをリスト化して、心理研究者が頼みやすくしたらどうですか。そうすれば、異分野融合研究を促進することに繋がる工学系ベンチャーが増えていくかもしれません。たとえば、ウェルラビィも心理系３DVRが得意なので、学会共に発展できるかもしれませんよ。

【笹竹】 つながりが広がると、こちらもうれしいですし、そういうのがあると工学系から更にベンチャーが立ち上げやすいと思います。心理研究者も、こういうのがあるんだと、いろいろ知ることができますよね。

【松下】 そういう情報を学会がまとめてサポートするのもありだと思います。また例えば、大学の工学系研究者を学会のアドバイザーにつけて、対応してもらうとか。または、Zoomで２時間で幾らとか、技術相談や講演みたいに謝金が出る構造を作ってサービスとするとか。その場合は、共著となる共同研究にすることや、共著にもならない単なる技術アドバイスを求めるとかも指定できるようになれば、心理系研究者も気兼ねなく使えるようになりませんかね？もちろん、大学研究者じゃなくて、技術ベンチャー企業がそれに参画し

てもよいですね。恣意的に１社だけになっちゃったらいけないかもしれないから、学生ベンチャーをいろいろ集めて、人材派遣会社のような構成をつくるということですかね？

まずは、心理系の学会の国内会議とかありますよね、そこで相談窓口をつくるのはどうでしょうか。工学者を無料でそこへ招待して相談窓口をやってもらうとか。その工学者はそこでいろいろ研究を見てコメントをするとか、コラボを円滑化するために、そういう意味から物をつくるのもいいんじゃないですか。

【笹竹】 ベンチャー企業の特徴かもしれませんが、ウェルラビィの場合、相手に財政的な制約があっても、そこで終わりではなく、むしろお互いにメリットのあるところを探して、双方が納得できる形で進めることが可能です。まず実際にプロジェクトを進めてみて、お互いに信頼感を築いたうえで、第２段階目や将来の展望に関して金額等の相談をすることは、よくあります。そういった柔軟性は、大企業よりも動きやすいところかなとは思いますね。

【松下】 だから、学生ベンチャーを心理としてサポートして一緒に大きくなろうよと。本当にICT化を一緒にやろうよという気持ちを持ってもらってもいいかなと思いますね。

もしくは、工学系と心理系のコラボの卒論ってあったらいいと思うんですよね。卒論って公開はされない前提なので、同じ研究テーマで工学系学生と心理系学生が表裏一体で卒論をやるということです。心理系学生が実験構想を考えて、工学系学生がそのための実験装置をつくる、そして心理系学生が実験を実施し、統計的結果と心理学的考察で自らの卒論をまとめる。また工学系学生も、作った装置の技術的な性能評価と、実際の心理実験結果の一部を出して、その効果を考察して卒論をまとめる。このように２つの卒業論文は、心理学的側面と技術的側面で最終的には表現が変わりますし、小規模の共同研究経験にもなっていますので、面白いのではないでしょうか。そういうような教育があっても僕はいいと思います。工学とやることによってすごく価値が上がる。価値は２倍以上になるんじゃないですか、場合によっては。

初めのところで何をつくるかというところに面白さがあると思います。例えば、3DVRだったら、VRをつくる時点で時間がかかっちゃうので、それで心理で役立つものをつくっただけで一応卒論にはなるんですよ。心理の人は、3DVRが手に入って新しい結果が出るならば評価でいいじゃないですか。評価の一部は工学部の発表でも使わせてもらいたいけど、心理学とやりましたという紹介として。そうすると、多分すごくタッグは組めるという話ですよね。卒論で二面性を持ったものをやるというのは、すごく大事だなと僕は思うんですよ。

おわりに

――最後に心理学者にメッセージというか、ラブコールでも何でも結構ですが、よろしくお願いいたします。

【松下】 何かつくってもらいたいものがあったら、とにかく言ってくださいということですね。取りあえず話して、モチベーションがある人がいれば、とにかく協力は惜しんではいないので、連絡してくれればうれしいということです。

【笹竹】 研究室としてももちろん、ウェルラビィで製品開発も積極的に取り組みますので、是非連絡をいただきたいですね。どちらにしても、まずはお話からですよね。興味ある方がいて、何か達成したいモチベーションのある方がいれば、積極的に協力いたします。

【松下】 そうですね。僕はどこでも行きますから。北海道、沖縄というのはもう全然行きますよという感じで。

日本応用心理学会
第89回大会報告
亜細亜大学

日本応用心理学会第89回大会を終えて

日本応用心理学会第89回大会実行委員長：髙石　光一
（亜細亜大学）

2023年８月26日（土）・27日（日）の２日間、伝統ある日本応用心理学会の第89回大会を亜細亜大学で開催し、無事に終了することができました。大会実行委員を代表して、皆様に感謝申し上げます。

●年明けからのスタートでした

まだ、コロナ禍の明けきらない２年以上も前から、本学での開催のお話をいただきましたが、気が付けば2023年の年が明け、急ぎ準備に着手しました。第88回大会の京都工芸繊維大学総会で告白いたしました通り、亜細亜大学５学部７学科の教員155人中、日本応用心理学会会員は当時、私一人だけでした。しかも、大会運営など未経験。そんな私に救いの手を差し伸べてくださいましたのが、外島裕先生、藤田主一先生、小野公一先生、学会事務局長の軽部幸浩先生でした。これら４先生を顧問に迎え、2023年１月９日、年明けの冷え切った本学の会議室にて、第１回のミーティングにご参集いただきました。また、本学の名誉教授である馬場房子先生には名誉顧問としてのご快諾をいただきました。

その後、学内の心理系の諸兄姉に応援を求め、本学の板垣文彦先生（実験心理学）に副委員長、小川悦史先生（組織心理学）には事務局長、鹿内菜穂先生（スポーツ心理学）に副事務局長として就任いただきました。

さらに、私の教員生活の出発点であった当時の東京富士大学の同志にも依頼し、学内外から総勢17人の皆様による大会実行委員会がスタートしました。

●ポストコロナとデータ社会の応用心理学

コロナは終息する機運であったこと、また本学経営学部にデータサイエンス学科を新設したことから「ポストコロナとデータ社会の応用心理学」を大会テーマに掲げ、全面対面で行うこととしました。

大会企画

第１日目の大会企画のシンポジウム「ポジティブ心理学の潮流と応用―ポストコロナ時代における健康で幸福な生き方を考える―」は、木村友昭先生に企画をお願いし、ポジティブ心理学を研究、教育、活動、実際に応用されている先生方から話題提供をいただき、ポストコロナ時代の人、組織、社会について、参加者との活発な議論を展開いただきました。

２日目の午後の特別講演では「AIに創造性は可能か？」は、本学経営学部データサイエンス学科の東条敏先生から、芸術を例として最新のAIと創造についての知見を講演いただき、我々心理学者にも非常にわかりやすく好評でした。

大会企画ワークショップとして、第１日目には本学の鹿内菜穂先生より「ポストコロナ時代における心身の健康づくり－チェアヨガの実践－」、第２日目には、板垣文彦先生らによる「日本の若者の主体的自己を考える－ドーパミンとワーキングメモリに基づく国際比較研究に向けて－」を開催しました。鹿内先生からは、ヨガの身体及び精神面での効果の解説に続き、実際に椅子を使ったチェアヨガを参加者に体験いただきました。後者は、University of BristolのDavid TURK教授や東京医療センターの医師の先生らによる国際的・学際的なセッションでした。

研修会

第１日目は、株式会社ベターオプションズ並びに慶應義塾大学総合政策学部の宮中大介先生による「産業保健心理学領域におけるAI活用の現状、課題、可能性について」の研修会でした。２日目は、「AIが犯罪予測と警察業務をどう変える？―最適化アルゴリズムとフィールド実験から学ぶ―」のテーマの下、株式会社Singular Perturbationsならびに東京大学空間情報科学研究センターの梶田真実先生がご指導くださいました。どちらも最新のAIの応用という観点から、今大会のテーマにぴったりでした。

自主企画

今大会では自主企画として、ワークショップ、ポスター発表・フラッシュトークに加えて、口頭発表の場も用意いたしました。４月の立ち上がり頃は出足が鈍く、結局３回の締切延期をすることになりましたが、結果的には、自主企画ワークショップ：９件、ポスター発表・フラッシュトーク：78件、口頭発表：26件の計113件の発表件数となり盛会となりました。

自主企画ワークショップでは、両日にわたり、①カウンセリング、心理療法のアジアからの発信、②インターネット環境を利用した質問紙調査―最近のWeb調査における研究の傾向と留意点―、③コロナ禍での子どもたちの発達と健康～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか～、④女性アスリートの成長発達段階における指導者の役割―以外と知られていないハラスメントの実態等を子どもの権利条約の視点と併せて紹介します―、⑤ポストコロナ時代の心理学の教育を考える、⑥社会に役立つ応用心理学研究を考える―道路交通社会を例とした貢献と課題―、⑦いじめ問題のロール・プレイングを教員研修で取り組む～小・中学校の教員研修、学級現場での活用に向けて～、⑧デジタル技術と心理学の融合事例、⑨自己信頼性の育ちを尊重した発達診断、障害児教育―発達研究と自閉症児教育を通した考察―、といった応用心理学の代表的分野に関する活発な議論が各会場で展開されました。

ポスター発表・フラッシュトークも両日にわたり、計78件の発表が行われました（1日目41件、２日目37件）。学生諸子による教育発表も11件行われ、会場としたロビーホールは大盛況の様子でした。そして、口頭発表も１日目14件、２日目12件の合計26件の発表が、２教室で行われました。

おかげさまで大会プログラムの索引には約260人のお名前があり、会員・非会員・学生の皆様が本大会に多数ご参集下さいました。

教室風景

総会、理事会、懇親会

総会は第１目の昼時間に開催されました。恒例に従い、大会委員長が議長に選出され議事を進行しました。若手会員研究奨励賞、2023年度学会賞（奨励賞）、2022年度優秀大会発表賞の報告等、2022年度決算、2023年度予算などの承認後、若手会員研究奨励賞（金山英莉花氏）、学会賞（田中共子先生・沼柊門先生）、齊藤勇記念出版賞（松浦常夫氏）の表彰式が行われました。

理事会は、大会前日の８月25日15時から、吉祥寺の吉祥寺エクセルホテル東急において開催されました。理事、監事、名誉会員など29名の先生方が出席されました。古屋理事長のご挨拶の後、理事の自己紹介等から始まり約２時間活発な討議が行われました。

また、今大会では、３年ぶりに飲食を伴う懇親会を開催しました。第１日目18：10より、キャンパス内発表会場の近くのアジアプラザで開催しました。古屋理事長、主催校として亜細亜大学の永綱憲悟学長、高石の挨拶に続き、田中真介副理事

長の乾杯でスタートし、懇親を深めました。ここでは、亜大らしいイベントとして、本学のガムラン（インドネシアの代表的な伝統音楽）研究会による生演奏と踊りをご披露することができました。

ガムラン

そして優秀大会発表賞の表彰（藤田主一先生、塚田直也先生、有木永子先生、異儀田はづき先生、紺野剛史先生、森泉慎吾先生、種ケ嶋尚志先生）の後、次期主催校である帝塚山大学の谷口淳一先生から挨拶、そして、外島裕先生の言葉により盛会のうちに閉会いたしました。

ということで、2023年８月は天候もさることながら17人の大会実行委員会と私のゼミ生を中心としたアルバイトスタッフには非常に暑い夏でした。

アルバイトスタッフ

●おわりに　“オウシン”に思う

私は、いわゆる“オウシン”では40年前から会員であり、20代30代の頃（まだ論文集が手書きの印刷の時代）、毎年発表させていただきました。しかし、ここ10年くらいは大学でも相応の立場になり、学務や雑事に追われ研究も手つかず、大会参加も全くさぼっていました。

今回、大会実行委員長をお引き受けし、参加者の皆様の所属や研究内容に触れることとなり、学会の層の厚みの凄さを再認識いたしました。“オウシン”は、臨床、教育、産業、交通、社会、犯罪等、あらゆる分野の社会問題をカバーする心理学者の集まりであることを改めて実感しました。そして全国大会には、大学、企業、国、コンサル、院生、学部生、終身会員、名誉会員の先生から、教育発表の学生諸子まで、会員・非会員を問わず、使命と情熱をもってご自身のテーマに取り組む研究者が集まります。多様な立場の方々が研鑽し、その成果を発表し交流するこの大会の２日間は、とても大切な場であると思います。“オウシン”がこれからもますます発展し、社会の一翼を担う存在であり続けることを願います。

最後に、外島先生、藤田先生、軽部先生、大会事務局業務を担当いただきましたIBI（国際ビジネス研究センター）の吉廣様、本当にありがとうございました。古屋理事長以下学会役員の先生方、大会実行委員会の先生方、本大会開催にご支援下さいました多くの皆様に感謝を申し上げます。

高石　光一（たかいし・こういち）／ 1956年 横浜生まれ。1984年～2002年　中小企業基盤整備機構にて中小企業への出融資、経営者・管理者研修等に従事。2002年～2014年 東京富士大学、大東文化大学を経て、2015年～現在　亜細亜大学経営学部教授。中小企業論、ベンチャービジネス論、行動科学等を担当。

多くの方々に感謝

小川　悦史
（亜細亜大学）

このたび日本応用心理学会第89回大会の大会委員および同大会自主企画ワークショップの指定討論者として、本学会に参加させていただきました。

第89回大会に関わる実際の委員業務には昨年２月頃から参加させていただき、大会当日はもちろん、その後の事務処理に至るまで、多くの仕事に携わらせていただきました。具体的には、発表申込みをされた先生方の調整、大会プログラム等の資料作成、会場・機材整備、入出金管理、大会当日のマネジメントなど、多岐にわたる業務を経験させていただくことができました。

しかし、これは私だけでなく、私以外の委員の先生方も同等あるいはそれ以上の業務量を担っており、表向きにはわかりにくいかもしれませんが、比較的少ない人数で準備されたことが、第89回大会の特徴の１つであったとも考えます。

そうしたなかで、大会運営に必要な知識や経験をもたない私が、それらの業務をどうにか全うすることができたのは、様々な方からのご支援・ご協力をいただくことができたためと考えます。直接的な関わりとして、日本応用心理学会の役員・事務局の先生方、大会委員の先生方、大会顧問の先生方、IBIさま、亜細亜大学学生スタッフの皆さんには大変お世話になりました。誠に有難うございました。また、大会委員長である髙石光一先生、副委員長である板垣文彦先生、副事務局長である鹿内菜穂先生には言葉では言い尽くせないほどの多大なご支援・ご協力を賜わりました。この場をおかりして心より厚く御礼申し上げます。

すでに第90回大会に向けた準備は始まっているかと思います。様々な課題や懸案事項なども生じているかもしれません。しかしどうか是非、互いに協力し合い一丸となって、運営スタッフ、大会参加者、帝塚山大学さま皆さんにとって、至極の大会となるようご尽力されることを心から祈っております。

このたびは貴重な経験をさせていただき誠に有難うございました。

小川　悦史（おがわ・えつし）／ 1973年 埼玉県生まれ。青山学院大学大学院経営学研究科博士後期課程修了。博士（経営学）。会社員等を経て、2021年より亜細亜大学経営学部准教授。専門は人的資源管理論・組織行動論。

非会員としての発見と今後への期待

鹿内　菜穂
（亜細亜大学）

第89回大会発表者の皆様、参加者の皆様、大会へのご参加をありがとうございました。そして、大会運営に際し、理事の先生方、大会委員の先生方、学生スタッフの皆さん、ご支援くださった団体の皆様に心より感謝申し上げます。

開催校のスタッフは限られておりました。大会委員長の髙石光一先生以外はみな非会員、また学部生も動員し、手探りで準備を進めて参りました。学会の多くの先生方にご負担をおかけしましたこと、どうかご容赦ください。私もその非会員であるからこそ、今後大会運営のご参考になることがあればと思い、恐れながらここに執筆させていただきます。

遡ること2022年12月。髙石先生より第89回大会を亜細亜大学で開催すること、そして大会委員についてご相談いただきました。私は非会員かつ大会にも参加したことがありませんでしたが、日本体育大学で開催された第80回大会において、スポーツ心理学の分野でお世話になっている先生方や友人たちが大会運営をされたこと、そして大学院時代の恩師が記念講演に登壇されたことを知り、この機会に少しでもお役に立てればという思いでお引き受けしました。

2023年年明けすぐに、学会理事の外島裕先生、同じく理事の藤田主一先生、学会事務局長の軽部幸浩先生が本学にお越しくださり、大会委員長の髙石先生、大会事務局長の小川悦史先生とともに初めてお打ち合わせをしました。この時すでにA4・８ページもの計画案が髙石先生よりご用意されており、コロナが落ち着きを見せ始めた対面での大会実施にかける熱い思いを、理事の先生方より受け取ったのでした。

運営側の予想以上に口頭発表、ポスター発表、そして自主企画ワークショップのお申込みをいただきました。コロナ禍の対面での大会に、どれくらい参加を見込めるかについて非常に心配であったものの、それは杞憂に終わりました。会員の皆様の成果発表の意欲や対面交流への期待に大変刺激を受けました。そして、運営側もイベントを数多く用意したい思いから、大会企画シンポジウムおよび特別講演以外は全てマルチトラックのプログラムになりました。そこで、参加者にとっては情報収集の選択肢が多いというメリットがある一方で、各セッションに対して参加者が散ってしまうというデメリットが発生しました。実際、私は大会企画ワークショップに登壇しましたが、参加者は数名であったため、正直寂しい気持ちが残りました。反対に、同じタイミングで進行していたポスターセッションは非常に盛況であったと伺いました。ポスター発表は、様々な研究者とインタラクティブに情報交換できる場であり、また学生にとっても普段お会いできない先生方よりご指導いただける貴重な機会でもあります。大会期間の両日行われたポスターセッションは、シングルトラックにする工夫が必要であったのではないかと今では考えております。

そして、大学院生および学部生の発表参加も多い大会となりました。全国的に会員数や参加者数を増やすことが難しくなってきた国内学会において、応心は活気ある証だと思います。一方で、大学院生の発表および教育発表に関して、ぜひご検討をお願いしたいことがございます。慣れていらっしゃる会員の皆様はお馴染みかもしれませんが、初めて参加する学生や参加者にとっては、料金体系や申込みに関する手続きが複雑であるということです。実際に、学生の責任者として記載いただく担当教員の情報がなかったり、連名者のお支払いがなかったり、筆頭著者であるものの責任者ではない大学院生には論文集をお渡しできなかったり（なお、開催当日、大会委員長のご判断で配付しました）、その他、運営側も一つ一つの確認が必要なケースが多数発生いたしました。マンパワーがあれば対応可能であったこともあるかもしれません。しかし、手続きの複雑さは事前申込者への個別対応が増えるだけでなく、また当日受付の混乱にも繋がるため、ぜひ見直しをご検討いただければと思います。

大会運営をさせていただきました非会員の立場から率直に書き連ねました。あらためまして、貴重な経験と新たなご縁を誠にありがとうございました。ポストコロナで先生方、学生の皆さんの研究活動はより活発化していることと存じます。学会および大会の益々のご発展を祈念しております。

鹿内 菜穂（しかない・なお）／ 東京工業大学大学院社会理工学研究科、立命館大学大学院理工学研究科修了。博士（工学）。日本学術振興会特別研究員（DC2）、日本女子大学家政学部を経て、現在亜細亜大学経営学部准教授。専門は舞踊心理学、感性情報学。

大会企画シンポジウム：ポジティブ心理学の潮流と応用

木村　友昭
（一般財団法人MOA健康科学センター）

本シンポジウムは「大会企画」であり、大会委員長の髙石光一先生の発案によるものです。第89回大会のテーマは「ポストコロナとデータ社会の応用心理学」でした。本シンポジウムは、「ポストコロナ時代における健康で幸福な生き方を考える」という副題を付けて、ポストコロナ時代の今、ポジティブ心理学を研究に、教育に、活動にどのように応用していくかを考えるきっかけにしたいという趣旨で企画いたしました。この趣旨を英語で表すと、“Practice of Positive Psychology in Post-Pandemic Period”で、６つのPがつながっていることに大変驚きました。

本学会には、ポジティブ心理学について造詣の深い先生方が多くいらっしゃいます。その中で、日本文化における人生観や価値観について研究されている伊坂裕子先生（日本大学）、そして首尾一貫感覚（SOC）について研究されている銅直優子先生（流通科学大学）に話題提供をお願いしました。さらに、開催校である亜細亜大学の柏木仁先生からコーリング（天職感）についてお話いただきました。また、指定討論者を設けず、できるだけ多くの参加者の皆さまから質問やご発言をいただくようにいたしました。

次に、司会進行担当者として、個人的な感想を述べます。伊坂先生からは、（抄録には書かれていませんが）ポジティブ心理学に関する文献検索の結果を示していただき、関心が高いわりに、日本の論文は少ないという実態を指摘していただきました。ポジティブに考えれば、それだけ伸びしろのある領域であるということでしょう。銅直先生からは、学生時代はSOC形成の重要な時期なのに、コロナ禍により妨げられているとの問題提起がありました。社会的なつながりや人との交流が大切な役割を担っていると受け止めさせていただきました。柏木先生からは、天職感の概念を示していただき、ポジティブな視点だけでなく弊害についても言及されました。会場に集まった方々は、教育、研究、医療、福祉などに携わっている人が多く、天職感はとても高いようでした。

コロナ禍のため、2020年の本学会は中止、2021年はWEB開催、2022年はハイブリッド開催で、今年の大会は、ようやく通常の対面開催に戻りました。大学の授業、飲食店の営業、旅行や帰省、スポーツ大会の応援など、コロナ前に戻ることで、多くの人は満足していると思います。コロナ禍はネガティブなイベントですが、そこから得た経験、教訓やスキルがポストコロナ時代に役立つことを願っています。多くの識者から、ポストコロナにおける新しい生活様式や働き方、価値観の多様化などが指摘されています。たとえが悪いかもしれませんが、関東大震災100周年、太平洋戦争の終戦から78年、東日本大震災から12年経過した今年、それらの惨禍で失ったものやトラウマも大きいのですが、復興の中で得たものも多くあると思います。コロナ禍を乗り越えた私たちは、さらなる健康で幸福な生き方を求めて成長していくことができるはずです。そのために、SOCの３つの要素である把握可能感・処理可能感・有意味感を高め、仕事だけではなく、家族、趣味、ボランティア活動など、いきがいを感じられるような日々を送ることで、幸福感が高まることが望まれます。

伊坂裕子先生

銅直優子先生

柏木　仁先生

シンポジウムの様子

木村　友昭（きむら・ともあき）／ 1957年広島市生まれ。東京大学農学部卒業。広島大学大学院医歯薬学総合研究科終了、博士（医学）。応用心理士。現在、一般財団法人MOA健康科学センター業務執行理事、主任研究員。研究領域は、公衆衛生学、統合医療など。

インターネット環境を利用した質問紙調査
―最近のWeb調査における研究の傾向と留意点―

松田　浩平
（東北文教大学）

インターネット環境の一般化に伴い、調査研究ではWeb利用が急激に広まっています。Web調査は、実施のコストの低さ、データ回収の早さなど短時間で簡便に大量収集できます。その反面、研究者からは、調査会社やデータの信頼性、回答傾向や反応バイアス等に迷いや疑念があるとも言われます。このような疑問に対し、本ワークショップでは、最近のWeb調査の傾向やデータ収集・分析の留意点等について討論を試みました。

京都先端科学大学の三保紀裕先生からは、Web調査会社を活用する背景要因と調査実施について、キャリア教育・職業心理学に関する研究を例に紹介いただきました。キャリア関連の海外誌３誌から、縦断的研究デザインと構造方程式モデリング（SEM）の時間軸に焦点を当てた研究デザインの適用率の８年間の変遷が示されました。分析の高度化に伴い多くのサンプル数を要するようになり、Web調査の普及でサンプル数が増加できることや、研究計画の流れで最近の傾向として研究倫理審査申請手続きとの関係もお話しいただきました。これによりWebを利用した縦断調査の手続きにおける研究技法を学びました。

大阪商業大学の西川一二先生からは、Web調査の多くの利点の裏に潜む問題点とその対策について具体的な実例を紹介いただきました。Web調査では、回答者の一定数が質問項目の回答に労力を使わなくなる（努力の最小限化）傾向があるため、収集データにダメ回答（ストレートライニングや超短時間など）の多さが示されました。このダメ回答が、分析結果にどのような影響を及ぼすのかについて具体例を示して紹介いただきました。対策として、Web調査に求められる条件やデータクリーニングの手法が紹介されました。Web調査と紙筆調査による心理尺度の分析結果の差異を示し、その差異が考えられる要因を提示いただきました。さらにWeb調査におけるダメ回答のチェックや対策について提案いただきました。

指定討論者である亜細亜大学の小川悦史先生からは経営学の立場から、Web調査による大量データの収集や回答者の属性や回答態度などの質問があり、人を対象とする調査については心理学と経営学では調査の目的は異なりますが、データの解析方法では共通点が多いことも確認できました。

さらにフロアから、日本能率協会マネジメントセンターの片岡大輔先生より、Web調査においては質問項目の文章を読まずに、マウス等をクリックして回答欄を埋めていく人がある程度存在するため少数でも妥当性の高い項目を用意する必要性が示されました。

これから、調査研究ではWeb活用が一般化することは当然かと思われます。従来の紙筆式調査との比較や調査の妥当性を確保する方法など有益な議論が出来たと思います。この課題は継続的に議論する必要があり、会員向けの研修会なども含めて開催する必要性が高いと感じました。

会場の様子（三保先生はZoom参加になりました）

松田　浩平（まつだ・こうへい）／ 東北文教大学教授、同附属図書館長。専門は個人差研究で、現在は、人格心理学を生理・行動指標を用いた実験心理学の手法で研究している。

女性アスリートの成長発達段階における指導者の役割
～多様なメッセージへ感謝！～

寅嶋　静香
（奈良教育大学）

今回、「女性アスリートの成長発達段階における指導者の役割」というテーマでワークショップを企画致しました、奈良教育大の寅嶋です。この企画の目的は、「スポーツ指導者のハラスメントの実態を明らかに」・「指導者の果たすべき役割とは？を改めて問い直す機会創出の場とすること」の２点でした。

近年、残念ながら指導者による女性アスリートへのハラスメント事件が後を絶ちません…。筆者寅嶋は女性アスリートの健康調査を長年続けていますが、体調不良の背景には指導者からのハラスメントが数多く存在していました。今回この現況へ危惧を唱えるべく、登壇者３名が事例報告を交え、指導者のあるべき姿を模索しました。

３名の発表テーマを改めて：筆者寅嶋は「運動系部活動における恋愛禁止規則の実態調査から指導者の役割を考えてみた」を、権野めぐみ氏（京都工芸繊維大学）からは、「女子アスリートのFAT問題、支援体制の課題」を、藤林園子氏（甲子園大学）からは、「トップレベル女子アスリートに対して指導者が与える心身への影響」、でした。

ご参加の皆様から、多様なメッセージ・ご意見を頂きました。それらの声をこちらでご紹介させて頂きます。

- HOTな話題でとても勉強になりました。
- 月経に対し（アスリート自身が）無自覚であること、に驚きました。
- （自身は）吹奏楽だったんですが、それでも類似したようなことがありました。いい方向に動けるような世の中になることを望みます。
- 高校で恋愛禁止がこんなにあるのはなぜだろう…？
- 教育虐待と話が似ている気がして興味深かった。スポーツはやめる！という選択肢があるように思うが、受験は本当に「逃げられない」ので…。
- 恋愛する時間なんか全然ないほど多忙な部活動でしたが、ハラスメントが起きやすい勝利至上主義に陥らない思考は大事かと…。
- 勝つための組織だけになると、「運動しないvsする」、という形になりやすい。これは年齢が上がった際に危険。
- 中国は（日本よりもっと）恋愛に対して、学校がとっても厳しい！！でもいざ大人になったときに結婚するにはどうしたら？（笑）がある。少子化の背景もここに？
- 人間関係ストレスには共感ができた。先輩後輩の関係性という部分の話も、もっときいてみたい（自身も経験してきたから）。
- 女子は本当にいろいろと…大変ですね…指導者は無自覚であってはならないですね。そして男子も大変。

…ご参加の皆様、後日ご連絡くださった先生方、誠にありがとうございました。

ハラスメントを一掃するにはまだ時間を要しますが…今回のようにまずは認知して頂き、皆で意見を創出し、「考え続ける」ことが大事です。そして、次年度へ向けた新たなテーマがいくつか見えてきました…。ご興味ある先生方、御参画ください（笑）。この度はどうもありがとうございました。

寅嶋　静香（とらしま・しずか）／ 奈良教育大学教育学部特任准教授。博士（学術）。専門は女性のヘルスプロモーションと運動科学。近著に「いのちの安全教育：伝えたい、いのちのおはなし―保健体育科教育の視点を踏まえた、性、ジェンダー、食、人権を学ぶ―（2024（1月）、ブックハウスHD）」がある。

社会に役立つ応用心理学研究を考える
―道路交通社会を例とした貢献と課題―

大谷　亮
（（一財）日本自動車研究所）

この度は日本応用心理学会第89回大会において、自主企画ワークショップ（WS）の機会をお与え頂き、大会事務局および関係者皆様に厚くお礼申し上げます。

今回の自主企画WSでは、「社会に役立つ応用心理学研究を考える―道路交通社会を例とした貢献と課題―」と題し、小菅英恵先生（（公財）交通事故総合分析センター）、中西誠先生（株式会社電脳）、中野友香子先生（科学警察研究所）から話題をご提供頂き、会場の皆様とともに意見交換を行いました。

本WSでは、応用心理学の目標として、人間を「測ること」と「変えること」の２側面を設定し、道路交通安全領域を例として、前者について中西先生から運転適性検査の話題、また、後者について中野先生から自動車シートベルト着用の促進を企図した安全教育に関する研究実践をご紹介頂きました。また、小菅先生からは、社会に役立つ研究を考える上で鍵となるステークホルダーに根ざしたデータの活用について話題提供頂きました。

討論では、各話題提供者より研究成果を社会実装する際の苦労話の他、社会実装のための工夫として、限られた資源の中で適性検査などの測定機器をより多くの方に利用頂くために対象者に優先度をつけることの重要性、一般の交通参加者を対象にした安全教育として双方向型の教育の有用性、さらにアウトプット（研究結果の公表や利用）から導き出されるアウトカム（得られる成果）をステークホルダーに理解してもらうなどの考え方や方法が提案されました。また、会場の皆様からは、応用心理学における価値観に関するご質問や、社会実装に関する考え方やそのための研究課題の設定、実務に携わる方々との連携のあり方、さらには一般の方々の日常体験に関するデータの収集についてのご意見を頂きました。

本WSでは「道路交通社会を例とした貢献と課題」を副題としました。道路交通社会といった領域を主題ではなく副題に付したのは、社会に役立つ応用心理学研究の考え方や方法、さらに研究を遂行する上での悩みは、道路交通に特化したものではなく、どの領域にも普遍化されるものと考えたためです。

今後、本WSで考えた内容を他の領域の方々と共有して意見交換を行い、帰納的方法により、社会に役立つ応用心理学研究のあり方を継続して考えていきたいと思っています。

最後に、このような振り返りの場をお与え頂き誠に有難うございました。

小菅　英恵氏

中西　誠氏

中野　友香子氏

大谷　亮（おおたに・あきら）／ 2012年 中京大学より博士（心理学）を取得。現在、（一財）日本自動車研究所主任研究員。専門は交通心理学、発達・教育心理学。特に、子どもの交通安全に関する研究に従事している。

デジタル技術と心理学の融合事例

近野　恵
（富士通株式会社）

応用心理学会第89回大会において、自主企画ワークショップを行う機会を頂きありがとうございました。

昨年の第88回大会に引き続き、デジタル技術と心理学の融合をテーマに企画致しました。この内容を企画した背景として、現在の多様で複雑な社会課題に対し、単一分野の研究だけでは解決することが難しくなってきています。そこで、富士通では人文・社会科学などの多彩な知見とデジタル技術（AI）を融合したコンバージングテクノロジーの研究により、人や社会を深く理解し、社会課題を解決することを目指しています。

自主企画ワークショップでは、「デジタル技術と心理学の融合事例」と題し、富士通が研究しているデジタル技術と心理学の融合技術として２つの事例の紹介と、東洋大学の桐生教授から心理学の社会実装についてご発表頂きました。

スマートシティ関連の事例では、社会問題となっている特殊詐欺被害の未然防止に向けて、2022年から富士通と東洋大学が日本初の共同研究を尼崎市で実施しています。富士通の井手健太研究員から、被害者側の生理・心理状態に着目した、様々な詐欺手口に汎用的な未然防止技術の研究について報告しました。非接触のミリ波センサを用いたセンシング技術により、還付金詐欺などの特殊詐欺電話を受けている高齢者の騙されそうな状態を推定する技術をデモも交えて発表しました。

ウェルビーイング関連の事例では、企業での上司と部下の１対１の面談において、面談に不慣れな新任幹部社員などの上司向けのコミュニケーション支援技術の研究を行っています。富士通の紺野剛史リサーチディレクターから、生成AIの活用可能性の検証について報告しました。部下からの質問に対し、上司のアドバイスなどの回答案の自動生成に向けて、生成AI（ChatGPT）と熟練の上司でどちらが部下にとって満足度の高い回答を生成できるか、主観評価（心理状態）、客観評価（生理反応）の両面から分析した研究について発表しました。

心理学の社会実装について、東洋大の桐生正幸教授からご発表頂きました。応用研究として心理学を社会で役立たせるための研究の進め方や、企業とアカデミックの連携についてお話頂きました。また、これまでにご研究、社会実装されてきたAIを用いた犯行場所の予測など防犯への取り組み事例や、今後のAI導入の可能性として、AIと心理測定の融合技術のカスハラプロファイリングなどへの応用研究についてお話頂きました。

また、多くの方にご参加頂きありがとうございました。時間が足りなくなるほど活発に議論して頂いたことを嬉しく感じております。

本学会は、応用研究に焦点を当てた学会であり、我々が行っている研究との親和性が高く、今後も継続して学会発表や今回のような自主企画ワークショップを行いたいと考えております。また、社会課題の解決に向け、心理学の知見を持つ皆様と我々のデジタル技術を融合し、社会実装を加速するため連携していきたいと考えております。このような心理学とデジタル技術の融合により社会課題解決に取り組む活動に関心がある方は、ぜひ私までお気軽に問い合わせて頂けますと幸いです。

近野　恵（ちかの・めぐみ）／富士通株式会社　コンバージングテクノロジー研究所　プリンシパルリサーチャー。AI技術と人文・社会科学の融合技術の研究開発に従事。

自己信頼性の育ちを尊重した発達診断、障害児教育
―発達研究と自閉症児教育を通した考察―

塚田　直也
（筑波大学附属視覚特別支援学校）

●（1）はじめに

近年、子どもたちは、周囲の大人（社会）からの一方的な期待や評価にさらされ、苦しみや悲しみを抱き、自分の大切さを実感できず、自分を否定せざるを得ない状況に置かれています。

本ワークショップは、「自己信頼性」という自分自身の価値を発見し、尊重する力を尊重することの意味について検討し、今後の保育や教育等の実践への手がかりを導き出すことを目指して企画しました。

●（2）話題提供と指定討論

1）（話題提供１）：福田睦さん（京都大学総合人間学部卒）から、①自己信頼性の発達についての概説のあと、②幼児期の自己信頼性と他者尊重性の発達に関する基礎研究の成果について話題提供を受けました。幼児を対象とした発達研究では、積木や大好きな物などを自分や保護者、友だちに配分する課題への応答の特徴から、子どもたちが自分や他者をどのように大切にしているかが浮き彫りにされるという興味深い重要な結論が導かれていました。

福田報告では、養育者の態度が子どもの自己信頼性や他者尊重性の育ちに重要な影響を与えることが報告されました。①自我の育ちを測る配分課題で、自分自身に最も少ない数の積木（またはお菓子など）を配分した子どもの保護者は、わが子のことを「わがままに育っているから幸せになれるか不安」という子ども理解をする傾向にありました。母親がわが子の自己信頼性を尊重することができない背景には、子育てに対する不安や自信のなさがあり、子どもの自己信頼性を育むためには、保護者の心の揺れを受けとめて援助することの重要性が示唆されました。

2）（話題提供２）：飯島杏那さんは、筑波大学附属久里浜特別支援学校で、知的障害と自閉症のある子どもたちの療育実践に取り組んできました。

飯島報告では、①一見すると「よくできる」自閉症の子の中に、大人の言葉の意味や価値を感受できず、自分にとって意味や価値のあることを一方的に表現しているように見えるために、大人に注意ばかりされ、②その結果、自分の表現の価値が否定されたように感じ、自己信頼性が育ちにくいこと、③「よくできる」子ほど、その子の意味や価値の世界に共感し、大人が共に楽しむことが重要であることが報告されました。

3）（指定討論）：田中真介さん（京都大学）から、それぞれの基礎研究と療育実践の発達的な意義についてコメントと課題が提示されました。その後、今回のワークショップの総合テーマについて参加者同士で多彩な観点から意見交換を行いました。

●（3）ワークショップのまとめと展望

私たちも「社会」に適応しよう、年齢相応の行動をとろうとするあまり自分の本当の願いが何だったのかを見失い、自分を傷つけ、集団を否定するネガティブな感情が生じることがあります。誰もが自分の大切さを実感し、互いに尊重しあえることの大切さを実感できるような新たな保育・教育・療育のあり方を、これからも模索していきたいです。

塚田　直也（つかだ・なおや）／ 長野県長野市生まれ。2007年より東京都立の障害児学校の教師となる。2010年より筑波大学附属久里浜特別支援学校にて知的障害を伴う自閉症児の教育に携わり、2021年より同附属視覚特別支援学校にて盲重複障害の子どもへの教育に従事している。

コロナ禍での子どもたちの発達と健康
～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか～

田中　真介
（京都大学）

●はじめに

コロナウイルスへの感染防止のため、2020年から約３年間にわたって三密回避、緊急宣言、マスク着用、ワクチン接種等の対策が推進されました。しかし、これらの対応では、広範で大規模な感染拡大を防ぐことはできませんでした。一方で、こうしたコロナ対応によって、子どもたちの健康・発達を阻害する長期的な影響が出始めています。ここでは最初に山本英彦さんと古賀真子さんから問題提起を受けて、若手で発達研究に取り組んでいる戸松太一さん（乳児期）、横井川美佳さん（幼児期）、本原琴美さん（児童期・思春期）から、コロナ対応によって子どもたちにどのような影響があったかを具体的に示してもらいました。それをもとに、子どもたちの生命・健康・発達を尊重し保障するために必要な課題や、よりよい保育・教育・子育てのあり方について討議しました。報告と討議の要点を紹介します。

●話題提供

（1）山本英彦（医療問題研究会、小児科医）「新型コロナウイルス感染症の実態とワクチンの問題点～今後の感染症対策・予防接種のあり方を考える」

新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の特徴と重症度、ワクチンの問題点について自らの罹患経験も含めてお伝えする。日本政府・厚労省が推進してきたコロナワクチンの効果は発症予防及び重症化予防とも疑問で、副作用による重篤な健康被害が急速に拡大している。ワクチン接種後５日以内に亡くなる人が多い。若者の心筋炎などコロナワクチン特有の副作用も明確だ。しかし厚労省は健康被害のほとんどを不認定とし、被害を隠蔽し補償を回避している。具体的な副作用被害の事実資料から、ワクチンによって超過死亡が増加している実態を示し、国のワクチン政策の問題点を明らかにした。

ワクチン接種を公的制度として導入するためには、厳密なRCT研究（ランダム化比較試験）等を通じて、そのワクチンの安全性、有効性、及び必要性が明確に確証されなければならない。コロナワクチンはそのいずれにも問題があり、とくに０～10歳代や20～30歳代の若年層への接種は不要であるだけなく、有効性や安全性も確認されていない。それぞれ約２万人を対象としたRCT研究では、ワクチン群とプラセボ群の間で死亡率に有意な差はみられなかったことから、コロナワクチンはコロナウイルスの感染・発症を抑えることはできないと考えられる。

新型コロナは、ワクチンでなく、高齢者中心に罹患時のリスクの高い人たちへの行政的・医療的支援で乗り切るべき疾患である。コロナ医療崩壊で明らかとなった日本の脆弱な公衆衛生対策を指摘し、保健所拡充やクラスター対応、死亡例対策の必要性と医療体制の整備の必要性を提起する。

（2）古賀真子（コンシューマネット・ジャパン理事長）「コロナ対応の問題点と今後の医療行政のあり方～保育・教育現場での感染症予防対策を考える～」

1970年代の予防接種禍４大訴訟後、MMRワクチン薬害事件を経て1994年に予防接種法が改正され、国の医療政策が見直されてきた。しかし2000年に入って多くの外国製ワクチンの導入が図られ、接種後の死亡など重篤な副反応被害が相次いでいる。2010年には、子宮頸がんの予防のためとして

HPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンの大規模接種によって多数の少女が副反応被害に見舞われた。被害訴訟が提起され、2023年には全国４ヵ所での集団訴訟が証人尋問に入っている。

2020年の新型コロナ発生では、感染症対策としてワクチンの接種勧奨が現在も続いているが、コロナワクチンは長期的な副作用が検証されていないゲノム製剤であり、医療機関から厚労省への報告事例だけでもワクチン後の死亡者数は2000名以上に達している。戦後最大の薬害である。そのほか心筋炎、心膜炎、血栓症など有害事象の報告件数は３万６千件を超えているが、実際の被害はさらに多く被害救済は立ち遅れている。

筆者らは当初からコロナ問題に取り組み、また免疫学やウイルス学の最新の成果をもとに、新型コロナの実態とコロナワクチンについて、副作用被害の問題と被害救済の具体的な手続きを冊子にまとめた（https://consumernet.jp/）。わが国の感染症対策の歴史を振り返り、世界の流れに逆行する日本の過剰なワクチン依存体質の実例をもとに、今後、子どもから高齢者に至る全世代が感染症対策としての予防接種にどう向き合うべきかを考えていきたい。

●指定討論

1）戸松太一（京都大学大学院）
「コロナ対応が乳幼児の内受容感覚、表情認知、社会的参照の発達へ与える影響」

情動機能の形成には、内臓-血管系･自律神経系･免疫系等の身体内部の生理状態に関する「内受容感覚」が重要となる。コロナ禍で内受容感覚が揺らぐだけでなく、三密回避やマスク着用での表情の遮蔽によって他者の感情の理解が困難となり自己信頼性の発達が抑制される実態がある。子どもたちの生命・健康・発達を大切にする保育・教育のあり方を問いかけた。

2）横井川美佳（京都大学大学院）
「コロナ対応による自己認識の脆弱化」

コロナ前後の幼児の自画像描画の変化を分析した。コロナ後には鼻や耳など重要な顔の部位を描かない傾向がみられた。三密回避やマスク着用などのコロナ対応によって、相手の表情や気持ちの理解が困難となった可能性があり、保育・教育・療育の現場での対応を早急に見直す必要がある。

3）本原琴美（竹富町立大原中学校）
「コロナ対応による思春期の精神的健康と自己信頼性への影響」

小学３～６年生180名、中学１～３年生119名を対象に「一般健康調査」と「自己理解アンケート」を実施し、思春期の心の健康と自己信頼性へのコロナ対応の影響を確かめた。特に小５女子と中１～３女子で自己理解のネガティブ度が高く、精神的な健康度が低下していた。コロナ対応によって、小中学生たちの心の健康や自己信頼性の発達が揺らいでいる実態が見逃せない。

●おわりに（質疑応答と総合討議）

総合討議では、次のような論点と今後の研究への期待が示された。①マスクや三密回避の影響は、子どもたちの感情理解の発達阻害にとどまらず、自己信頼性や相互の尊重性の抑制や、社会的なつながりを分断する面まで考慮する必要があるのではないか。②子どもたちへの影響として、現実の社会的な要因によって心身の健康度が変わる。寄り添ってくれる人、大切な人がそばに居てくれることで、被害にあっても守ってもらえるとともに、大切にされる実感や経験が重要。③同調圧力の問題を心理学的に解明してほしい。８割がワクチン接種したが、２割の人たちは接種を回避できた。この２割は大きな数値。マスク着用や三密回避、さらにワクチン接種といった一面的な感染症対応でなく、誤った同調圧力への抵抗性（レジリエンシー）を支えるものを明らかにして、子どもたちの本来の健康と発達を支えるための医療・教育・社会制度のよりよいあり方を深く理解していきたい。

田中　真介（たなか・しんすけ）／ 発達論、神経科学、発達診断学を専攻。京都大学国際高等教育院准教授。

ポストコロナ時代の心理学の教育を考える

伊藤　令枝
（日本大学）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とそれに伴う「密」対策は、教育やその方法をはじめ、人間同士の関わりかたや意識に影響を及ぼしました。そこで、変化著しいこの時期にこそ、心理学の教育のあり方、あり様を考えるべく、本ワークショップは企画されました。

まず、有木永子先生（日本大学）には、コロナ禍での学生のメンタルヘルスと教育活動についてご報告いただきました。オンライン授業が中心だった時期は、学生に疲労や生活リズムの乱れ、時間管理や生活管理の困難さだけでなく、さまざまな心理的ストレス反応が生じやすかった一方、対面授業の再開後は、対人場面や対面授業への戸惑いや不安、講義教室への入室困難などが見られるようになったことが明らかにされました。そこで有木先生は、オンライン授業では、学生からの反応を即座に次の講義（の動画）でフィードバックするとともに、ストレス・コーピング・スキルを伝授し、対面授業再開後には、ストレス・マネジメント、グループワークや体験型学習を導入するなど、学生の状況に応じた講義や対応を行っているそうです。

次に、外島裕先生（日本大学）には、企業研修におけるリーダー開発事例をご紹介いただきました。外島先生が長年のご経験から編み出された心理教育の方法は、グループワークや面談、行動計画の策定、その後のフォロー研修等で構成されます。職務遂行において求められるものは、生来的な「能力」ではなく、磨き、伸長できる実践的「スキル」です。そこで実際の研修では、受講者自身のパーソナリティ検査の結果と、職場で共に働く人々によるリポートやアドバイスを統合させた「360度フィードバック」によって、自己理解と自己覚知を促進し、より効果的で適切な職務行動を意識することを目指します。コロナ禍でのリモート研修は、受講者の門戸を広げた半面、深い洞察につながりにくかったことが明らかにされました。また、リモートワークの急速な普及によって、対人相互作用にかかわる行動が蓄積されにくくなり、人材育成や能力開発、ひいては、企業経営に影響が及ぶ可能性も指摘されました。

指定討論の藤田主一先生（日本体育大学）には、対面型とオンライン型の教育を比較して議論を促進していただきました。前者の教育では、学習者は前後左右に同じ立場の者を「感じ」ながら、リアルタイムに学習を進められますが、後者では、そのような「場」や対人相互作用が不足しがちです。教育は、知識の伝達だけでなく、学習者の発達に寄与するものですから、リモート形式の教育が完全に対面型の代わりになりうるわけではないと考えられます。

教育は時代や状況に応じて変化していきます。しかし、その根幹には変わらない部分があること、また、教育に携わる側には学習者に対する細やかな姿勢が欠かせないことを、ワークショップをとおして強く感じた次第です。

さて、第89回大会が盛大に開催されたことは、高石光一先生はじめ大会実行委員会の先生方、学生スタッフの皆様の多大なる御尽力の賜物です。末筆ではありますが、御礼申し上げます。

伊藤　令枝（いとう・よしえ）／ 1978年２月、東京都出身。日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得退学。専門は認知心理学、教育心理学、アニメーションの心理学。現在、日本大学、千葉工業大学等にて非常勤講師として勤務。日本応用心理学会理事。

研究発表を終えて

村山　陽
（東京都健康長寿医療センター研究所）

昨今、単身中高年者の孤立・孤独が深刻な問題として取りざたされています。私達の研究チームでは、心理学や社会福祉学、公衆衛生学など多領域のメンバーが集まり孤立・孤独予防に向けた研究や社会実装に向けた活動を行っています。

本大会では「孤立状態にある単身中高年者における対面とオンラインコミュニケーションの志向性の違いによるSNS利用と孤独感との関連」を発表しました。単身中高年者におけるオンラインコミュニケーションの志向性による違いが、SNS利用と孤独感との関連に影響するのではないかと想定し、その検証を行いました。

先ず50～79歳の単身者45名に半構造化面接を行いました。SNS上でのコミュニケーションについての考え等を尋ね、質的分析手法により「コミュニケーション志向性尺度」を作成しました。次に、本尺度をもとに40～70代の単身者1900人にWeb調査を行いました。その結果、孤立状態にある60～70代ではSNS上でやり取りがある人数と孤独感との関連にコミュニケーションの志向性が影響することが認められました。対面志向が高い人やオンライン志向が低い人では、SNS上でやり取りする人数が少ないほど孤独感を感じていました。一方、対面志向が低い人やオンライン志向の高い人では孤独感への影響は見られませんでした。こうした結果は、孤立状態であっても孤独の感じ方は多様であることを示唆しており、それゆえ孤立・孤独解消に向けてそれぞれの志向性に合った方法を検討することが今後の課題になります。

本大会ではフラッシュトークとポスターで発表する機会を頂き、いろいろな先生方からたくさんの有意義なコメントを頂くことができました。対面開催の大会では、憧れの先生方とお話しできたり、発表者の先生方との意見交換を通して大変よい刺激を受け研究に対するモチベーションも一層高まりました。このような素晴らしい大会の企画・運営をして頂いた第89回大会実行委員会の皆様に、深く御礼申し上げます。

村山　陽（むらやま・よう）／東京都健康長寿医療センター研究所社会参加とヘルシーエイジング研究チーム研究員（係長）、博士（社会学）。専門は、社会心理学。近年は、中高年者の孤立・孤独予防や地域における世代間交流について研究している。

研究発表を終えて

本多　麻子
（東京成徳大学）

研究発表報告の機会をいただき、ありがとうございます。大会委員長の髙石光一先生、委員の先生方、広報委員長の谷口淳一先生に心から感謝申し上げます。

2012年に現所属、応用心理学部健康・スポーツ心理学科に着任したことをきっかけとして本学会に入会しました。精神生理学が専門でしたが、実験環境等の関係で、健康心理学、スポーツ心理学など応用心理学に手を広げています（講義担当によりポジティブ心理学も）。本大会では特に、大会企画シンポジウム「ポジティブ心理学の潮流と応用―ポストコロナ時代における健康で幸福な生き方を考える―」が非常に興味深く、勉強になりました。

本大会で「『諦めたら試合終了』とは限らない：楽観性と自分への優しさによる建設的な諦め方」というタイトルで発表させていただきました。目標が達成できず、不本意な結果となったり、挫折を経験したりすることは多かれ少なかれ共通の経

験だと思います。本研究では挫折経験に対する適応的諦観とセルフ・コンパッションと楽観性の関連を検討しました。適応的諦観とは、楽観的な諦観をもって思い悩まないという認知的態度です。セルフ・コンパッションは、自分に対する優しさです。挫折経験について、ネガティブな側面を受容しつつもそこにこだわらない前向きな態度が高いほど、自分に対して優しく接し、慈しみの気持ちを向けることが解りました。挫折経験に対して、楽観的な諦観をもって思い悩まない認知的態度や、過度に自分を責めず、自分に対して優しく接し、慈しみの気持ちを向けることはうまく現実と折り合いをつける割り切り方や、違う目標に前向きに向かうきっかけとなる再選択型の建設的な諦めをもたらすと示唆されました。「諦めたら試合終了（ましてや人生終了）」という信念で、報われない経験を重ねてバーンアウト、絶望、消えたくなるくらいなら方向転換しましょうよ、「諦めたら試合終了ではないよ」とお伝えしたいです。発表では貴重なコメントをいただきました。心より御礼申し上げます。より一層精進して参ります。

本多　麻子（ほんだ・あさこ）／ 早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。指導健康心理士。東京成徳大学応用心理学部健康・スポーツ心理学科准教授。専門は健康心理学と関連領域。心と身体の元気を作る心理学を目指し、最近はネガティブな出来事からの回復と成長の研究に従事している。

研究発表を終えて

井梅　由美子
（東京未来大学）

このたびは、日本応用心理学会第89回大会に参加させていただき、発表の機会をいただきました。また、このような形で発表を振り返る機会をいただきましたこと、大変感謝申し上げます。

今大会では、「夫婦の家事分担の程度と日常のストレスおよび夫婦関係満足度について」というタイトルで発表させていただきました。これまで、子育て中の母親（あるいは父親）への心理臨床的支援を視野に、育児不安や育児困難感について調査を行ってきました。そうした中で、夫婦関係は育児不安や成人のメンタルヘルスを考える上で重要と感じており、今回、夫婦関係に焦点をあてた調査を行いました。研究では、オンライン調査にて、配偶者のいる成人男女から回答を得ました。夫と妻の家事分担の程度については、総じて妻が分担している割合が高く、妻の就労形態によって分担の程度に違いが見られました。また、妻は、家事分担を夫が担っていると評価するほど夫婦関係の満足度が高いこと、子どもがいる夫婦と子どもがいない夫婦で夫婦関係満足度に違いがあることなどが示されました。

「夫婦の家事分担と夫婦関係満足度」という、多くの人にとって身近なテーマで発表させていただいたためか、実体験を伴ったご意見を多くいただくことができました。さまざまなお立場からのご意見は大変示唆深く、今回、探索的な調査ではありましたが、次の研究につながる大変貴重なご意見をいただくことができました。発表を聞きに来て下さった皆様には、改めて感謝申し上げます。

長引くコロナの影響で、ここ数年はどの学会も対面での学会発表が難しいという困難がございましたが、今回、対面にて発表をさせていただいて、改めて、その良さを感じることができました。フラッシュトークにて、研究を紹介いただくことによって、さまざまな領域の研究に興味を持つきっかけとなりましたし、ポスター発表を見て回ることによって、新たな視点や研究のヒントをいただくことができました。コロナ禍を経て、さまざまな工夫で大会を実り多いものとして下さった第89回大会実行委員の皆様に、厚く御礼申し上げます。

井梅　由美子（いうめ・ゆみこ）／ 東京未来大学こども心理学部准教授。公認心理師。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程単位取得退学。専門は臨床心理学。

研究発表を終えて

井川　純一
（東北学院大学）

応用心理学会には、今年度から入会し初めてポスター発表に参加させていただきました。これまで多くの学会に参加させていただきましたが、応用心理学会の雰囲気はその中でもとてもアットホームで居心地良く感じたことが印象に残っています。

発表の内容は、バーンアウトの測定方法に着目し、複数の尺度で測定されているバーンアウト症状を比較した結果でした。バーンアウトを測定するために多くの尺度が開発され、それぞれの尺度には類似している部分もあれば、異なっている部分があります。つまり、研究者それぞれが「僕のかんがえたバーンアウト」を測定しているわけです。この点を見ると、そもそも研究者がバーンアウトと呼んでいる症状とは果たしてなんなのかという疑問が残ります。そもそもバーンアウトは他のストレス反応とどう違うのでしょうか？

僕がこれまでライフワークとして行ってきた研究は、「バーンアウト」という心的構成概念についての批判的なアプローチであり、いつもどの学会で発表するべきかを悩む内容です。応用心理学会では、多彩なメンバーが参加していることもあり、多くの参加者の方々と建設的な議論をすることができました。初めての学会ということで今まで話す機会のなかった先生方と知り合うきっかけにもなりました。やはり対面学会はいいですね。開催に至ってご尽力いただいた大会実行委員会の皆様に感謝申し上げます。

また、ポスターの内容を１分で説明するフラッシュトークも今回初めて参加させてもらいました。自分のトークは緊張してよく覚えていませんが、多岐にわたる発表の概要は一気に分かるという意味でとてもおもしろい取り組みだと思いました。来年の大会（至帝塚山大学）にもぜひ参加させていただきたいと思います。燃え尽きない程度にリラックスしていい研究をしていきたいですね。

井川　純一（いがわ・じゅんいち）／ 広島大学大学院総合科学研究科修了。博士（学術）。大分大学経済学部准教授を経て、2022年より東北学院大学人間科学科心理行動学科に勤務。バーンアウト概念に関する研究に加えて、近年はYahoo!ニュースやYouTubeにおけるコメント機能の社会的影響に関連する研究を行っている。

研究発表を終えて

高橋　明子
（労働安全衛生総合研究所）

日本応用心理学会第89回大会にて「建設作業者における安全行動の促進要因の分析」というタイトルで、２名の共著者と一緒にポスター発表をさせていただきました。建設業では作業者の不安全行動に起因する労働災害の防止が課題の一つになっていますが、既存の工学的対策や管理的対策だけでは不安全行動を防止するのは難しいと言えます。そこで、今回の発表では不安全行動防止の知見を得るため、「建設作業者が安全行動をするのはなぜか」ということに着目し、安全行動の促進要因と安全行動の関係について建設作業者を対象とした質問紙調査により検討しました。結果としては、「具体的な認識・自覚」を持つことが安全行動を促進すること、その中でも特にケガ・事故による自己・他者への影響を具体的に認識していることが、安全行動を促進する主要な変数であることがわかりました。

ポスター発表には建設業の安全というマイナーなテーマにもかかわらず、様々な研究分野の先生方が聞きに来てくださり、貴重なコメントや質問

をしてくださって大変勉強になりました。研究分野が異なっていても、フラッシュトークで私の研究発表に興味を持ってくださった方もポスター発表を聞きに来てくださり、他分野の知見を伺うことができてとても参考になりました。

日本応用心理学会は、毎回、私とは研究フィールドは異なりますが安全の研究をされている先生方もたくさん参加されており、研究をする上での共通の苦労を分かち合うことができたり、安全に関する新たな知識やアプローチを学ぶことができたりと多くの刺激をいただくことができます。今後も引き続き、日本応用心理学会にて研究発表をさせていただきたいと思っております。

最後に、大会実行委員長の髙石光一先生をはじめ、大会の開催にご尽力されたすべての皆様、ポスター発表等で貴重なご意見をいただいた皆様、今回このような大会の振り返りの機会をくださった広報委員の皆様に感謝申し上げます。

高橋　明子（たかはし・あきこ）／ 早稲田大学大学院人間科学学術院博士後期課程満期退学。博士（人間科学）。現在、（独）労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所リスク管理研究グループ上席研究員。主に建設作業者の危険認知と安全教育の研究に従事。

研究発表を終えて

中野　友香子
（科学警察研究所）

日本応用心理学会第89回大会では「幼児の道路横断可否判断は母親の予想と一致するのか」というタイトルで口頭発表を行いました。

子どもの交通事故を防ぐためには大人が模範を示すことが大切ですが、親が子どもの道路横断可否判断能力を十分には理解しておらず、無自覚なままに子どもの目の前で悪い見本を示している可能性があります。そこで、5-6歳の子どもとその母親を対象とした調査を行い、子どもの道路横断可否判断がその母親の予想と一致するのかを検証した結果を発表しました。

調査では、子どもを対象として半構造化面接を行い、道路を横断するには危険な場面（歩行者用信号が青点滅している場面など）で横断するか否かを判断してもらい、類似場面で道路を横断した経験について話してもらいました。母親には質問紙調査を実施し、面接の概要を示して「自分の子がどのような判断をするか」を予想してもらいました。その結果、各場面で「横断する」と回答した子どもは「類似場面で横断した経験がある」と回答した割合が高く、普段の親との横断経験が子どもの横断可否の判断と関連していることが示されました。また、各場面における子どもの横断可否判断は母親の予想との一致度が低く、母子の認識に齟齬が生じていることが示唆されました。現在は発表した内容を踏まえて、親子で安全な歩行行動を継続してもらえるように働きかける方法を研究しています。

本大会では、質疑応答を通じて発表内容について考察が不十分な点に気づいたり、異なる領域の先生方の発表を拝聴して新たな研究の切り口に気づいたり、大変貴重な機会をいただきました。一度に様々な分野・領域の先生方と交流できるのは、応用心理学会年次大会の大きな魅力だと再認識しました。また先生方と交流できる機会を楽しみに研究を進めてまいります。

最後に、このような振り返りの機会を与えてくださった広報委員会の皆様に感謝申し上げます。

中野　友香子（なかの・ゆかこ）／ 科学警察研究所交通科学部交通科学第二研究室研究員。東北大学大学院教育学研究科博士課程後期３年の課程単位取得退学後、2015年より現職。専門は交通心理学・教育心理学。

研究発表を終えて

山内　春佳
（帝塚山大学大学院）

はじめに、第89回大会について振り返る機会をいただきましたこと、感謝申し上げます。

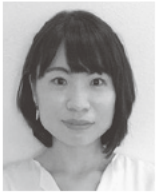
今大会は初めての学会発表ということもあり、とても緊張していました。しかし、先生方と研究のお話をするなかで緊張は解けていき、とても楽しく、充実した時間を過ごすことができました。

私は、「集中の度合いが第二言語学習の効率に及ぼす影響―Near-infrared Hemoencephalography を集中度の指標として―」というタイトルで発表させていただきました。本研究では、第二言語学習の学習過程における集中度をnIR-HEGで測定し、学習効率との関連について検討しました。結果、HEGの高さが直接的に学習成績に影響することはありませんでしたが、難易度が高い学習をしている間のほうがHEGの上昇が大きくなり、注意集中が高まるという結果でした。能力が高い人は、集中しなくても正答できる可能性があるため、集中度の高さと学習成績には関連が見られなかったのだろうと考えられます。

今回、フラッシュトークとポスター発表で参加させていただきました。どちらも初めての経験で、１分という短い時間で研究内容を伝えることや、興味を持っていただけるような発表をするということは難しさがありました。当日は、興味を持っていただけるか不安でいっぱいでしたが、多くの先生方がポスターを見てくださり、大変貴重なご意見をくださいました。心より感謝申し上げます。今後も、より一層研究に励んで参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

山内　春佳（やまのうち・はるか）／ 2023年東北文教大学人間科学部卒業。現在、帝塚山大学大学院心理科学研究科博士前期課程の大学院生として在籍している。研究テーマは英語学習における動機づけについて。

教育発表を終えて



山本　真菜
（日本大学）

日本大学商学部の私が担当するゼミナールの３年生２グループが、日本応用心理学会第89回大会の教育発表でポスター発表を行う機会をいただきました。学部生が学外で発表できる機会は多くはないと思いますので、このような貴重な機会をつくっていただき大変有難く思います。

ゼミでは、２年生で先行研究の追試を行いながら社会心理学の研究法を学び、３年生では研究グループをつくり自分たちの興味関心に基づいて研究計画を立案します。今回の発表では、３年生が研究グループで研究計画を立案したその内容を発表させていただきました。４月から始まった３年生の研究では、これまでの学修を基に学生たちが自らテーマを決め、実験計画を立案していきました。学会発表のポスターが完成した後も、発表当日ぎりぎりまで発表の練習をしたり、先行研究を改めてまとめたり、こんな質問があったらどう答える？という話し合いをしたり、学生たちは当日に向けて努力を重ねていました。これも学会発表という大きな目標があったからこそできることかと思います。

学会当日は、多くの皆様に有益なご指摘、コメントをいただき、また学生たちも一生懸命に答えている姿が印象的でした。ゼミ内だけでは経験できない専門家の先生方や他大学の学生さんとのコミュニケーション、緊張感を体験できたのではないかと思います。学会後のゼミでは、頂いたご指

摘をひとつずつ振り返り、研究計画の修正を行いました。現在、この記事を書いている時点ではゼミ生たちが研究計画に基づき実験を実施し、データの分析を行おうとしているところです。私も、どのような結果になるのか学生たちとわくわくしながら一緒に研究を楽しんでいます。

最後になりますが、学部生が発表できる貴重な機会が今後も増えることを願っております。学生たちにこのような学びの機会をいただき、心より感謝申し上げます。

山本 真菜（やまもと・まな）／ 日本大学商学部准教授。日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。大妻女子大学人間関係学部助手、日本大学商学部専任講師を経て現職。専門は社会心理学。

教育発表を終えて

猪鼻 ももこ・
佐藤 洋亮・露木 麻衣
（日本大学）

日本大学商学部の山本真菜社会心理ゼミナールの三年次ゼミ生です。この度の日本応用心理学会には『昆虫食に対する印象に影響を与える要因の検討』、『「お土産」に対する魅力度に影響を及ぼす要因の検討』の二つの研究グループが参加させて頂きました。発表の機会を頂き、ありがとうございました。

私たちは毎年、ゼミ生同士で研究テーマを決めています。ゼミ生はみな、商業学や経営学を中心に学んでいるため、そこで得た知識をベースにこのテーマに決定致しました。

発表時は研究計画の段階でしたが、教育発表の方を中心にご意見を頂き、さらに精度を向上させることに繋がりました。また、心理学を研究する方と交流できたこと自体も貴重な機会となりました。

ポスターの作成や学会での発表など、初めてのことばかりで緊張しましたが、様々な視点から研究を見つめ直すとても貴重な体験をすることができました。

想像していたよりも多くの方々が、私たちの研究に興味を持ってくださいました。その際ご意見や改善点などをご指摘頂き、今後の研究活動への精度を高めることに繋げたのと同時に、意欲がさらに高まりました。

発表する機会を頂き、ありがとうございました。私たちの研究にアドバイスをくださった先生方に感謝申し上げます。先生方から頂いたアドバイスを参考にし、さらに研究に取り組み、精進して参ります。

猪鼻 ももこ（いのはな・ももこ）／ 日本大学商学部商業学科３年マーケティングコースに所属。社会心理学のゼミナールで昆虫食に対する印象に影響を与える要因について研究。
佐藤 洋亮（さとう・ようすけ）／ 日本大学商学部商業学科３年マーケティングコースに所属。社会心理学のゼミナールで昆虫食に対する印象に影響を与える要因について研究。
露木 麻衣（つゆき・まい）／ 日本大学商学部商業学科３年金融エコノミーコースに所属。社会心理学のゼミナールでお土産に対する魅力度に影響を及ぼす要因について研究。

教育発表を終えて

深見 将志
（日本大学）

この度は、学生の貴重な学びとなる教育発表の機会をいただき、ありがとうございました。第89回大会準備委員会の皆様、ならびに学会関係者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

私が所属する日本大学商学部では、大学では珍しく専門科目のみならず総合教育科目教員のゼミナールが設定されており、私のゼミナールでは、スポーツ心理学を主なテーマとしております。学

生は、授業時間内外を問わず、基礎的な知識の獲得から基礎、応用研究論文の輪読、実験や調査の実施など幅広く見聞を深めております。

今回、我々のゼミナールでは、４年生のみが教育研究発表に参加しました。これは、彼らの学年がオンライン主体の学びが続く環境に身を置いていたからです。彼らは大学入学と同時にコロナ禍になり、否応なしにオンライン中心の学生生活を送りました。コロナ禍以前の私のゼミナールでは、他学会大会の学生発表に参加し、対面でのポスター発表を行っておりました。しかしながら、コロナ禍を機にオンライン形式の実施方法に切り替わり、現在では学生が対面で研究発表を行う機会が消失してしまいました。また、ゼミの活動では、学生たちが積極的に学び、問題解決を通じて成長できるよう心がけています。しかしながら、研究成果の発表には、学内の活動に依存し、様々な意見や視点を得ることが難しいという課題もありました。

そのような中で、本大会のように対面形式にて、諸先生方の前で日頃の学びをアウトプットできたこと、さらにはそれらに対してフィードバックまでいただけたことは、計り知れない教育的効果を期待するものでした。学生たちにとっては、この上ない刺激となったようです。

先生方からの質問やアドバイスは、学生たちの卒業論文執筆に有益なご指摘となったばかりか、大変な刺激を受けてギアが一段上がったようです。近くで見ている私からも、学生の卒論に向けた姿勢が変化している様子を実感しております。改めて、対面にて研究成果を発表する実践的な学修の機会は、学生にとって貴重な学びの場となることを再認識させていただきました。引き続き、本学会での教育発表を活用して教育活動を展開していく予定です。今後とも、学生共々ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

深見　将志（ふかみ・まさし）／ 神奈川県出身。2015年、日本体育大学大学院体育科学研究科より博士（体育科学）授与。現在、日本大学商学部准教授。専門はスポーツ心理学。

教育発表を終えて

藤澤　虎太郎
（日本大学）

はじめに、学部生でありながら日本応用心理学会第89回大会に参加させていただいたこと、ならびに教育研究発表の機会を設けていただいたことを関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

今回の教育発表では、日本大学商学部深見将志ゼミナールのゼミ生２名と協力し、「ソーシャルスキルと外見的魅力が異性への好意度に及ぼす影響」というテーマに取り組みました。このテーマを選んだ背景には、私たち大学生の日常生活において身近な男女間の恋愛感情について、科学的に探究してみたいという思いがありました。テーマの設定は興味関心が先行したものの、学問的な視座からの検討をするべく、可能な限りの追及をいたしました。

具体的には、先行研究から、男性は女性の「外見」を重視しており、反対に女性は、男性の「内面（コミュニケーション力）」を重視しているのではないかという、推測がたてられました。私たちは、この推測のもと、男性に焦点をあてて「外見」と「コミュニケーション力」のそれぞれが、初対面の女性にどのような印象を与えるのかについて、実験からの検証を試みました。本研究の結果、コミュニケーションスキルを有している男性は、自覚的な外見魅力が低くても、女性との親密化に繋がることが明らかとなりました。つまりは外見に自信が無い男性であっても、コミュニケーション力が高ければ、初対面の女性は好印象を抱いているという結果です。

この研究内容を発表する場として、今回の学会大会は非常に有意義であったと感じています。様々な諸先生方から寄せられたアイデアや感想を通じて、新しい視座や改善点が明らかになりまし

た。また、フラッシュトークのように他の先生方のご発表を拝聴することで、自身の研究においてはまだまだ課題が残っていることも改めて認識しました。

最後に、ポスター発表会場にて、アドバイスやコメントを下さった皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

藤澤　虎太郎（ふじさわ・こたろう）／発表当時、日本大学商学部経営学科４年生。深見将志ゼミナールでスポーツ心理学を学ぶ。今回の発表テーマである、ソーシャルスキルと外見的魅力が異性への好意度に及ぼす影響について卒業研究を実施した。

第90回大会に向けて

谷口　淳一
（帝塚山大学）

日本応用心理学会第90回大会は、奈良県奈良市の帝塚山大学学園前キャンパスにて開催させていただくことになりました。大会委員長を務めることになりました谷口淳一と申します。よろしくお願いいたします。

全国から会員の皆様をはじめ、多くの方々をお迎えすべく、大会委員会では準備を進めております。会期は、８月27日（火）・28日（水）です。昨年の亜細亜大学で開催されました第89回大会と同様に全面対面で開催します。帝塚山大学では17年前の2007年に蓮花一己先生が大会委員長を務め、第74回大会を開催しました。私はまだ赴任前で学会員ですらなかったため、当時の様子は分からないのですが、多くの先生方からとても盛大な大会だったとのお話をうかがいました。残されていた過去の資料を見ると、蓮花先生と森下高治先生（第３期理事長）を先頭に学内の先生や大学院生が総動員で実施されていたようで、大変な熱気を感じました。その頃に比べると学内の教員や大学院生の会員は少なく、当時のような盛り上がりを再現することは難しいですが、応用心理学の有益な研究と情報の交流の場となる大会にしたいと思います。

第90回大会では奈良という地域を意識しながら、「教育」と「日本酒」に関するシンポジウムを計画中です。自主企画ワークショップや教育発表も募集します。一般研究発表については、ポスター発表のみ募集いたします。第88回大会から始まったフラッシュトークという素晴らしい試みですが、今回はあえて実施しないこととしました。ポスター発表の同時発表数を少なくして多くの方に発表が見てもらえるよう、その時間を確保するためです。どうかご理解ください。

第89回大会に引き続き、１日目の夜には懇親会も学内で開催します。奈良の地酒をできるだけ多く用意する準備を進めています。こちらもご期待ください。

本大会最大のウリはなんといっても古都・奈良での開催です。大会を実施する学園前キャンパスは近鉄学園前駅の目の前、徒歩１分の好立地にあります。世界遺産である東大寺や興福寺、春日大社の最寄りの近鉄奈良駅までは10分ほどで到着します。薬師寺や唐招提寺も至近です。近鉄奈良駅近辺の「ならまち」は古い町並みの中に素敵なお店が立ち並んでおり、人気の観光スポットです。どうぞ「大人の修学旅行」と思ってお越しください。ただ、昨年にCovid-19が５類に移行されたことに伴い、観光客が奈良にも戻ってきて大変賑わっております。おそらく夏のこの時期も宿泊施設などの混雑が予想されます。今回、平日開催となり、ご所属先の業務の都合上、参加のご調整にご面倒をおかけするかもしれませんが、その分、土日よりは混雑も緩和されていることを期待しています。とはいうものの、宿泊施設については早目のご手配をお願いいたします。

2024年は帝塚山大学が開学60周年を迎える年でもあります。本大会は帝塚山大学協賛のもと、開学60周年記念事業の１つとして位置づけ、大学をあげて準備を進めたいと思います。酷暑が予想されますが、夏の奈良にぜひお越しください。

谷口　淳一（たにぐち・じゅんいち）／ 帝塚山大学心理学部教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（人間科学）。大阪国際大学人間科学部講師を経て現職。専門は社会心理学、特に親密な関係や自己呈示について研究。

2023年度齊藤勇記念出版賞を受賞しました。

高齢ドライバーの意識革命
―安全ゆとり運転で事故防止―

松浦　常夫 著

2022年４月20日発行
(株)福村出版
本体2,400円（税別）

この本は交通安全の指導者、あるいはまだ運転を続けたい高齢ドライバーに対して、安全ゆとり運転を勧める理論的背景やその具体的運転方法を紹介したものです。20個の安全ゆとり運転の実行度やその具体的運転方法は、各年齢層のドライバーに質問して得たデータを使いました。また、安全ゆとり運転をするにもある程度の運転スキルが必要なので、それすら出来なくなった時に、どう運転断念（免許返納）へと移行していくかのプロセスについては、最終章で述べました。

なぜこの本を書くに至ったかというと、科学警察研究所の交通安全研究室に勤務していた頃から大学に移った今まで、高齢ドライバーの運転行動や事故や心身能力が研究テーマの１つだったからです。幸い、「高齢ドライバーの心理学」という本を東京大学出版会から数年前に出していただいたので、このテーマに区切りを付けたつもりでしたが、まだ高齢ドライバーのセルフ・レギュレーションとしての補償運転（安全ゆとり運転）については、まとめ切れていませんでした。安全ゆとり運転が、高齢ドライバーの社会参加を促し、また事故防止にもつながるという確信はありましたが、その具体的運転方法については示せずにいたのです。

そこへ福村出版から出版された「現代社会と応用心理学　４クローズアップ　メンタルヘルス・安全」と「７クローズアップ　犯罪」の編集担当をしていたAさんから、原稿依頼がありました。その時、Aさんは他の出版社に移りそこで編集をされていましたが、私が上記の本で分担して書いた「トピック運転態度」や「トピック交通事犯」を読んで、今度は高齢ドライバー問題の本をお願いしたいというお話でした。

縁があってラッキーだなと一人喜ぶ展開でした。しかし、しばらくしてAさんのお話は出版社の企画会議でボツとなってしまい、一転残念な気持ちになりました。書くのをやめようとも思いましたが、そこを思い留まって、コロナの時期にとりあえず書いてみて、福村出版の宮下社長に頼んで出来たのがこの本です。

高齢者にもわかりやすく、トピックごとに見開きなどにして絵や図をたくさん入れるというのがAさんの注文でしたが、出来た本はそれより硬い本になってしまいました。そういう意味では、この本は「齊藤勇記念出版賞」にはふさわしくないかもしれません。この本を書いてみて、一般の人にわかりやすく、かつ科学的根拠のある文章を書くことの大変さを再認識しました。

最後に、本の編集・作成に携わっていただいた方、賞の選考委員の方、そしてこの本を読んでいただいた方に感謝いたします。本の内容はさておいて、私には珍しくドラマのある本でした。

松浦　常夫（まつうら・つねお）／ 東京大学教育学部教育心理学科卒、大阪大学博士（人間科学）。科学警察研究所を経て、現在は実践女子大学教授。今春に70歳退職、大学・専門学校等の非常勤講師を希望。専門は交通心理学で、現在は歩行の人間科学を研究。

若手会員研究奨励賞

2022年度
若手会員研究奨励賞

金山 英莉花
（同志社大学）

この度は栄えある若手研究者奨励賞を賜り誠にありがとうございます。審査をしていただいた先生方にも心よりお礼申し上げます。本研究は「幼児期における『マルチモーダルな音程知覚』が『音程知覚と発声運動の統合』に及ぼす影響」と題し、年長の幼児を対象とし、子どもが正確に音程を知覚し、正確な音程で歌唱できるようになるための支援方法を実証的に研究しているものです。

この研究は、学部生の頃保育園で保育補助として非常勤勤務していた経験が契機となっています。子どもたちが保育園で習った歌や流行りの歌を元気に口ずさんでいる様子を見て、まだ文字も楽譜も読めるわけではないのに、どうやって歌を覚えるのだろうと不思議に思いました。

そこでまず、正確な音程で歌うにはどのような認知能力が必要なのかということを、卒業論文のテーマとしました。音程が上がったり下がったりするのは、聴覚的知覚だけではなく、視覚的な知覚も関連しており、幼児の空間認知能力が高いほど、音程を正確に歌う歌唱能力が高いことが確認されました。こちらの結果は応用心理学研究49号に掲載していただきました。

次に、歌唱に必要となる音程知覚に着目しました。空間認知能力が高い幼児ほど音程知覚が正確になるのか、また音程の上がり下がりを身振りで示すことで、音程知覚が正確になるのかを実験により検証しました。さらに、空間認知能力が低く正確に音程知覚できない幼児も、身振りをすることでできるようになるのではないかということも検討するため、身振りと空間認知能力の交互作用も確認しました。その結果、空間認知能力が高い幼児ほど正確な音程知覚ができることは確認されましたが、身振りの効果は確認されませんでした。こちらの成果は2023年８月の日本応用心理学会第89回大会で発表させていただきました。

そして現在、音程知覚を正確にする身振りの改良と、その身振りが正確な歌唱を促すのかを研究しています。成果が出ましたら来年の応用心理学会で発表させていただき、ひいては幼児教育の現場に還元できるように精進して参りたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

金山　英莉花（かなやま・えりか）／ 2022年 同志社大学より修士（心理学）取得。現在は同大学院博士課程（後期課程）に在籍している。専門は発達心理学、乳幼児心理学。研究テーマは乳幼児の歌唱や絵本あそびについて。

学会賞（奨励賞）

田中　共子
（岡山大学）

沼　柊門
（メディカル・ケア・サービス関西株式会社）

このたびは奨励賞という栄えある賞を頂き、まことに光栄に存じます。学会が研究の営みを応援してくださることを心強く思い、研究視点を共有してくださることを大変嬉しく感じており、心より御礼申し上げます。この研究はご協力くださいました高齢者のみなさまあっての研究ですので、ご協力者の方々に深謝いたします。また研究の過程を支えてくれたゼミの研究仲間にも、感謝をお伝えしたく思います。

この論文は20代の若者と高齢者の入り口に立つベテランの研究者コンビで、この社会に生きる人間の加齢という現象を見つめたものです。全世代を挙げて高齢社会を生きる術を探している今日、その手がかりを探りました。調査を進めていく中で興味深かったこと、それは面接調査ご協力者の

語りから、「今の身体の状態が健康とは言えなくても、あるいは今の生活が自由なものであるとは言えなくても、考え方や捉え方次第で自分が幸福であると思うことができる」ということが、具体的な各人の経験や思考を通して得られたことです。体験に根ざした指針がそこに息づいているように思います。

加齢の受け止め方を認知的に調整して幸福を高める、いわば幸福の自己生産ともいえる「適応的受容」は、ゼミの研究系譜の一つで、学部生・大学院生と教員が共同研究で紡いできた主題です。ルーツは、教員の米国留学時代の指導教員が、米国の仏教寺院で受容の思想を学び、嗜癖行動の治療に応用した逸話にあります。薬物中毒者に軽い薬物や清潔な注射針を配付しながら、段階的に離脱を導く手法で成功率を上げ、国際学会で顕彰されていました。

西洋人が仏教の発想を「発見」し応用して成果をあげるなら、なぜそれを東洋人がしないのか。西洋人を待つのではなく、日本人が発信したら良いのではないか。知足安分（足るを知る）という仏教の思想で加齢を受容して心の安寧が訪れるなら、それを高齢者で実証し、ゆくゆくは認知療法的に健康心理学に応用して、健康心理カウンセリングに適用してはどうか、という考えが芽生えました。これは「東洋の英智」です。他の東洋の研究者も巻き込んで探求を深め、広く発信していければと願っています。

これまで面接調査や質問紙調査を行い、モデルの提案は本学会誌の短報に載せて頂きました。健康な高齢者のみならず、健康に不安を抱えた高齢者でも実証できるか調べたのが、今回の研究です。これからも地道に研究を進めていきたいと思いますので、ご一緒してくださる仲間が増えますよう、今回の受賞がその機会になれば幸いです。これからの発展に期待しております。引き続きどうぞよろしくお願い致します。

田中　共子（たなか・ともこ）／ 岡山大学社会文化科学学域教授。文学部、社会文化科学研究科（文学系）の教育に従事し、健康心理学、異文化間心理学の研究を行っている。博士（人間科学）（早稲田大学）。

沼　柊門（ぬま・しゅうと）／ 岡山大学文学部人文学科を卒業後、岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程に進学。修了後はメディカル・ケア・サービス関西株式会社に就職し、現在はグループホームで勤務。

第88回大会優秀発表賞
第１部門

藤田　主一
（日本体育大学）

新たな研究スタイルを模索して

このたび、歴史と伝統を誇る本学会より、名誉ある「優秀大会発表賞」を授与していただき大変光栄に存じます。誠にありがとうございました。これも、ご推薦いただいた会員の先生方、審査にあたられた本学会役員の先生方からの賜物であり、厚く御礼申し上げます。本学会に限らず、おそらく多くの研究者はデータの収集と分析を行い、その結果に基づいて論述されるはずです。それに比して、今回の研究スタイルはまさに文献研究の類であり、「原理」に相当する領域に位置づけられる発表形式といえるかもしれません。

今回の研究発表は、『高嶋正士と偉大性心理学―鎌倉時代に生きた親鸞聖人の偉大性について―』という題目です。これは、本学会名誉会員の故高嶋正士先生がライフワークとされた「人格の偉大性研究（とくに宗教的偉人の偉大性について）」の研究足跡を振り返ったものです。高嶋自身が浄土真宗の僧侶でしたので、宗教的偉人のなかでも親鸞に焦点を当てられたことは至極納得できるものです。

本研究の舞台は平安末期から鎌倉時代であり、登場人物は浄土真宗の宗祖である親鸞聖人です。第88回大会が開催された2022（令和4）年は、ちょうどNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」が放送されていたこともあり、筆者は何らかの形で親鸞聖人が登場するのではないかと期待していましたが、残念ながらそれはありませんでした（ドラマでは、

後鳥羽上皇との関係で天台宗の僧慈円が描かれました)。ただ、奇しくも2023（令和5）年３月～５月にかけて、「親鸞生誕850年―生涯と名宝」展が京都国立博物館で開催されたことは、改めて親鸞の生涯とその信仰の深さに触れることができたように思います。高嶋は、法然や日蓮とならんで親鸞をわが国中世における宗教的傑人であると位置づけています。彼が親鸞を「傑人」（または偉人）と評価した理由は、親鸞の人格や宗教的信念、人生観や他者への態度に求められますが、このあたりの詳細については、大会発表論文集をご高覧ください。

現在、親鸞が開いた浄土真宗の門徒数は、全国で1,500万人を超えるといわれています。その数の多さにも驚きますが、高嶋が親鸞の偉大性を心理学的な観点から言及したことも、今となれば高嶋自身の偉大性ではなかったかと思います。

「親鸞生誕850年―生涯と名宝」展と筆者

藤田　主一（ふじた・しゅいち）／ 1950年、新潟県生まれ。日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得満期退学。日本体育大学名誉教授、日本応用心理学会名誉会員・前理事長。第80回記念大会委員長。一般社団法人日本心理学諸学会連合心理学検定局前検定局長。

第88回大会優秀発表賞
第２部門

塚田　直也

（筑波大学附属視覚特別支援学校）

この度は、応用心理学会第88回大会にて優秀大会発表賞をいただき、誠にありがとうございます。また、本実践研究をまとめる過程に寄り添い、共に悩み、考え、多彩な援助をいただいた京都大学国際高等教育院の田中真介先生に心より感謝申し上げます。

併せて、人と人とがつながり、結びつき、様々な葛藤や矛盾、一つの理論では解決できない事柄が日々生じて実践現場の取り組みを尊重し、現場の事実に耳を傾け、学問へと昇華するために多事争論ができる日本応用心理学会という集団に加えていただいたことに、心からお礼申し上げます。

今回、私は、初めて本学会の大会に参加し、ポスター発表をさせていただき、多くの方と語りあう経験をさせていただきました。新型感染症という人類にとって未知のウイルスと向き合い、それらによって生じる分断を多彩なテクノロジーで乗り越え、つながりを形成してくださった大会準備委員の皆さま、とりわけ、大会委員長の来田先生のお力には、本当に敬服いたします。

私は、障害児学校で知的障害を伴う自閉症の子どもたちや、視覚障害と知的障害、聴覚障害など、複数の障害のある盲重複障害の子どもたちと共に、遊び、食べ、学ぶ実践に携わっています。近年、学校現場では、「新自由主義」や「資本主義」の論理がより一層浸透し、「目に見える結果」を子どもたちに強いる教育が主流となってきています。障害児教育の現場では、「税金を支払える障害者（タックスペイヤー育成）」を合言葉にした訓練的な指導が行われる傾向が強まり、子どもたちの心の動きを尊重することは軽視されがちです。

今回のポスター発表では、そうした現状へのレジスタンスの意味を込め、自閉症の子どもたちへの教育実践を通して、「自分自身の価値を発見し、

尊重する力」である自己信頼性を育むことが、子どもたちの知識・技能を豊かにし、生存権・発達権を保障した教育につながることを整理、提起しました。自分の価値は、人と人との豊かな社会的交流性により、発見、実感することができるはずです。今後も、自己信頼性の育ちを大切にした実践を丁寧につくっていきたいと思います。

塚田　直也（つかだ・なおや）／ 長野県長野市生まれ。2007年より東京都立の障害児学校の教師となる。2010年より筑波大学附属久里浜特別支援学校にて知的障害を伴う自閉症児の教育に携わり、2021年より同附属視覚特別支援学校にて盲重複障害の子どもへの教育に従事している。

第88回大会優秀発表賞
第３部門

有木　永子
（日本大学）

この度は長い歴史を持つ日本応用心理学会において栄えある優秀大会発表賞を頂き、誠にありがとうございました。身に余る光栄でございます。大会を運営してくださいました第88回大会委員長来田宣幸先生、第89回大会委員長髙石光一先生はじめ学会の先生方、そして共同研究者の伊坂裕子先生に心より御礼申し上げます。

発表当日、不安と期待が混じりながら会場に赴きましたが、ポスターを見に来てくださった方々との熱い議論は、知見が深まっていくことを肌身で感じる体験となりました。本発表では、「コロナ禍における大学生のストレス反応と思い-KH-Coderによる自由記述分析を中心に-」としてコロナ禍３年目（2022年）に在籍する大学生のメンタルヘルスの変化をストレス反応と自由記述による思いの分析から検討しました。コロナ禍２年目（2021年）にも異なる対象者に同じ調査を行っていたのですが、2022年は2021年よりストレス反応が改善しつつありました。また、自由記述では2021年に散見された大学の授業形態への思いよりも、行動制限による不自由さや友達との交流の乏しさが辛く、自分と向き合う時間が増え、コロナ収束を願う心の動きも見て取れました。ストレス反応は男性より女性が有意に高かったのは、多くの研究で明らかにされているのと同じですが、状況を致し方なく受け入れ自分が変わることを受け止めている男性はストレス反応が低く、この社会の辛さを切々と訴える女性はストレス反応が高く見られました。2023年のコロナ禍４年目は社会状況も大きく変化し、一見するとコロナ前に戻りつつあるかのように見えます。しかし、この数年の体験が自己を確立させる最中の大学生にどのような影響を与えるのかを知るのはまだ先のことです。今、目の前にいる大学生は一層、多様化している実感があります。VUCAの時代を生きる大学生の成長発達にgood enoughな関わりが持てるように、引き続き見守っていきたいと思います。

有木　永子（ありき・ながこ）／ 日本大学国際関係学部教授。大阪府大阪市出身。奈良女子大学大学院修了後、関西医科大学精神神経科学教室など臨床心理士として大学病院精神科臨床に長く従事。東洋学園大学人間科学部（講師・准教授）を経て2021年より現職。

第88回大会優秀発表賞
第４部門

異儀田　はづき
（立正大学大学院/東京女子医科大学）

この度は、ポスター発表「精神科医療における多職種連携の成果に影響を及ぼすプロセスの検討」に対し、日本応用心理学会第88回大会にて優秀大会発表賞を授与いただき、誠にありがとうございます。大会実行員会、学会関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。ポスター発表にお越しくださいました皆様にも感謝申し上げます。

私が多職種連携を研究テーマとしている原点は、大学病院の精神科病棟で勤務していた時に初めて多職種連携に取り組んだ時の衝撃でした。専門職

が知識と技術を持ち寄ることで患者さんへのケアの向上を実感し達成感を抱いたのですが、同時にそれぞれの職種の専門性のある見立てやかかわりの適切さ、職種間の役割の重複があることに衝撃を受け、看護師としてのアイデンティティを見失いかけた経験でもありました。

多職種連携は医療保健福祉のあらゆる分野で行われていますが、その実践には困難が伴い、多職種連携の成果とプロセスの関係に関する研究は限られている現状にあります。今回の調査は、精神科医療の多職種連携の成果を高めるプロセスの構造を明らかにすることに取り組みました。結果では、凝集性が高いチームほど、成果である主観的満足、成果評価の得点が高いことが示され、チームの凝集性は、適切な集団意思決定のための基本的な条件が満たされているほど高く、連携不足やコミュニケーション不足があると低くなることが明らかになりました。

ポスター発表での意見交換の場でも、実践者の皆様が苦労されながらも工夫して多職種連携に取り組まれていることを実感し、研究へのモチベーションを高めた次第です。今後も、いただいた賞を励みに、看護の枠にとどまらない視野を持ち、実践に還元できる研究を目指して取り組んでまいりたいと思います。

最後に、本研究の共同研究者として指導してくださった古屋健先生、調査にご協力くださいました皆様にお礼申し上げます。

異儀田 はづき（いぎた・はづき）／ 2010年より東京女子医科大学看護学部助教として勤務する傍ら、精神看護専門看護師として看護師のメンタルヘルス相談に携わる。現在は、立正大学大学院心理学研究科博士後期課程に在学。

第88回大会優秀発表賞
第５部門

紺野　剛史
（富士通株式会社）

この度は、応用心理学会第88回大会にて優秀大会発表賞をいただき、誠にありがとうございます。この栄誉ある賞を受賞できましたのは、私だけの力ではなく、指導して頂いた東洋大の桐生教授をはじめ、日々支えてくださった同僚の皆様のおかげと感じております。

今回の研究テーマである「特殊詐欺未然防止の検討」は、富士通が持つAI技術を活用し社会に貢献できないかを模索していた中で、桐生教授が2021年にシンポジウムで講演した「特殊詐欺の心理学」に感化し、この研究をスタートさせました。

特殊詐欺は2003年に「オレオレ詐欺」として知られ、その後も20年以上にわたり手口を巧妙に変えながら続いています。2022年の全国の特殊詐欺の認知件数は、前年比3,072件増加し、17,570件と報告され、特に65歳以上の高齢者を標的とする特殊詐欺が86.6%と大部分を占めています。この悪質な犯罪によって被害者は家族関係が悪化し、時には自殺に至ることもあり、その苦しみが深刻です。そこで、私たちは特殊詐欺被害を未然に防ぎ、高齢者が安心して老後を迎えるためにこの研究プロジェクトを始めました。

本研究では、兵庫県尼崎市在住の68～84歳の男女15名が実験に参加し、高齢者が特殊詐欺の電話を受けているときの生理反応と心理変化を測定しました。結果として、各生理指標と猜疑心などの11因子によって、特殊詐欺の通話時に生じる心理変化を予測できることを示唆する結果が得られました。

このような機械学習を活用した心理学の研究はまだまだ少ないと考えますが、一方で生成AIなどを含むAI技術は社会に実装されつつあります。今後はAI技術と心理学を融合させ、困難な社会課題に対処する時代が迫っていると感じており、

今後の研究も一層の精進を図っていく所存です。

紺野 剛史（こんの・たけし）／ 2003年に富士通株式会社に入社。2010年から株式会社富士通研究所に勤務。デジタル技術と人文社会科学を融合したコンバージングテクノロジーの研究に従事。JEITAセンシング技術専門委員会監事。

第88回大会優秀発表賞
第６部門

森泉　慎吾
（帝塚山大学）

この度は、第88回大会のポスター発表（【第６部門】産業・交通・災害）にて優秀大会発表賞を頂き、誠にありがとうございます。会場でポスターにお立ち寄り頂きました先生方、またご審査・投票をして下さった先生方には厚く御礼申し上げます。大変栄誉ある賞を頂戴し、発表者一同、大変嬉しく思っております。

私どもの発表題目は「ネット炎上に関連する心理的要因があおり運転に及ぼす影響」でした。あおり運転は、2020年には「妨害運転罪」として厳罰化するなど、現代の交通社会において重要な問題の一つとしてマスコミ等で扱われておりますが、研究の歴史は実は古いです。交通社会は匿名性の高い環境であることから、インターネット上での行動と関係が指摘されることもありますが、実証的な研究は不足していたため、今回の研究では、特にネット炎上に関する態度とあおり運転に関連する交通行動との関係を検討しました。結果として、今回扱った「青信号にもかかわらず発進しない先行車がいる場面」においては、インターネット上での自らの「荒らし」の傾向ではなく、炎上を容認する態度と先行車へのクラクション反応が関連しました。

今回の研究は、私が現在の本務校に着任して、ゼミナールで最初に担当した学生の卒業研究の一環として行ったものです。コロナ禍で接触が制限される中、100人定員の広い教室内で２人だけで議論をして内容を詰めたことを思い出します。残念ながら（?）、彼は進学せず卒業してしまいましたが、そのような思い出が詰まった研究ですので、今回の受賞は一層の嬉しさがあります。

今回の受賞研究については、当日の発表時に頂戴したコメントや議論を踏まえつつ、現在論文投稿の準備を進めています。今回の受賞を励みに、一層研究活動に邁進して参ります。この度は誠にありがとうございました。

追伸：2024年度大会は、私の本務校の帝塚山大学にて開催されます（大会委員長：谷口淳一先生）。会員の皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げております。

森泉 慎吾（もりいずみ・しんご）／ 大阪大学大学院人間科学研究科 助教などを経て、現在は帝塚山大学心理学部准教授。博士（人間科学）。2009年より日本応用心理学会員。2021年より広報委員会副委員長。2024年度開催予定の第90回大会（帝塚山大学）では大会事務局長を担当。専門は産業・交通心理学。

第88回大会優秀発表賞
第７部門

種ケ嶋 尚志
（日本大学）

この度は、応用心理学会第88回大会にて優秀大会発表賞を頂き、誠にありがとうございます。

今回発表致しました**「競争心と心理的スキルとの関連に関する研究」**では、アスリートの競技に必要な心理的スキルに着目し、競技力向上に繋がる競争心と心理的スキルの関連についての基礎的検討を目的とし、さらに得られた結果から競技環境をやり抜くために必要な「競技に打ち込む環境」「アスリート・ウェルビーイングの促進」といった安定的な競技環境を整えることに繋げるための「競争心」について基礎的な考察を加えました。

この研究を行うきっかけは、普段の生活（例えば学校生活や仕事）では、競争心を持って日常を送ることでストレス過多となり、それらを乗り越

えるためにはストレスマネジメントが必要であると訴えられてきておりますが、果たして競争心を持って普段の生活を適応的に過ごすことはできないのであろうか？と思ったことからでした。

普段から競争環境に身を投じているアスリートの心性を理解できるならば、アスリート以外の方々においても、適応的な競争心の醸成や形成に寄与すると考えました。先行研究レビューではアスリートの競技環境において、どのような心理的スキル（心理的競技能力）が競争心と関係しているのか、明らかにしている研究はほとんど見られません。

本研究の結果から、本番で実力発揮していくための競争心は、「手段型競争心」を強く意識することが重要であることが示唆されました。

「手段型競争心」とは、何か別の目標（例えば自分の成績を伸ばす、自分自身に目標を設定する等）が存在し、その目標を達成する手段として競争を行おうとする意識のことです。今後は、今回明らかとなった「手段型競争心」を醸成するために必要な心理教育やコーチング、さらには環境整備をどのように構築していくかを、縦断的に研究を進めていくことを検討しております。

最後になりますが、研究にご協力いただきました対象者の皆様、ご意見をお寄せ頂きました皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

種ケ嶋 尚志（たねがしま・ひさし）／ 長崎県出身。2007年、聖徳大学臨床心理学研究科より博士（心理学）授与。大東文化大学スポーツ・健康科学部特任講師を経て、現在日本大学スポーツ科学部教授。専門はスポーツ心理学と臨床心理学。

公開シンポジウム「ネガティブな感情・心理の活用と応用」参加記

谷田　林士
（大正大学・広報委員会委員）

2023年12月17日（日）に開催された、本学会公開シンポジウム「ネガティブな感情・心理の活用と応用」に参加させていただきました。東京の茗荷谷にある筑波大学の東京キャンパス文京校舎134講義室での開催でした。東京キャンパスは放送大学の学習センターと共用校舎であるため、シンポジウム当日には、面接授業のために来校した学生が、公開シンポジウムの大型ポスターの前に立ち止まり、興味深く話題提供のタイトルを見入る姿が散見されました。私たちの日常においてはできる限り抑制を試みるネガティブな感情に対して、前向きに活用しようと訴えるようなシンポジウムのタイトルは、インパクトが大きく、人を惹きつけるものであったと感じています。

司会の小嶋理江先生（名古屋大学）の進行でシンポジウムが始まりました。話題提供に先立ち、本学会理事長の古屋健先生（立正大学）が開会の辞を述べられました。その中で、一般的な挨拶に留まらず、感情・情動研究についての歴史を紹介し、現代心理学における感情理論の課題などの概観を簡潔に説明してくださいました。公開シンポジウムでは聴衆が研究者に限定されることはありません。応用心理学に関心のある市民に対して、今回のシンポジウムから学んだ知識を日々の実践に活用するための学術的な土台を提供するような挨拶に感銘を受けました。

４名の先生から話題提供がありました。誌面の制限もありますので、上市秀雄先生（筑波大学）、永岑光江先生（東京工業大学）、讃井知先生（上智大学）、藤井陽一郎先生（明治大学）の話題提供および楠見孝先生（京都大学）の指定討論の詳細は割愛させていただきます。「応用心理学研究」に掲載される記事をご覧いただければと思います。

本シンポジウムでは、話題提供されましたネガティブ感情のみならず、そのアプローチ法も多様性に富んでいました。後悔を対象としている上市先生は実験的アプローチを重視され、藤井先生は数理モデルを用いて他属性後悔の実証を行っています。家族間で生じるネガティブ感情の讃井先生やネガティブなストレスへのレジリエンスを研究対象とする永岑先生は、調査法的なアプローチに基づいた緻密なデータ分析に特徴がありました。

公開シンポジウムを通じて、多様なネガティブな感情のメカニズムについて知見を深めていくことができましたが、それらを実践での応用に繋げていくためにはどうすべきか（拙稿を読み返して生じている今の私のネガティブ感情を応用できるのか）という点については、今後の自身の課題として捉えるようになりました。一般の参加者にとっても、ネガティブな感情の応用可能性について日常の中で考察を促進するような刺激的な公開シンポジウムだったと思います。

フロアからの質疑に応答する話題提供者

谷田　林士（たにだ・しげひと）／ 1974年、大阪府生まれ。大正大学人間学部 教授。2019年より日本応用心理学会員。専門は社会心理学。

特別企画 2

心理学部・学科以外で心理学を教える：異なる領域での挑戦

本記事では、心理学と異なる学問領域にて、心理学教育にたずさわる教員にインタビューし、異分野での心理学教育を行うことの難しさや面白さを考えてみたいと思います。とはいえ、担当の私（古谷）自身もそうであるため、別途インタビュアーを設け、それに応える形にしました。

記事担当：古谷嘉一郎（関西大学・広報委員会委員）
インタビュアー：山本あかね（ナカニシヤ出版）
インタビュイー教員：村山綾（近畿大学）、古谷嘉一郎（関西大学）

山本：それではよろしくお願いいたします。

村山・古谷：よろしくお願いいたします。

山本：今回は、「『心理学とは異なる学部での心理学教育』について、いろいろとお話を引き出してほしい」と古谷先生からご依頼をいただきました。とはいえ、私もこういったことは初めてで困っていたところ、古谷先生から「村山先生と僕がインタビュイーでやってみましょう」とご意見いただきました。

古谷：そうですね、僕としては、とりあえず話をしやすい人や、事前に背景を共有している、つまり、現実に苦労している方にインタビューをしていただいて、そのインタビュー内容を見てみたいと思ったんです。絶対多かれ少なかれ苦労してますしね。また、研究の面で考えると、応用心理学は他分野との融合的な研究テーマも多いです。また、心理学部や学科とは別の学部学科に我々教員が所属する場合、そこでの教育には応用的なものが求められると思います。もちろん、いわゆるきっちりした「心理学」という枠組みも大切だと思います。ただ、やはり「心理学」っていうメインフィールドから違うところに飛び込んだことでものすごく苦労はしましたね。

村山：国際学部で講義をしていますと、いわゆる教科書的な「心理学」だけでは、学生の興味関心をうまく得られないですね。ですから、（日本国内外の国の）文化差と心理学といったようなテーマになるとすごく興味を持ってくれます。また、「コミュニケーション」という言葉を考える際、国際学部の学生の多くは「外国語でのコミュニケーション」に関心があります。私の研究に密接な「コミュニケーションの測定」については、違和感を覚えるようです。こんな風に、「コミュニケーション」という言葉一つとっても、出てくる枠組みが全然違います。その前提を理解して講義をしないと、学生にとってつらい授業になっちゃいますよね。

山本：学生にとってつらい授業とは？

村山：「国際学部」の学生である以上、語学や、異文化コミュニケーションといったものを学びたいわけです。でも、卒業要件を満たすために、特定の領域に属している、一見すると語学や異文化コミュニケーションとは関係なさそうな科目を履修して単位を修得しないといけない。これはつらいですよね。

古谷：うん、僕が学生の時も苦痛でした。学部生時代をすごした広島大学総合科学部は、学際的学部だったので、環境なんたら論とか、言語なんたら論とかあって、カリキュラム上履修して単位を取得しないといけなかったですものね。興味がちがうこともあり、ちょっとつらかったです（苦笑）。

村山：ですから、国際学部に所属する学生に対しては、「心理学」や「コミュニケーション」に関わる科目に、関心を持ってもらえるような内容を含めて構成を考える必要があります。

山本：なるほど、潜在的なニーズに応えるといった感じですね。

村山：そうです、そうです。もちろん、心理学という軸から外れてはいけませんから、その軸を外さずにやるっていうのが難しいのですけれど。

古谷：まあ例えば、例示とかで、その学部の学生さんに合わせた内容を出していくとか。昔、非常勤の時に、看護大や看護学校で心理学系の講義をやっていたときは、看護コミュニケーションのテキストを読み込んで、具体例を作っていました。

山本：とても手間がかかりそうですね。

古谷：もちろん時間もお金もかかるのですけど（笑）、その本人たちの信念の軸の部分に訴える例示だと、内容も理解できた気になるそうですし、記憶にも残るみたいです。また、経営学部での講義ですと、「会社での仕事場面」や「マーケティング」なんてものと結びつけてやっていました。レスポンデント条件づけとCMの結びつけとか。人気あるタレントと、新製品を対提示することで、その商品に好感度を持たせるという話をすると、そりゃ食いつきます。もちろん、そんな簡単なものではないですが。

村山：日本と北米の文化間比較についても私自身が実際に研究対象としているので、こういったテーマについて学生に話すとすごく興味を示してくれます。東アジアと北米では信念体系が違うといった話をすると、留学に行った学生たちから、「なんとなく感じていたことが分かった」といったコメントをもらえたりしますね。

山本：お二方とも、本当に苦労なされているのがわかります。

古谷：そうそう、僕は今の職場で２年生対象に「行動科学研究法」という講義をしています。そこで、村山さんと山本さんをはじめとする方々に協力してもらって書いた「やってみよう！実証研究入門」[1]が大活躍しています。研究倫理、アカデミックライティング、心理統計の基礎、研究法の簡単な説明に加え、具体的な研究法と分析の事例を入れているので、心理学部以外の学生、特に初学者にはとっつきやすいみたいです。もちろん、今の職場も、心理学研究法という科目はないため、この科目が「研究法」としてのとっかかりなんですよね。また、１年次から統計学は開講されていますが、いまいち、具体的な計算等の経験が浅いためかぼんやりとした感じのようです。そういう意味では、統計学を履修したうえで、行動科学研究法にて統計学で学んだことの活用…とはいっても本当にさわりですが、をすることで、多少は理解できるみたいです。なお、上位学年も受けています。実際に研究を進めている学生からすると、もっと早く知りたかったといわれました。

村山：私の科目でもとても役に立っています。特に、心理学的な研究の仕方を知らない学生に指導する際、とりあえず１冊でまとまっているっていうのは大きいんですよね。複数のテキストを指定すると、結構な金額になって申し訳なく思いますし…。

古谷：わかります。思っていた以上に、学生さんテキストのお金払ってますもんね。

山本：ご宣伝ありがとうございます！　でも、私自身も、学生時代にこのようなテキストがあればよかったのに、と心から思っています。講義だ

けでももりだくさんになってきましたね。ゼミ指導についてはいかがでしょうか。

古谷：すいません、結構長く話してしまいましたね。ではゼミですが、やっぱり、心理学の研究の仕方がわかっていない。当然ですけどね。

村山：そうですよね。問いの立て方なんかも、カリキュラムとしてしっかり学ぶ機会がないので、３、４年生のゼミをしていて難しく思っています。問いの立て方がいわゆる心理学的でない、うーん、例えば、単に○○を調べたいといったように、現象の記述だけで終わってしまう感じなんですね。調査をする、ということで計画をはじめても、アンケートをとって、円グラフを書いて、その結果を簡単に説明して終わる、というようなものがどうしてもイメージされてしまいます。

古谷：アンケートからの円グラフ！いわゆる記述統計で終わる感じですか…。まあでもそれはわかる気がする。なんとなく、アンケートっていう言葉で出てくるものは集計、記述統計。そこから推測統計に行くためには、事前の知識が必要ですものね。

村山：そうなんですよ。でも残念なことに、今の学部のカリキュラムにそういったものは入っていないという。

古谷：僕が経営学部に在籍していたときは、経営統計学という講義があったんですが、どうもいわゆる社会調査的なもの、つまり心理尺度等を使わない調査データをもとにした記述統計といったレベルまでででした。

村山：記述統計だけでも、もちろんさまざまなことがわかりますが、研究計画を立てて実施するという感じじゃないんですよね。あと、これも仕方がないのですが、独立変数と従属変数のような、実験的な研究計画はそもそもイメージすることすら難しいという状況です。推測統計レベルまでの論文も読みますし、３年の前期で推測統計について少しは触れるのですが、なかなか読んだことや学んだことを自分たちで実際にやってみる、というのは難しいです。

山本：でも、調査をして、記述統計をして、推測統計までいくということをお二人とも考えてゼミ指導をされているんですね。

二人：もちろんです。

村山：そこまでいってほしいというか、やっぱりそこまでやることの醍醐味というか。難しいのはわかりますし、心理学を主としてやっていないならなおさらですよね。なので、やってみたい、という学生はサポートします。卒論でデータを取るタイプの研究を希望する学生は少なめですが…。

古谷：僕は記述統計だけで…と何度も思いました。例えば、HAD[ii]で分析を教えている途中で、記述統計だけでいいじゃないか…って何度思ったか。

山本：そこまで情熱的であれば、学生さんもお二人のゼミを希望してくれそうですね！

二人：いいえ、いいえ。

古谷：ゼミ募集をかけるときに、素直にこんなことをしますと心理学の研究の流れを説明したら、ものの見事に希望者が来なくなってしまいました。本当に少数になってしまって、ちょっと気まずかったです。特に、第１希望、第２希望をおちて、第３希望…第３希望で残されたゼミで、消去法で僕のところに来たっていう学生が結構います。前の職場はゼミも選択科目だったので入らなくてもいいんですが、ゼミに入っていれば就職活動に有利だと思って来るんですよね。そして、ゼミに入って、こんなんじゃなかった！といわれることは多数ありました。卒論も選択だったので、希望する学生だけに書いてもらいました。ただ、選択であるために、卒論を書きたいという思いが強い学生はやっぱりきちんと頑張ってくれましたね。

村山：私のゼミも、第１希望のゼミを落ちて不本意ながら…って学生が半分くらいいます。ただ、私の場合、心理にかかわる別の学部を受験して、国際学部と両方合格した結果、国際学部を選んできた学生が、「あ、心理学がある！」という感じで見つけてくれたりします。そういった学生は熱心ですね。決して多いわけではないのですが、データを取って卒論を書くことを希望してくれたら、しっかりとサポートしたいところです。

古谷：お互い大変ですね。

村山：ほんとに大変、とはいえ、こういった思いを持っている先生方ってたぶん多いですよね。

山本：そうですよね。『やってみよう！ 実証研究入門』の執筆者の学部をみると、心理学部だけではありませんから、おそらく、潜在的にそういった思いを持っている先生方は多いと思います。

古谷：それだけ、心理学がいろんな分野に入り込んでいる…言い方が悪いですね（笑）。いろんな分野に必要とされているってことなのかなって思います。そういう意味では、心理学以外のいろんな分野の学生の方に見てもらえる心理学の本とかも書くのって大事だと思うんです。例えば、村山さんの「『心のクセ』に気づくには」[iii]。

村山：ありがとうございます（笑）。

山本：村山先生、あの本、いいですよね。今までになかった感じです。

村山：山本さん、ありがとうございます。あの本は私がこれまで抱いていたいろんな思いと、みんなに伝えたいって思ったことを書いたものなんです。

古谷：学生にも読んでもらいましたが、先生の話より分かりやすかったと言われました。

村山・山本：苦笑。

山本：さて、時間が来てしまいましたね。本日はたくさんのお話をありがとうございました！

[i] 古谷　嘉一郎・村山　綾（編）（2022）．やってみよう！　実証研究入門――心理・行動データの収集・分析・レポート作成を楽しもう　ナカニシヤ出版

[ii] 清水裕士先生（関西学院大学）が開発したExcelベースの統計解析ソフト

[iii] 村山 綾（2023）．「心のクセ」に気づくには――社会心理学から考える 筑摩書房

やってみよう！ 実証研究入門

「心のクセ」に気づくには

古谷　嘉一郎（ふるたに・かいちろう）／ 2007年、広島大学大学院生物圏科学研究科修了、博士（学術）。現在、関西大学総合情報学部教授。専門は社会心理学、臨床社会心理学。最近の研究テーマは、子育て中の養育者のバーンアウトを引き起こす要因の解明。

村山　綾（むらやま・あや）／ 近畿大学国際学部　准教授。州立モンタナ大学心理学部卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科　博士前・後期課程修了。博士（人間科学）。関西学院大学応用心理科学研究センター博士研究員、日本学術振興会特別研究員を経て、現職。専門は社会心理学。

山本　あかね（やまもと・あかね）／ ナカニシヤ出版編集部。1981年生まれ。東京都出身。2004年京都大学総合人間学部卒業。杉万俊夫教授のもとでグループ・ダイナミックスを学ぶ。2004年ナカニシヤ出版入社以来、心理学書籍の編集を中心に担当。

特別企画 3

理論と応用を両立する研究者へのインタビュー

谷田林士（大正大学・広報委員会委員）

この特別企画では、日本応用心理学会広報委員として、新進気鋭の若手研究者である立教大学現代心理学部助教の前田楓先生を紹介いたします。私は、人間の協力性に関わる理論研究を前田先生と共同で実施していますので、前田先生については生理指標を用いた実験などの実施や分析をバリバリ行う研究者というイメージを抱いているのですが、実はもう一つの別の顔があるようです。2021年度応用心理学会　学会賞奨励賞を受賞された研究に代表されるように、前田先生は既に３本の論文を応用心理学研究誌に掲載しています。今回の企画では、どのようにして応用研究と理論研究を両立させ様々なトピックに関連する研究活動を遂行されているのかを尋ねてみたいと思います。

前田楓先生（立教大学現代心理学部）

Q：現在取り組んでいる応用研究は？

私が現在携わっている研究の一つに、「子ども隙間転落防止プロジェクト」があります。鉄道を利用する際に、列車とホームの隙間が危ないと感じる方も多いのではないのでしょうか？実は、隙間に転落してしまうお子様の割合が高いという事実が近年懸念事項となり、JR西日本や大阪市立デザイン教育研究所の方々がはじめたのがこのプロジェクトです。私自身は、分析班メンバーとして参画しています。

囚人のジレンマゲームを用いて人間の協力性を検討する理論研究の展開とはまったく異なる研究アプローチに戸惑うことは多々あります。例えば、天王寺駅で実施した啓発イベントの際には、JRを利用される方々の「声」を直接集め、それを今後のプロジェクトに反映させるという経験をしました。現在でも、プロジェクトが利用者からどう評価されているのかを定量的に把握し、調査データとプロジェクトの活動の「行ったり来たり」の過程に“巻き込まれて”いるのが現状です。分析結果から考えられることについてJR西日本や大阪市立デザイン教育研究所の方々と共有し、今後の啓発のあり方を一緒に考えることはもちろん貴重な経験ですが、今の心理学領域の標準的なアプローチとはかなり異なるものなので、サンプリングの手法はこれでいいのか、結論ありきの結果の解釈になっていないかなどを自問自答しながら、手探りで応用研究に携わっています。

Q：応用研究と理論研究を両立して行うようになったきっかけは？

私自身はもともと防災教育に関心があり、人々の「逃げ遅れ」を防ぐ手立てを考えるための研究を行ってきました。私たちは、防災・減災の重要性を頭（理性）では理解しつつも、自分自身が被災する可能性を低く見積もってしまう傾向があります。それは、たとえ災害の危険性を十分に認識していたとしても同様です。こうした災害場面における人間の心理バイアスを前提としつつ、そうしたバイアスとどのように折り合いをつけ、災害場面における避難行動を促すかが私の研究の問い

であり、その一つの答えを見つけるべく現在も研究を行っています。振り返ると、防災・減災に関する研究を始めた大学院生の時から、研究知見を実際の防災教育につなげたいという思いがあり、その思いが今も応用研究に携わっている理由の一つだと感じます。防災・減災に関する研究と先ほど紹介した子ども隙間転落防止プロジェクトは、一見すると何の関わりもないように思えるかもしれませんが、私の中では、いかにして人々の信念の「共有性」を生み出せるかという点において二つの研究は共通していると考えています。

防災・減災に関する研究では、逃げ遅れを防ぐための情報が「共有された情報」になることではじめて、人々の主体的な避難行動が促される可能性があると私は考えています。防災・減災に関する情報を単に広く周知するだけではなく、その情報を家族の間で共有してもらう。そうした共有性こそが、いざというときの「逃げ遅れ」を防ぐことにつながるのではないかと考え、その可能性をウェブ実験を通して検討しています。お子様の隙間転落を防ぐ場合も同様です。列車とホームの隙間が危険であるという情報をどうすれば保護者とお子様の間で話し合ってもらえるか。ここでも危険性の共有が鍵を握ります。子ども隙間転落防止プロジェクトでは、隙間転落防止とは無縁と思えるような「スキマモリ」というキャラクターが存在します。このキャラクターを用いた啓発には、隙間転落の危険性について親子間で話し合ってもらい危険性を共有する機会を増やすという狙いがあります。実際にこうした機会の増加は調査データにも明確に示されていて、お子様がスキマモリというキャラクターの存在を保護者の方に伝え、それをきっかけに隙間転落の危険性を保護者がお子様に伝え、お子様だけでなく保護者の方の隙間転落への意識も向上するというプロセスが見て取れます。隙間転落の危険性をもっと強調して伝えることが重要だという声ももちろんありますが、心理学の知見を踏まえれば、危険性ばかりを伝えることにも一長一短があるわけです。そこで現在では、恐怖をあまり喚起させようとはせず、隙間転落の危険性に関する事実や、転落しないための手立てをキャラクターを通じて伝えていく。こうしたアプローチには手ごたえを感じ始めているところです。

Q：複数の研究に携わる魅力は？

実は、私自身は理論研究と応用研究というように二項対立的に捉え、その両立を目指すことを意識しているわけではありません。理論研究では、人間の協力性に関する問いに焦点を合わせて実験をデザインし、仮説検証を行っています。例えば、二重過程理論の観点から、人間は直観的に協力するのか、そうした協力行動は集団の枠を超えるか等の問いについて、囚人のジレンマゲームを用いた実験室実験の知見を蓄積しています。さらに、私は人間の協力行動に関わる意思決定過程にも関心があり、囚人のジレンマゲームの利得行列に対する実験参加者の視線や注視率のデータなども分析します。しかし、そうした理論研究への取り組みが、応用研究への展開に自然とつながってくるように思います。イソップ童話の『北風と太陽』のように、人々の意識や行動を促したり動かしたりする際には、まず内側（心）に働きかけるか、それとも外側（環境）に働きかけるかという視点が考えられます。さらに、二重過程理論を用いた研究に示されるように、人間の意思決定は「直観」と「熟慮」のどちらに基づくものかという視点も有益です。これらの多様な視点から、応用研究の「次の手」を考え出せるように思います。今回紹介した子ども隙間転落防止プロジェクトにおける次の手も今まさに考え続けているところですので、また学会等の場で、さまざまなご意見をいただきたいと考えています。

前田　楓（まえだ・かえで）／ 立教大学現代心理学部心理学科助教。社会心理学の視点から、学校教育の現場が抱える諸課題をどのように解決していくかという問いについて考察している。現在は、二重過程理論の観点から人間の協力行動を理解するための研究に尽力している。

谷田　林士（たにだ・しげひと）／ 1974年、大阪府生まれ。大正大学人間学部　教授。2019年より日本応用心理学会員。専門は社会心理学。

Recommended
群馬大学
柿本　敏克

隣の先生に学ぶ心理学ベースの授業づくり

佐藤　浩一 著

2022年10月7日発行
あいり出版
2,000円（税別）

まず「隣の先生に学ぶ」「心理学ベースの授業づくり」というユニークな書名のフレーズに驚かされる。中身はというと、勤務する群馬大学教職大学院の院生指導のため、著者（佐藤浩一氏）が訪問した小中学校の先生方の授業実践について、「心理学的な観点から考察を加えた」というもの。全体で９章に分かれるが、第７章までと、それ以降で性質が異なる。第７章までは授業実践の内容やそれに対する考察がテーマごとにまとめられたもの。一転、第８章は氏らが開発した群馬大学における「実践研究」なる独自領域の研究法の解説。第９章は関連する心理学用語の解説である。全体に学校現場の先生方向けに、概ね温かく（時にやんわり批判的に）伝えたいことを書かれたことが推察される。

意図されてないはずだが、「教職大学院教員の日常ルポ」のように読むこともできる。氏は本書を「最近数年間に参観した小中学校の記録」に基づいて執筆されたそうなので、本書を読むことで、氏がどれだけ頻繁に学校訪問をされているのかや、その訪問時にどのような活動をされているのかをある程度知ることができる。氏の教職大学院シリーズの３作目。１トピックが１頁に収まるように書かれており、どこからでも気軽に読める。

以下、内容を順に紹介しつつ感想を述べる。

第１章は「言葉が育つ」という題目をもつ。まず感じられたのは、認知心理学者（特に記憶研究者）として知られる氏が、国語の語彙や作文教育に強い思い入れをお持ちであるという新鮮な驚きである。本書を読むまで、氏に対しては純粋な学究としての印象しかなかったが、国語教育についての深い理解と関心をお持ちであったことを評者（柿本）は今更ながら発見した。

第２章は「考えて、つなぐ」という題目。科目を超えたつながり、単元を超えたつながりというように、個別の知識・スキルが他の領域に活用される事例がいくつも紹介される。そうした高次の学びのワクワク感は、研究者が自らの研究を発展させる際にしばしば経験するものだと思う。本書で紹介されるように、そうした経験を教え子に、子どものうちから与えることができるなら、教育者・指導者として幸せだろうなと想像した。

第３章の題目は「ともに学ぶ」。「対話的に学ぶ」をキーワードにして、協働学習について考察がされる。様々な技法が紹介されるが、特に協働するための「型を使うこと」「型にはめること」に関する考察が興味深い。第１章の作文教育の箇所でも似た視点が示されるので、「型」が氏にとって重要なキーワードであることが分かる。スキーマ、スクリプトなどの用語との関連が窺われる。

第４章「学び方を学ぶ」は、認知心理学者としての氏の本領発揮。「効果的な学習方法」「振り返り」についての解説や事例紹介の後、ある中学校での「学習方法講座」の実践例が、認知心理学の用語や知見を使いながら熱く語られる。記憶法、ワーキングメモリ、（明示されていないものの「マジックナンバー７」）などがベースになっていて、力の入りようがよく分かる。

第５章の題目は「伝える、示す、問いかける」。第４章が主に学習者目線のものであるのに対して、こちらは指導者の視点から教授法の工夫が述べられる。特に、授業の中で先生方が使いがちな「おさえる」「とらえる」などが特殊な業界用語であるという指摘と、それらが「もう少し平易な言葉にできないもの‥‥か」という提案には評者も共

感した。指導者が示してみせることの大切さを扱う部分で（5-2節）、冒頭に、山本五十六の言葉として伝わる「やってみせ、言って聞かせて、させてみて‥‥」という名言が引用されているのが印象的である。

第6章は「道具を生かす」。鉛筆、ノート、黒板、ホワイトボード、教科書、図表など、教室で使われる様々なモノの使い方について考察がされる。ノートやワークシートの使い方、作り方といった実践的な内容とともに、「扱いやすい道具はワーキングメモリを思考に集中させるための名脇役」「メインの活動にワーキングメモリを十分割り当てて、他の負担を減らすことが大切‥‥。そうした観点からどういう道具が最適か」という認知心理学者らしい道具観が示される。中には教職大学院の院生向けに、指導教員としての氏を、遠慮せず「道具として‥‥使って下さい」と語りかける箇所があり、実際にそうして「使われた」例がいくつか示される。なるほど案外楽しそうだな‥‥

第7章は「励ます、見取る、評価する」。ここまでと印象の異なるこの章では、児童生徒の学ぶ意欲を高める工夫について書かれている。これらは心理学用語の「モチベーション」「動機づけ」にあたるとの説明が最初にあるが、そんなことはさておいて、（学校教育における）学習者のやる気の高め方が熱く語られている。特に「評価」の意味について強い思いが伝わってきた。

第8章「研究する」では、最初に述べた通り、群馬大学における学校現場での「実践研究」なる独自領域の理念、方法、事例が語られる。教職大学院の院生向け「研究法ガイダンス」としても読める。この領域の研究が、独特の難しさと作法をもつらしいことを学ばせてもらった。「実践（アウトプット）」「目指す姿（アウトカム）」「検証（評価）」などの用語には、独自の意味が与えられている。これらの用語に示される研究法上の概念化は、氏らが教職大学院の「内実」を苦労して作り上げてこられたことの成果であると感じられた。

前述のとおり、第9章は関連する心理学用語の解説であるが、無味乾燥な「用語集」ではない。本書の趣旨に合わせて、読者（と想定されている小中学校の先生方）が実践の場に引きつけて理解できるように、ほぼ全ての項目で教育実践の場を念頭に置いた事例が使われている。

各章の最後には、その内容を振り返る工夫として、「リフレクション」という節が設けられ、複数の「問いかけ」が収められている。それぞれ「内省支援」のための「視点」とのこと。性質の違う最後の2章を除き、第7章まではそれらの「問いかけ」が次のような4つの見出しで括られる。「子どもたちを振り返る」「指導を振り返る」「自分を振り返る」「この章を振り返る」

それぞれの「問いかけ」は、読者（と想定されている先生方）に、各章の内容に即して「児童・生徒」「教室での指導者としての読者自身」「教育者としての読者自身」それぞれの現状について、思いを巡らしてもらうことを期待してのことと推察される。特に、最後の「この章を振り返る」の見出しの下には、すべての章で、次の同じ「問いかけ」が置かれている。「隣の先生たちの実践で、自分でも真似してみたい、実践してみたいと思ったものがありましたか。どうしてその実践に心惹かれたのでしょうか。」

これこそが、冒頭で述べたユニークな題名と通底する、本書の本質を表す一言であると理解した。

なお、経営学の事例が各所で使われている。小中学校の（若手・ベテランの）先生方に、学級経営・学校経営という視点が重要であることと、経営学に取り入れられた心理学の理論や概念が授業実践の場にも役立つことを踏まえてのことと拝察される。

柿本　敏克（かきもと・としかつ）／社会心理学、グループ・ダイナミックスを専攻。山形県立米沢女子短期大学講師・助教授、群馬大学助教授（・准教授）を経て現職（群馬大学学術研究院教授）。博士（人間科学）（1997年3月 大阪大学）、Doctor of Philosophy Psychology（1994年11月University of Kent at Canterbury）。集団間関係、コミュニケーションに関する研究を中心としつつ、特に仮想世界ゲーム電子版を用いた研究発展を継続中。最近は「持続可能な開発」の理念に着目している。

雑学心理学

リーダーは幸せなのか？

森下　雄輔
（大阪国際大学）

過去の多種多様に存在するリーダーシップ研究によって、リーダーに望ましい特性、あるいは行動などが検討されています。それらを概観していると、「リーダー」という存在には非常に多くのことが求められているように感じます。また、リーダーはリーダーシップ幻想（Meindl, 1990）と呼ばれるような、集団の結果に対してリーダーに原因帰属がされやすいという過剰な評価傾向にさらされています。そのため、リーダーは高い責任、多くの仕事、強い時間的なプレッシャーなど、ストレスとなりうるものを多く抱えています。この点からリーダーは非リーダーと比べて、より不幸になる可能性があります。

一方で、リーダーの方が非リーダーよりも幸せになるという考え方も多く存在します。例えば、リーダーは一般的に非リーダーに比べて収入が高くなります。また、責任と表裏一体ではありますが、高い地位、権力、支配力などを獲得し、それらの恩恵を受けることも少なくありません。また、リーダーの方が非リーダーより主観的幸福感が高い傾向があることも複数の研究で示されています（e.g., Jurkiewicz & Massey, 1997；Li et al., 2018）。

Asselmann & Specht（2023）は、ドイツの社会経済パネル調査のデータを利用して、組織におけるリーダーと非リーダーの幸福度の違い、およびリーダーになる前後の幸福度の変化を検討しました。つまり、リーダーは本当に幸せになっているのかが確認されました。その結果、リーダーは非リーダーと比較して、リーダー職に就く前後の数年間で、自分の人生に満足し、より主観的に幸福であり、悲しみも少なくなっていることが明らかになりました。また、リーダーは、リーダーになる前の５年間とリーダーになった後の５年間で、自分の人生に対する満足度がわずかに高くなっていました。

この結果をみるとリーダーは非リーダーよりも幸せになれるといってもよいかもしれません。しかし、Asselmann & Specht（2023）は、この結果の背景には選択効果が働いているとしています。つまり、リーダーは非リーダーに比べて、リーダーになる前から幸せであり、幸せな人がリーダーとして選ばれていたということです。また、リーダーになった後に「怒り」の感情を経験しやすいということも同時に明らかにされました。

これらから「リーダーになったから幸せになった」とは言えないものの、「リーダーが非リーダーよりも幸せ」というのは様々な研究において認められています。また、Asselmann & Specht（2023）の結果からも「リーダーになったら不幸になった」ということは示されませんでした。しかし、怒りやストレスが増す分、部分的にはリーダーになることで幸福感が下がる可能性があるため、怒りを低減する職務サポートを行うなどリーダーが不幸にならない取り組みが必要です。そして、リーダーの幸福感は他の従業員の幸福感やパフォーマンスにとって重要であり（e.g., Arnold, 2017；Byrne et al., 2014）、リーダーの幸せは皆の幸せになるでしょう。

引用文献

Asselmann. E. & Specht. J. (2023). Climbing the career ladder does not make you happy: Well-being changes in the years before and after becoming a leader. *Journal of happiness study, 24*, 1037–1058.

森下　雄輔（もりした・ゆうすけ）／ 2017年、帝塚山大学大学院心理科学研究科修了、博士（心理学）。現在、大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科講師。研究テーマは「フォロワーが行うリーダー評価が集団適応に与える影響」。

[特別企画]

応用心理士を対象とする調査報告注)

田中堅一郎（日本大学）・稲葉　隆（株式会社日本カラーデザイン研究所）・
小林　敦子（川越市男女共同参画審議会）

1．本調査について

日本応用心理学会学会活性･研究支援委員会では、応用心理士の資格を持つ本学会会員を対象に、応用心理士の上級資格設置を検討する上で、現状の応用心理士会員の意見を聴取することを目的に調査を行いました。そのために、３名の当委員から構成される「応用心理士を対象とする調査小委員会（以下、小委員会）」を立ち上げました。小委員会では、2023年11月３日に会合を開き、調査結果の概要について討議を行いました。今回は紙面の都合で調査結果の一部を報告します。

2．調査方法

調査期間　2023年９月４日から10月２日まで（オンライン調査は９月20日まで）。

対 象 者　2023年９月１日において応用心理士の資格をもつ日本応用心理学会員223名を対象としました。①オンライン調査では、メール配信できた182名のうち66名（回収率：36.3%）。郵送調査では、②調査用紙を送付した41名のうち26名（回収率：63.4%）から回答を得ました。よって、調査依頼した計223名のうち92名から回答を得られました（回収率：41.3%）。

調査方法　メールアドレスが登録された会員にはGoogle　Formsで調査主旨を説明した文面と質問項目を2023年９月４日に送信しました。メールアドレスが登録されていなかった会員には調査用紙を2023年９月４日に郵送しました。なお、メールアドレスを有していたもののGoogle　Formsから回答ができない旨連絡があった１名を郵送調査に振り替えています。

3．調査結果

3.1　調査回答者の属性

回答者は30代から90代まで分布し、60代が最多（27.2%）で、男女比は64.1%:35.9%でした。また、研究者；40名（43.5%）、実務家；36名（39.1%）、その他（大学院生含む）；14名（15.2%）となりました。

3.2　調査項目別回答結果

3.2.1　Q1「あなたが応用心理士を申請した動機は何ですか」　申請した動機として最も多いのは「資格取得のため」で全体の５割弱（46.7%）でした。次いで、「学会員から勧められたため」が約２割（20.7%）で、「研究活動における目標設定」（12.0%）と「学会認定（お墨付き）が欲しかったため」（9.8%）がそれぞれ１割程度でした。

3.2.2　Q3「あなたが応用心理士を取得して得られたメリットは何ですか」　応用心理士取得のメリットは､「自分に自信がついた」（35.9%）と「他者からの信頼感が増した」（26.1%）の２つの回答が特に多かったです。一方、その他の回答として「メリットはない」が15.2%を占めました。

3.2.3　Q4「あなたはお知り合いの学会員に応用心理士を取得することを勧めますか」　応用心理士資格の取得を推奨することに前向きな回答者は、「ぜひ勧めたい」（19.8%）と「やや勧めたい」（25.3%）を合わせて半数弱（45.1%）でした。しかし､推奨に対して消極的な意見も１割強（12.1%）ありました。

3.2.4　Q5「もし日本応用心理学会で応用心理士の上級資格が設置されたら、あなたはその資格に申請したいですか」　応用心理士 上級資格に対す

る申請意向として、前向きな意見は全体の４割強（「すぐに申請したい」（13.2％）と「２．申請を考えてみたい」（29.7％）の合計42.9％）でした。しかし、「申請しようとは思わない」も約３割（31.9％）あり、１/４の回答者は「わからない」と回答しました（図１）。

3.2.5　Q7「応用心理士で構成される「応用心理士会」が設立されたら、入会したいですか」 応用心理士会が設立された場合、入会に前向きな意見は全体の約７割（「ぜひ入会したい」（14.3％）と、「条件があえば、入会したい」（53.8％）の合計68.1％）を占めました（図２）。「入会したいと思わない」は２割弱でした。

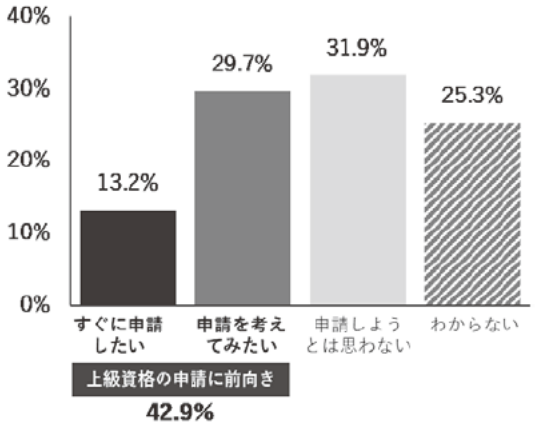


図１　応用心理士の上級資格への申請意向

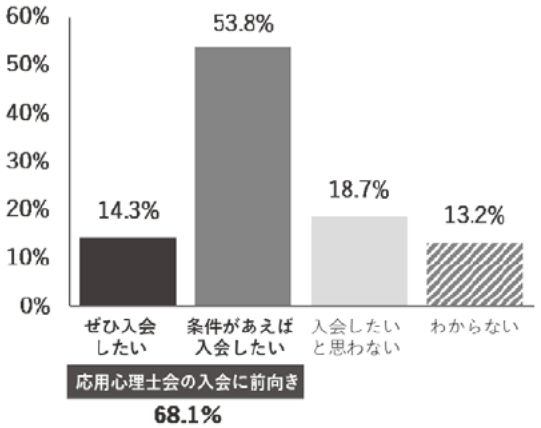


図２　「応用心理士会」への入会意向

3.3　結果の要約と考察

応用心理士上級資格の設置について、調査回答者全体の４割が上級資格が設置された場合の申請に前向きでした。特に、40代以下の若手会員と実務家会員は「すぐに申請したい」という積極的な意向が２割以上ありました。

今回の分析結果からすると応用心理士及び応用心理士上級資格によって学会員の実践的な活動のサポートができ、学会の社会的価値の向上につながると思われます。

調査結果から、**①応用心理士の価値向上**と**②会員相互の交流促進**などが主な会員ニーズとして考えられます。具体的には、(1) 応用心理士の価値向上のために、応用心理士の社会的な認知度を上げるための方法の検討が必要であり、上級資格の設置も必要であると思われます。また、(2) 会員相互の交流推進のために、応用心理士会の開設の検討、研修会の実施や会員相互の交流につながる機会の提供に関する検討、応用心理学会分科会の設置に関する検討が考えられます。また、その他として、③若手会員の学会参加意識の向上による学会活性化、④実務家会員の実践的研究のサポートの検討も望まれます。

上級応用心理士が設置された場合に申請者を増やす手立てとして考えられることは、資格取得者への研究支援や、学会へのコミットメントを高める施策を今後も継続的に展開することと、ビジネス上の応用心理士資格の利用が実践的な研究活動にもつながるよう産業の場での実践と研究の交差的支援策を生み出す必要があるでしょう。

3.4　調査の課題

回答率（返信数）があまり高くなく、実際の応用心理士の回答分布と対応しているか疑問が残りました。未回答の対象者にリマインドしなかったことも影響したかもしれません。

注）今回の「応用心理士を対象とする調査」実施にあたって、日本応用心理学会からの支援を受けた。

1

国際交流委員会

川本　利恵子（湘南医療大学）

国際交流委員会の仕事は、国際応用心理学会大会（ICAP）にて発表された会員の研究発表を英文特集号として機関誌に掲載することでした。

しかしながら、みなさんがご存じのように新型コロナウイルス（COVID-19）の全世界的な影響のため、残念なことに北京大会が中止となりICAP2023は幻の大会となりました。次回の第31回大会（ICAP2026）は、イタリア・フィレンツェにて、2026年７月21日～25日に開催されます。

現在、大会Webサイトでは、まだ申込登録（REGISTRATION）が準備中ですが、登録が行える状態になりましたら奮ってご参加の申し込みをしてくださることを期待します。その他に、国際交流に関する事業案件も当委員会の重要な活動範疇となっています。会員の皆様におかれましては、良いアイデアや情報等がございましたときには、当委員会までお知らせくださいますと幸甚です。（かわもと　りえこ）

2

齊藤勇記念出版賞選考委員会

川本　利恵子（湘南医療大学）

この賞は、本学会名誉会員の齊藤勇先生のご趣旨および基金により平成27（2015）年４月より施行している出版賞です。本学会の会員により、応用心理学や心理学のテーマを、心理学を専門としない一般の方々にわかりやすく書かれた書籍とその著者を表彰することを目的としています。出版賞の対象書籍は、本学会会員による推薦（他薦・自薦）により、選考委員会で検討された受賞候補者を常任理事会にて決定されます。出版された当該年度（4月１日～３月31日）の書籍について、原則単著、当該年度内に１冊としています。出版された次年度の年次総会において、「齊藤勇記念出版賞」が授与されます。

2022年度として2023年３月に一般会員から推薦図書が提出されました。選考委員会および常任理事会にて検討され、受賞が決まりましたのでご紹介します。

著書名：高齢ドライバーの意識革命　安全ゆとり運転で事故防止
著者名：松浦常夫　発行所：福村出版　発行年月日：2022年４月20日

「安全ゆとり運転」とは加齢による認知・技能の衰えを補う運転戦略のこと。その代表的な20項目（加齢に伴う視機能の低下、雨天時の路面の滑りやすさ、運転疲労、ルート選択、安全運転サポート車、時間管理、運転に危険な病気と老年症候群、ためこみ症、同乗者の影響、急ぎ運転してもあまり時間は変わらない、速度を出してしまう理由、予期、信号のない交差点での出合頭事故のパターン、運転中の怒り、分割的注意、ボトムアップ処理とトップダウン処理、見える危険と見えない危険、車間距離と停止距離、あおり運転、リスクテイキング）を取り上げ、楽しいドライブライフを長く続けるための心構えと工夫をアドバイス。

以上、避けては通れない「高齢ドライバー」、会員の皆様も是非ご一読ください。（かわもと　りえこ）

3 機関誌編集委員会

上瀬　由美子（立正大学）

2021年４月から機関誌編集委員長を務めさせていただきました。歴史ある『応用心理学研究』の編集作業を取りまとめるものとして強い重責を感じながらの長い日々でしたが、軽部副委員長と編集委員の皆さま、理事長･副理事長に支えていただき、何とか無事に47巻（1～３号）･48巻（1～３号）･49巻（1～３号）を発行することができました。コロナ禍を受けての増減はありましたがこの３年間で本誌の投稿数は先の３年間とほぼ同様の形で安定しており、また論文採択率もおよそ５割で推移しています。規模の小さい学会ながら年３回の学会誌発行を維持していることは、会員の方々の活発な論文投稿のおかげであるとともに、論文掲載に向けて（日々のお仕事で忙しいにもかかわらず）丁寧な査読を行なっていただいた先生方のご協力の賜物です。学会誌編集に関わりますと、１号１号の発行がいかに多くの方のご厚意によって成り立っているかを実感いたします。関係の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

今期の３年間はコロナ禍の最中に始まり、第１回目の編集委員会はオンラインで実施され、最後の2023年度になりようやく対面開催となりました。この間、APA執筆マニュアル変更や研究倫理への配慮要請を受けて、投稿・編集規程の改正、執筆要領の改正を行いました。それに伴い『応用心理学研究』体裁の調整や投稿論文の形式確認なども必要となり、試行錯誤が続きました。本委員会で課題となった事柄については、次期委員会で検討していただけるよう引き継ぎを行って参ります。

日本応用心理学会はその裾野の広さが大きな魅力です。研究領域の多様性だけでなく会員が研究を行う場も様々であり、そのことがお互いの研究を尊重する姿勢となり、本誌のおおらかな雰囲気の醸成にもつながっています。今後も『応用心理学研究』が学術誌としての質を保ちながら、会員の皆様の多様な研究活動を支える活発な場となり続けることを祈念いたします。（かみせ　ゆみこ）

4 学会活性・研究支援委員会

田中　堅一郎（日本大学）

当委員会は、日本応用心理学会の活性化と研究支援（とりわけ若手会員の研究支援）を中心に活動しています。当委員会は私（田中）が委員長を担当し、外島 裕先生（副委員長、日本大学名誉教授）を始め、稲葉　隆先生（日本カラーデザイン研究所）、小林敦子先生（川越市男女共同参画審議会）、種ヶ嶋尚志先生（日本大学スポーツ科学部）、和田万紀先生（日本大学法学部）の委員で構成されます。

１．当委員会３カ年間の総括

学会活性・研究支援委員会の委員長を拝命してから３年経過しました。常任理事どころか、日本応用心理学会の理事になったのも始めてだったせいもあり、正直申し上げて委員会運営にあたっては戸惑うことが多かったです。それでも、前任者が現理事長であったことと、前常任理事の外島裕先生に構成委員になっていただいたことで、戸惑いもすこし緩和されました。まず委員長になって私が思案したのは委員会構成員を誰にするかでした。しかし幸いにも、この委員会の構成員の皆さんは、週末の委員会開催に積極的に参加していただき、まさに「忌憚のない」意見を多く頂きました。その議論の中での成果としては、若手

会員研究奨励賞での「若手」の範囲を拡げ、応募者数がゼロの状態から脱出できたこと、それまで審議未了だった上級応用心理士の設置を実現に向けて諮問できたこと、そして日本心理学会における認定心理士会のような「応用心理士会」開設も進言できました。外島裕先生を始めとする構成委員の方々には感謝しかありません。それでも、３年前の委員会のキックオフ・ミーティングで提起された学会活性についての課題のいくつかはまだ未着手です。それらの課題は次期委員会に託したいと思います。

２．令和５年度若手会員研究奨励賞の応募状況

令和５年度の若手会員研究奨励賞の応募は2023年11月30日に締め切られ、４名のエントリーがありました。この人数は日本応用心理学会でこの制度が始まって以来、最も多い人数です。受賞枠は３名となっていますが、現在（2024年１月24日）私（田中）を含めた５名で審査を行っております。審査結果を会員の皆様に報告できるのは４月頃になるかと思います。（たなか けんいちろう）

5 広報委員会

谷口 淳一（帝塚山大学）

広報委員会では８月にクロスロード第15号を発刊しました。年度内発行という暗黙のルールを破ってしまった第14号の反省を活かせず、さらに遅い発刊となってしまいました。ただ、第15号の「常任理事会通信」で経過を報告していたとおり、久々の対面大会となった京都工芸繊維大学での第88回大会の興奮が伝わる玉稿の数々で、充実の紙面をお届けすることができました。

2023年度は今期のメンバーで活動する最後の年度となり、本紙面である16号については３度目の正直で必ず年度内に完成させなければならないという使命のもと活動をスタートしました。第16号ではこれまで広報委員会で温めてきた企画を実行すべく、吉澤委員、谷田委員、古谷委員がそれぞれ特別企画を担当、実施しました。いずれの企画も、応用心理学の魅力である多様性、学際性をより広げるためのヒントを提供する内容になっていると自負しております。

また、2023年の８月に全面対面で開催されました亜細亜大学での第89回大会の記事も多くの先生方に執筆していただきました。今回もポスター発表に押しかけて、はじめましてのご挨拶とともに原稿依頼をお願いしましたが、すべての先生方がご快諾してくださり、玉稿をお寄せくださいました。

今期の広報委員会はコロナ禍のなかスタートし、一度も委員が対面で集まって顔を合わせることは叶いませんでした。それでもzoom会議や日常的なslackでのやり取りで、応用心理学会の可能性について刺激的な議論ができました。改めて委員の皆さんに感謝申し上げます。また、古屋理事長、前委員長の田中真介副理事長をはじめ学会常任理事の先生方にはクロスロードの発行が遅れても温かく見守っていただきました。14号～16号まですべてぎりぎりの依頼となり、納期も短いなか、無理なお願いを毎回聞いて下さり、こちらの要望通りの紙面を作成してくださった杏林舎様にもお礼申し上げます。

偉大な先人の先生方から引き継いだクロスロードですがなんとか次の広報委員会チームに託せそうです。会員のみなさま、どうか次号以降も原稿執筆よろしくお願いいたします。（たにぐち じゅんいち）

企画委員会

桐生　正幸（東洋大学）

2023年度の企画委員は、引き続き、桐生正幸（東洋大学）、上市秀雄（筑波大学）、島田恭子（東洋大学・㈳ココロバランス研究所）、小島理江（名古屋大学）の４名のメンバーにて運営を致しました。実施した企画は、「学会研修会」と「公開シンポジウム」の２つになります。

1　応用心理士研修会

2023年度第89回大会（亜細亜大学、８/26-27）にて、２題の研修会を実施しました。

テーマは、AIとメンタルヘルスや犯罪行動予測について、それぞれの研究と実践についてお話いただきました。両日とも、活発な質疑が行われ実りある研修会となったところです。

研修会A：８月26日（土）宮中大介先生
　株式会社ベターオプションズ代表取締役社長；慶應義塾大学政策・メディア研究科
　　演題：「産業保健心理学領域におけるAI活用の現状、課題、可能性について」
　　司会：島田恭子（東洋大学；ココロバランス研究所）
研修会B：８月27日（日）梶田真実先生
　株式会社Singular Perturbations、CEO；東京大学空間情報科学研究センター
　　演題：「AI犯罪予測が警察業務をどう変える？- 最適化アルゴリズムとフィールド実験から学ぶ」
　　司会：桐生正幸（東洋大学）

2　公開シンポジウム

以下の内容にて開催いたしました。公開シンポジウムのタイトル　は「ネガティブな感情・心理の活用と応用」であり、企画代表者は上市先生でした。

日時：2023年12月17日（日）14：00～16：30
場所：筑波大学東京キャンパス134講義室
挨拶：古屋　健（日本応用心理学会理事長）
話題提供：上市秀雄（筑波大学システム情報系）
　　永岑光恵（東京工業大学リーダーシップ教育院/リベラルアーツ研究教育院）
　　讃井　知（上智大学基盤教育センター）
　　藤井陽一朗（明治大学商学部）
指定討論：楠見　孝（京都大学大学院教育学研究科）
司　　会：小嶋理江（名古屋大学）

企画委員のメンバーが３年目ということもあり、この度も無事に乗り切れたところですが、特に上市先生のご尽力により、素晴らしい企画運営となったところです。本当にありがとうございました。会場からも、多くの質問があり活発な討議が行われ、大変有意義な公開シンポジウムとなったところです。

（きりう　まさゆき）

7

倫理委員会

田中　真介（京都大学）

■本年度の活動

今期は、田中真介（京都大学）、大坊郁夫（北星学園大学）、蓮花一己（帝塚山大学）、外島裕（日本大学）が担当しました。

倫理委員会は従来、会員の研究活動に何らかの倫理的な問題があったときに、よりよい対応を考えて支援するといった役割を担ってきました。今期は、私たち自身の研究そのものの取り組みの過程で、倫理的な見方・考え方そのものが深まっていくような経験が重要ではないかと考えて、新たな活動のあり方を模索しておりました。

具体的には、①機関誌編集委員会や各年度の大会委員会と連携して、会員の研究活動や投稿論文での倫理的配慮についてアドバイスする中で、倫理的サポートの新たな内容と方法のあり方を考えていきました。その際に、各大学や機関の「倫理綱領」「倫理規程」を参照し、倫理委員が所属する大学や諸学会の関連資料の比較検討を行いました。また、会員の方々にも協力を仰いで、各大学の倫理審査の実情や課題について話を伺い、研究倫理及び研究対象者の保護について最新の情報を収集しました。

…

■次期への期待と展望

本学会の倫理綱領は、第１期の倫理委員会（2003～2005年度；藤田主一、浮谷秀一、田中昌人、福原眞知子）の中に「倫理綱領作成委員会」が発足して上梓されました。

*日本応用心理学会「倫理綱領」：https://j-aap.jp/kitei/rinri.pdf

本学会は、基礎研究の成果を生かしながら、社会の現実場面での心理学的な問題をとらえて解決していく力を培ってきた学会として、心理学系の諸学会の中でも独自の位置と歴史を持っています。その貴重な到達点をもとに、これまで以上に研究対象を大切にして、対象のもつ問題をあたたかくより実践的・臨床的に受けとめて、その人間的な価値を尊重し、研究を通じてその方たちや私たち研究者自身の力と人間性が豊かに育まれていくような見方・考え方を、これからも皆さん自身で独自に培っていっていただければと期待しています。そのことが、本学会も含めて、21世紀に入って新たな一千年紀を切り開いていく学術研究の分野が協力しあって到達していくような、総合的な課題でもあるのではないかと考えています。

（たなか　しんすけ）

8

事務局だより

軽部　幸浩（日本大学）

日本応用心理学会は、もう少しで100年を迎えます。街のお店を例にあげるとしたら、創業から100年以上続けば「老舗」の仲間入りです。

さて、今期は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響もあり、第87回大会（東北文教大学，山形県）はオンラインでのWeb大会、第88回大会（京都工芸繊維大学，京都府）はハイブリッド大会でした。令和５年５月８日から新型コロナウイルス感染症が５類感染症に位置づけられたことで、第89回大会（亜

細亜大学，東京都）は、久しぶりの全面対面による大会となりました。過去３回の学会大会は、毎年開催方法が変わったため、大会をお引き受けくださった大会委員長ならびに委員の先生、大会スタッフのご苦労も多かったことと拝察します。ここで、あらためて御礼を申し上げます。

日本応用心理学会事務局では、会員の皆様からの問合せや新入会員・各種申請書の受付など、さまざまな事務処理を一手に引き受けています。会員の皆様におかれましては、お気づきのことがございましたら、どうかご遠慮なく学会Webサイトに用意してある「問い合わせ」に忌憚のないご意見やご要望をお送りください。できるだけ会員からのご意見やご要望を反映し、より一層の素晴らしい学会にしたいと考えています。

最後になりますが、学会事務の業務委託を締結した株式会社国際ビジネス研究センター（International Business Institute Co., Ltd.：IBI）には、日頃から多大なる尽力を賜っており、深甚なる感謝を申し上げます。（かるべ ゆきひろ）

9 学会賞選考委員会～学会賞規程の改正について～

木村 友昭（一般財団法人MOA健康科学センター）

学会賞選考委員会では、学会賞の選考と、優秀大会発表賞の選考を行っています。学会賞は、「応用心理学研究」に掲載された論文の中から、理事・監事の先生方の推薦をもとに選考し、その結果を常任理事会で審議いただき決定します。一方、優秀大会発表賞は、大会の一般発表の中から、参加された会員の皆さんの投票結果をもとに選考します。これまでの受賞者については、学会ホームページに一覧表が掲載されています。

2023年の理事会において、学会賞規程が改正されました。これまで、学会賞規程と学会賞選考細則がありましたが、これらを併合して、一つの規程にまとめました。従来の学会賞には、「論文賞」と「奨励賞」がありましたが、これらの名称が「優秀論文賞（Best Paper Award）」と「奨励論文賞（Encouragement Award）」に変わりました。また、理事・監事の推薦は、他薦だけでなく自薦も可であることが明記されました。さらに、優秀論文賞の受賞は、原則として１回に制限されました。これは、多くの会員の方に受賞の機会を提供するためのものです。来年度（2024年度）から、この改正された学会賞規程によって選考されることになっています。

私は、２期６年間、学会賞選考委員長を務めさせていただきました。選考に当たっては公正さを最優先し、委員会メンバーの満場一致で決めることを原則としてまいりました。今年度で任期満了になりますので、次期委員会に引き継ぎたく存じます。（きむら ともあき）

10

学会史編纂委員会

委員長 古屋　健（立正大学）・委員 軽部　幸浩、藤田　主一

学会史編纂委員会は、2016（平成28）年、藤田前理事長の提案により理事長直轄の委員会として設置されました。本委員会の使命は、学会設立100周年の節目へ向け、学会が有する豊富な情報や学会に関するさまざまな資料・史料をアーカイブすることにあります。そのために、本委員会ではこれまで①本学会に関わる資料・史料の蒐集と編纂、②蒐集した成果の公表、③名誉会員へのインタビュー、④『日本応用心理学会100年史』の編集・発行準備、等の活動を計画的に進めてきました。

名誉会員へのインタビューでは、学会の発展にご貢献のあった名誉会員の先生方に直接お会いして、本学会でのご活動やご自身のご研究のこと、また会員の皆様や今後の心理学界へのご提言などについてお話をうかがってまいりました。これは本委員会の活動計画の目玉なのですが、新型コロナウィルス感染拡大のために2020（令和２）年度から３年連続で実施できずにおりました。しかし、感染が下火になった本年度になり、ようやく再開することができました。名誉会員の皆様には、今後、順次お声がけさせていただきますので、その際にはよろしくご協力賜りたく、お願い申し上げます。

今年はまた思いがけない発見もありました。学会HPに「応心アーカイブ」のページがあります。その中で1953年から1954年にかけて本学会が編集刊行した「心理学講座全16巻」を紹介するだけでなく、配本附録であった「心理学講座たより」をPDFファイルとして公開しております。しかし、その第14巻の「心理学講座たより」だけは、今までずっと入手できずに欠落しておりました。それが、なんと私の勤務する立正大学の心理学研究所が保有する書籍の中に残されていたのです。見つけたのは、本委員会のメンバーでもある軽部事務局長です。たまたま常任理事会のために研究所の会議室を訪れ、たまたま休憩時間に本棚を眺めていて目に留まったそうです。これで全巻分の「心理学講座たより」が揃ったことになります。身近にこのようなお宝が隠れていたとは、思ってもみませんでした。

そこで、毎度の呼びかけになりますが、本誌をお読みの方にお願いです。たとえば、転勤・引っ越しなどの折、本学会に関わりのありそうな古い資料や冊子などが偶然に見つかることがあるかもしれません。もし皆様の周辺で、何かこのような本学会に関わる貴重な資料・史料と思われるものがございましたら、是非とも、学会事務局までご一報いただければ幸いです。

（ふるや たけし・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち）

11

心理学検定

小林　剛史（文京学院大学）

2021年度からComputer Based Testing（CBT）化しました心理学検定の受検方法も、2023年度末までに５回のCBTによる検定を実施するに至っています。これも皆様のご協力あってのことと、心より御礼申しあげます。

心理学検定の実施期間については、夏期（7月中旬から８月末）および春期（2月中旬から３月末）とも１ヶ月半を設けることで、受検者のみなさまの利便を可能なかぎり考慮させていただいております。春期

の検定については未だ認知が広がっていないようですので、ぜひ団体受検も含めてご検討いただければ幸甚です。特に心理学検定ご担当（代表者）の教職員のみなさまにおかれましては、検定が年２回ということで、代表者としての申込をお忘れがちになるものと拝察します。そこで、ここにリマインダーとなり得る時期についてお知らせします。団体受検代表者の申込時期は、夏期は５月10日前後、春期は12月10日前後です。ぜひ毎年の予定表に組み込んでいただければ幸甚です。なお、団体受検の代表者の申込は、心理学検定のホームページからですと、「受検の流れ」からになります。しかし、やや申込フォームにたどりつきにくくなっております。そこで、直URLをここにお知らせしておきます。どうぞ宜しくお願いいたします。

団体申込（代表者）フォームのURL：https://jupaken.jp/subscription/group.php

心理学検定も2024年度末には20回目の実施を迎える予定です。より多くの方々が可能なかぎり不自由を感じることなく受検可能な体制を、構築して参りたいと考えております。今後ともどうかご指導の程、宜しくお願い申しあげます。（こばやし たけふみ）

2023年度日本応用心理学会学会賞

［敬称略、所属は論文掲載当時、順不同］

論文賞

該当者なし

奨励賞

「健康状態の低下した日本人高齢者における適応的受容と幸福感
— M-GTAによる中核・拡張モデルの試案 —」

田中　共子（岡山大学学術研究院社会文化科学学域）
沼　　柊門（メディカル・ケア・サービス関西株式会社
愛の家グループホーム玉野）

［掲載雑誌］
『応用心理学研究』　第48巻 第3号，158-167，2023

学会だより

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込みください。
このページをコピーし必要事項を記入して、学会事務局宛までご郵送ください。

日本応用心理学会入会申込書（一般・院生・学生）注2，注3

		申込年月日	20　年　月　日
フリガナ		推薦者（会員）注6	
氏　名			㊞
ローマ字		性　別	男・女
		生年月日	年　月　日
現住所	〒＿＿＿＿		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	〔　年　月〕【在学中のものではなく，卒業あるいは中退・修了について学科名まで】		
所　属注4	名　称		
	所在地	〒＿＿＿＿　電話番号＿＿＿＿（　　）＿＿＿＿	
	職名 現学歴	【職名の場合には年数，院生の場合には課程・専攻，学部の場合には学校名・学年】	
研究領域注5	テーマ		
	原理　学習　認知　感情　教育　発達　人格　臨床　福祉　相談　健康　看護 医療　犯罪　社会　文化　産業　交通　災害　スポーツ　生理　行動分析　調査 統計　その他（　　）		
メールアドレス			
備　考			

※申込用紙の個人情報は、学会活動や運営上必要な事務連絡、本学会の事業目的達成のため以外に利用されることはありません。

記入上の注意

注1．楷書で正確に記入してください。
注2．申込書の上部に書かれている会員種別で，希望する会員の種類を○印で囲んでください。
注3．一般会員，院生会員の入会資格は，会則第4条第2項に次のように定められています。
一般会員，院生会員の入会資格は，次の通りとする。
(1)四年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
(2)一般社団法人日本心理学諸学会連合が認定する心理学検定1級合格者で22歳以上の者
(3)第1号に準じ常任理事会が認める者
(1)の隣接分野とは以下の分野を指しています。
教育学，児童学，人間関係学，体育学，社会学，社会福祉学，芸術学，宗教学，医学（心身医学，精神医学，行動医学など），看護学，経営学，認知科学（人口頭脳など），人間工学，など。
(1)の入会資格に該当しないと判断される場合は，備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴（年数）をできるだけ詳しく書いてください。(2)の入会資格にて入会を申し込まれる場合は心理学検定1級合格証のコピーを添付してください。(3)の第1号に準じるものと認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。後日さらに詳細な資料を求める場合もありますのでご了承ください。
注4．社会人学生の場合には，在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
注5．研究領域は，主な3領域を○印にて囲んでください（3つを超えて○印を付けてもかまいません）。
注6．推薦者を必ず書き署名・捺印をもらってください。推薦者がいない場合には，理由書を添付してください。

事務局受付〔　　〕 審査〔　　〕 本人連絡〔　　〕 会費納入〔　　〕

「応用心理士」のご案内

小林　剛史
（「応用心理士」認定審査委員会 委員長）

日本応用心理学会では、学会員で業績のあるものに対し、本人の申請により一定の手続を経て、「応用心理士」の資格認定証を交付しています。

資格認定は、厳重な試験に合格しなければ一定の資格を取得できないものもありますし、心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり、まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて、学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること、きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしています。この資格は、個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられています。

「応用心理士」は資格であって免許ではありませんが、これを所持することによって職場における活動は現在よりもさらに拡大され、多くの人びとの承認を受けると思っています。もちろんこの「応用心理士」の資格を取得したからといってなんでもできるわけではありません。人事・労務関係、医療・看護関係、司法矯正関係、交通関係、教育関係、相談関係などの仕事に従事している人が、心理学的な仕事の重要性をわきまえ、十分留意して活動することが必要であると考えています。

「応用心理士」の資格要件をご参照の上、認定審査の申請をされますことをお待ちいたしております。

日本応用心理学会認定 「応用心理士」資格認定申請の御案内

「応用心理士」事務局

本誌の「応用心理士の現場」では，応用心理士資格を活かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多趣多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が１人でも多くなりますよう，ぜひ資格の取得をお勧めします。

【認定制度の趣旨】

日本応用心理学会では，学会員で業績のあるものに対し，本人の希望により一定の手続を経て，標記の「応用心理士」の資格認定証を交付することにいたしました。

現在，いくつかの心理学関係の学会で資格を認定しています。厳重な試験に合格しなければ一定の資格を認定しないところもありますし，心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり，まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて，学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること，きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしました。資格要件の詳細についてはこの手引きのなかに明記されています。この資格は，個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられたものです。

【資格要件】

学会で認定する「応用心理士」は，学会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

資格の要件は，日本応用心理学会認定　「応用心理士」認定制度による認定資格の基礎的条件として，本学会に入会後満 2 年を経過し，現在会員であることが必要です。

さらに，次の（1）から（4）のいずれか 1 つに該当し，応用心理学の専門職としての資質があると認められた人に認定されます。なお，（1）から（4）のいずれかの要件も完全に満たすことができない場合は，該当内容を総合し，判断されます。

（1）　学校教育法に定められた大学または大学院において，心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者（学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む）。

（2）　本学会機関誌『応用心理学研究』に 1 件以上の研究論文（共著も含む）を発表した人，または本学会の年次大会において 2 件以上の研究発表（単独発表または責任発表のもの）をした者。

（3）　認定審査委員会が応用心理学と関係があると認めた専門職で，3 年以上の経験を有する者。

（4）　応用心理学と関係ある職で 3 年以上の経験を有し，本学会研修委員会企画の「研修会」に 5 回以上参加した者（申請時に 5 回分の「受講証明書」を添付してください）。

【資格申請の手続き】

会員で日本応用心理学会認定　「応用心理士」の資格を得ようとする人は，以下の順序に従って申請の手続をしてください。

［1］「応用心理士」の資格申請書類をダウンロードしてください（学会ホームページに掲載）。

［2］申請書類に所要事項を記入し，下記の申請受付期間内に，送付してください。

［3］審査料（10,000 円）は，郵便振替で送金してください。
郵便振替の振込先
口座番号　　00110－6－359059
加入者名　　日本応用心理学会
※注意：申請書類一式の中に同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

［4］提出する申請書は次の通りです（提出の際確認してください）。
（1）様式 1（資格認定申請書）
※所定の枠内に証明証用カラー写真（ヨコ 35mm，タテ 45mm）を貼付してください。
※審査料の振込金受領証をコピーし貼付してください。
（2）様式 2-1（履歴書）
（3）様式 2-2（業績書）
（4）「研修会」参加を資格要件とする場合は，「受講証明書」5 回分を添付してください。

［5］認定審査委員会では，提出された書類について審査し，結果を文書にて，申請者に通知します。合格した人は認定料（30,000 円）を納入してください。入金されますと，日本応用心理学会認定　「応用心理士」として認定し認定証を交付します。また，日本応用心理学会認定　「応用心理士」名簿に登録するとともに，本学会機関誌『応用心理学研究』に掲載して公表します。

応用心理士認定書（カード）の見本

【申請受付期間】

	【前　期】	【後　期】
申請受付期間	毎年 4 月 1 日～6 月末日	10 月 1 日～12 月末日
審査結果通知	8 月上旬	翌年 2 月上旬
認定料納入日	8 月下旬まで	翌年 2 月下旬まで
認定証の送付	9 月下旬	翌年 3 月下旬

【応用心理士事務局】

日本応用心理学会認定　「応用心理士」事務局
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町 518　司ビル 3F
株式会社　国際ビジネス研究センター内

広報委員会

谷口　淳一　（委員長）
森泉　慎吾　（副委員長）
谷田　林士
古谷　嘉一郎
森下　雄輔
吉澤　寛之

表紙写真：「春のいぶき」
2021年３月27日
（撮影：森下雄輔）

応用心理学のクロスロード Vol.16

編集・発行　日本応用心理学会
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518
司ビル3F
（株）国際ビジネス研究センター内
TEL.03-5273-0473
FAX.03-3203-5964
E-mail　j-aap@ibi-japan.co.jp
HP　https://j-aap.jp/

デザイン　株式会社 杏林舎
印刷・製本　株式会社 杏林舎

2024年３月31日 発行

編集後記

■　桜が咲く前にお届けするという目標は担当の３年間ついぞ達成できませんでした。ただ、その現実を差し引いてもこの16号は自信をもってお届けすることができました。盛会となった亜細亜大学での大会報告に加え、今回は広報委員による３つの特別企画を掲載しました。いずれも３年間温めていた企画です。いずれの企画もこれからの応用心理学会の道筋を示すような記事になっていると自負しています。執筆いただいた先生方、そして広報委員に無理やり引き込んでしまった委員の皆様に改めて感謝申し上げます。このご恩は一生忘れません（涙）。結局、打ち上げもできませんでしたが、必ずどこかで集まりましょう！（谷口　淳一）

■　今号も、原稿依頼を差し上げました先生方におかれましては、執筆をご快諾頂き、また大変貴重なご寄稿を賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。今号で現体制の広報委員会は一旦の区切りとなり、この「クロスロード」も新たな先生方にバトンタッチすることになります。大抵のお仕事は（申し訳ないことに…）谷口委員長がされておられましたが、「クロスロード」をきっかけとして、応用心理学会の会員の先生方と交流を持つことができたことは私にとってとても有難いことでした。今後も「クロスロード」が、学会大会とは違う形で、会員の皆さまの交流の輪を広げるきっかけになることを期待しています。（森泉　慎吾）

■　学会員として歴の浅い私でしたが、クロスロードの編集に携わる過程を通じて、より応用心理学研究への関心が高まりました。さらに谷口委員長の巧みな采配により、広報委員の任を果たすことができていると実感する日々でした。
（谷田　林士）

■　今回は新しい企画に挑戦しました。心理系以外の学部や学科で心理学を教えることの難しさ、また教え方や工夫について、研究仲間の村山さんとお話しました。この難しさを払拭する特効薬はないでしょうし、おそらくこれからも悩むことになるでしょう。そのために、小さな改善を重ねていく必要があるでしょう。加えて、近年、大学教員を取り巻く状況は厳しくなっています。だからこそ、限られたリソースの中でどこまでできるか、また、そのリソースをどのように手に入れるかについて考えていかなければならないと思いながら、研究と教育に挑んでいかなければならないと感じています。
（古谷　嘉一郎）

■　３年の間、広報委員として編集に関わらせて頂き、皆さんに３号目の「クロスロード」をお届けすることができました。谷口委員長、および他の委員の先生方に支えられながら、なんとか任期を終えることができました。とはいえ、私が貢献できたことはほとんどなく、お力になれなかったことを反省するばかりです。今号には、私が執筆したコラムも３号連続で掲載させて頂きました。宜しければご笑覧下さい。最後になりますが、広報委員としての３年間を終えるにあたり、この場を借りて皆様に感謝の意を表したいと思います。今後も「クロスロード」が学会員の交流と発展に貢献していくことを心より願っています。（森下　雄輔）

■　広報委員会の任期最後の年に、特別企画を担当させていただき、積年の委員の責務を果たせました。心理学者になる前は工学技術者で、異分野学際的な志向はありましたので、ごく自然な流れで企画を提案できました。人工知能や仮想・拡張・複合現実などの技術は世の中のありようを覆すような状況で、心理学者もこうした技術とは無縁の状態でいられないと思います。本企画が少しでも先生方の研究の発展につながれば幸いです。任期の間、委員長や副委員長はじめメンバーの先生方には甘えっぱなしでした。今後、公私共にさらに関係が深まり、貢献できる機会があることを祈りつつ、最後の結びといたします。（吉澤　寛之）

幅広い心理学の知識を測定する、学術団体が直接行っている信頼できる検定です。

一般社団法人 日本心理学諸学会連合 認定

心理学検定

受検資格

学歴・年齢問わず受検を希望する全ての方に受検資格があります。

出題科目

心理学の10科目を出題します。科目は2領域に分類され、1科目あたり20問出題します。

A領域【原理・研究法・歴史】【学習・認知・知覚】【発達・教育】【社会・感情・性格】【臨床・障害】
B領域【神経・生理】【統計・測定・評価】【産業・組織】【健康・福祉】【犯罪・非行】

出題方式・試験時間

多肢選択方式で出題します。試験時間はA領域/B領域ともに100分間です。

試験方式

コンピューターを使用して試験を行うCBT方式で実施します。試験期間中、全国47都道府県にある試験会場からご都合の良い試験会場・日時を選ぶことができます。

資格認定

合格科目数に応じて、「特1級」「1級」「2級」の三種の級を認定します。

特1級 A領域5科目・B領域5科目 全10科目の合格者

1級 A領域4科目を含む合計6科目以上の合格者

2級 A領域2科目を含む合計3科目以上の合格者

合格科目有効制度

各科目の合格は、一定期間「合格」として認められます。一回の受検で資格認定基準を満たす必要はなく、複数回受検することで、より上位の級へ段階的に挑戦することができます。

受検料

受検領域	一般	団体※2
A領域	¥7,700	¥6,600
B領域	¥7,700	¥6,600
A+B領域※1	¥12,100	¥9,900

※1 A+B領域セット割引を適用した金額です。
※2 代表者による団体申込と10名以上の受検申込で適用されます。

心理学を極める人も。
心理学を始める人も。

検定局発行のさまざまな書籍を発売中です！

受検申込・受検予約方法

A領域／B領域 個別申込

受検予約サイトで試験会場・日時の予約
（コンビニ/Pay-easy/クレジット払い）

予約した試験会場・日時で試験実施

A+B領域 割引セット

心理学検定ホームページより
A+B領域セット割引の申込

受検料を指定口座へ振込
（受検チケット入手）

受検予約サイトで試験会場・日時の予約
（受検チケット払い）

予約した試験会場・日時で試験実施

※団体の方は、団体代表者からの案内に基づいて受検申込・受検予約を行ってください。

お問い合わせ
心理学検定局 〒113-0033 東京都文京区本郷5-26-5-901
E-mail : info@jupaken.jp　Fax : 03-3830-0303

お申し込みはこちら。今すぐ詳細を確認！
https://jupaken.jp/